岳山

第十三年

第二號

山岳

第十三年 第二號

登山ノ注意

登山期ノ來ラントスルニ際シ吾人ハ會員ノ後援ニ由リテ「登山ノ注意」ノ普及發達ヲ計ラントス。

未經驗者ノ無準備、不注意ナル登山ハ自ラ身ヲ殺スト何等選ブ所ナシ。

登山ノ注意ハ豫備的知識ノ涵養ト充全ナル準備トニアリ敢テ會員及ビ同好諸君ノ後援ニ由リ此等未經驗者ノタメ「登山ノ注意」ヲ高唱シ以テ其災害ヲ未前ニ防ガントス。

目次

（大正八年四月發行）

表紙……中村清太郎氏圖案

挿畫

ロホナガール頂上の東望　辻村伊助氏撮影……一六頁
ロホナガールの積石（ケールン）　同上……二四
ロホナガールのサーカス　同上……三二
ディー川の水源　同上……四〇
ケールンゴルム山脈の一部　同上……四八
カーランダー、クレーの附近　同上……五六
ベンレディ　同上……六四

本欄

「だうだん」の惠那山　西園寺萇公……一頁

ハイランド　農學士　辻　村　伊　助……一二

雜　錄

○立山東面の登山路に就て（冠）　○大日岳早乙女岳奥大日岳登路（冠）　○高山植物雜記（二）（武田久吉）　○ L' Amateur の科學（森の人）　○丹澤山塊（きた生）　○仙丈岳より鹽見まで　○芦國最初の登山鐵道（たゝ、た）　○山ばなし（高頭義明）
登山案内者（二）
○大町登山案内者組合（百瀬慎太郎）　○甲斐柳澤（武田久吉）　○白馬岳の人夫（河野齡藏）　○南アルプスの案内者（沼井生）
山岳彙報（二）
○藏王山凍死事件につき（飯柴永吉）

雜　報

○藏王山の慘事

會　報

○第十二回大會豫告○第三回小集會○第廿回有志晩餐會○會員通信○星忠芳君逝く○木本光三郎氏逝く○會員寺崎廣樂氏逝く○原稿蒐集所○訂正○會務報告○寄贈圖書

英文附錄

本號卷末英文附錄目次あり就て見られたし）

「だうだん」の惠那山

西園寺萇公

大正六年九月秋の日曜は皇靈祭と續いて山登りに絶好の時を得た、そして此二日を如何に有益に費すべきかを考へた。曰く御嶽、曰く駒ヶ岳と、既に山容は吾々の眼前に犇々と迫つて來る樣であつたけれども、年齒僅かに十三歳の給仕を交へての擧としては、餘りに山路の困難と日程の少きとに、頭を幾度か惱すべく餘義なくされて、擧は終に惠那山行と決定したのである。針路は中央線中津驛に下車し、山を挾んで歸路を信州路にとり、木曾川賤母發電水力工事を視ようと考へたのであつた。

九月二十日千種發午後六時半の列車は吾々青年十一名と少年七名とを載せて、三十近いとんねるを木曾へ信濃へと走つた。冬服防寒の用意は、蒸し暑き車中に却て一行を苦しめる程であつた。三時間半の後に中津驛からすぐの梅信亭に、十八の枕は靜かに並んだのであつた。

明れば翌二十三日、前日注文した金剛杖と藺の莫蓙とを配る。杖に御嶽登山と云ふ烙印がある、どうしたのかと聞けば、惠那登りのためにはまだ出來て居らないから木曾福島から取寄せたとのことである。

水の如き旅情は流れて、かりそめの心にも霧深く眠つた山は、その隱遁的な姿を、時に美濃路獨特の赤土山の蔭に莞爾として現はしたのである。家並低い町を離れて土橋を渡れば秋は野菊の薄紫の花にさへ寂しく、川に沿ふて行けば、雲母を浮せた花崗岩が轉々と、蚊帳釣草や野菊の影さへ所々にみえるのも、心細い感じを深からしめた。山家の秋は水の音、篁の樣、幽禽の姿にもその神秘の色を湛えて居る。此中津方面一體の地層は花崗岩盤で、井水を得るに困難だと云ふ。そこで川のあそこ、堤

のこゝに、砂を掘りて板圍をして川水を湛えて居る。水は非常に豐富で而もそれを得るに不自由である。中津の町の或部分では、山から木樋で水を辻のタンクに採りて用ひて居るなど、水道に似たものがある。

町から十四五町の所、そこに機械と人工の音は聞えて中央製紙會社の吐き出す水は青く濁つた、不快な工業色を呈したとも云ふべき水が、川上（カハレ）川俗名中津川に沿ひて作られた、特殊水路を流れて居る。即ち川上（カハレ）登山口は此の川に沿ふて行くのである、此邊一帶に水量の少いのは中央製紙會社が上流で約四十個位の水を取入れて百餘尺の落差でウオタータービンを運轉して居るからである。牛ヶ瀨の奇岩はこゝより五町。右側にその自然の產物を美の世界に羅列し水は碧を增して秋とはいへ、まだ殘葉の青きさへ石の淸白に參差として峽谷の美觀を作して居るのである。此の行の豫定は今日の正午に頂上をきはめ、午後一時下山、午後六時信州馬籠（マゴメ）の宿へ辿り着くべく、梅信亭の法被人足を傭ふて荷を負はせ、川上から川上青年會の青年五人を傭ふて案內人とした。ショウガニ谷を登ること五六町で、惠那前宮の鳥居の處に着いた。此の行程中津の町を距ること二里。時は午前八時四十分である。普通はここで一泊して早朝登山する順序であるさうだが、吾々は頂上迄二里七町五十間、其間を二十合に分つた道を、一歩は一歩と一合を刻むで登るのである。前宮を下より拜して登りを急ぐ、澄明なるべき秋空は灰色の雨雲を八重に重ねて、薄れ日の光さへ覺束なく桑の畑、水田の色、白い川の石、そこにきこえる潺緩の音も徒らに曇り日の惱ましいものであつた。蜩の啼く山の端を過ぎて流に沿えば下流數町の所に「女郎瀧」がある。遣瀨ない深山娘の戀心は、野葡萄の雫にも神秘を語つて、朝な夕なの逢瀨を交した若衆の胸に犇々と刻むで、咽ぶ樣なロマンスを、今は、このさゝやかの瀧の音に語つて、行人徒らに低徊の懷みを覺えるのである。板橋を渡れば徑は登り坂となる、中央製紙云々の文字あらはな標木を傍に見て、山畑の桑に隱見する手弱女の姿も、秋の詩情を徐ろに語つて居る。

路はいよ〳〵濶葉樹林に入る、溪流の音は遠く近く我等に親しむだ、此處の傾斜(スレー)は全く「靜」より「動」の境である、黑い針葉樹に絡る、雨雲の動きも、水の色、山肌の光に惠那大森林の產む山氣はすゞろかに、二合目の建石を見出す頃は路は險に、林は深く、小禽の聲も幽かに、笹の葉の戰ぎ、地滑りの痕を左手に見て登る。

『高山植物を採集せんとする者は許可を受けよ』。との御料局の建札も深山の氣分である。冷霧さまよう林中の白樺はしとゞに濡れて、靑蘚の香漂ふ處は九合目の建石である。行くこと百間で中の小舍と云ふ、岩戸籠堂に着いた、時は午前十一時である。

山の雨は冷たい旅裝をうるほして、雲は尾より嶺より薄絹のそれの如く身に迫るのである。樹の雫、笹の葉の雨、岩窟の不動明王に湧く白雲は、歌の心句の境である。辨當の握り飯は三十分間の雨をしのいで空腹をみたした。雨具に身を包んだ一行は一歩一歩と深みゆく秋の岨路を十三合目から百五十間餘の、物見の松に足を止めて晴れ行く雨にいさゝかの喜びを得たのである。松に倚れば雲は低く高く亂れて、一葦帶水の天地である。惠那郡一圓も木曾川の淸流も、中央線の鐵路もけふはさだかならず、たゞ森林の黑影が遠く悠忽として現はれ、忽焉として雲の帳りに入るのみである。見るによしもない此山特有の石楠花の影は旅情に失望を與へて。『平原人士の石楠花の趣味を知らずにゐるのは氣の毒である』、といふ小島烏水氏の日本山水論にある語も思ひ出されて、遺憾の事であつた。斯く想へば路上は轉々とした安山岩の斷片、或は花崗岩の突兀(トツコツ)とした碎片に、草鞋は重く茲行者越の峻險を喘いで、路傍に孤影蕭然とした石像に千屈栄(ミツハキ)の花の風情も一瞥の敬意を表して、町見坂を登り、山雲屯ろする空八町の難所を攀ぢるのである。矗々とした大樹、倒れた儘の古木は、そこに太古の藝術を語り原始の靈妙を描出して、栂の疎林を透してみる、あれこれの御料林は蒼黑一大のモンスターの如く穉氣を生むで白雲に縺れ、野花幽草の上に迄大自然の舞踏を續けて居るのである。峻嶮登攀の一方法を

案出した、自分は手にする金剛杖を行手に投げて置いて、素手の四ッ這に匍匐しては繰返して登れば唵々として喘ぐのも易々として攀ぢ得べく、最初此のことを一笑に附した同行の士も軈て其奇法を眞似て興ずるのも笑止の極であつた。貧弱な水は殆ど木の葉の散るまゝにまかせた、垢離取の池を右に見て、疎らなダウダンの薄紅を彩る秋の薄れ日は、しめやかに草生を照らして晴れて行く高原の霧は靜なメロデーをつゞけてゐる。平坦な道は軈て十八合目となる。川上青年の案内につれて高山植物の說明を聞けば、彼といひ此といひ、見馴れぬ花の名草の名に、身は山上の懷しみを感じるのである。聞けば專門家のボタニー研究の結果は、此の峻峯優に一千種の植物を育んでゐるといふ。試に青年が示した路傍の草、それは「御前橘」「椶葉草」「コーモリ草」「ハリブキ」などの類である。珊瑚珠の根掛の樣な紅い珠の實をつけた御前橘や、椶葉草の雅なそして優しい名に、ほだされて、聞き覺えのある水晶蘭を叢に尋ねれば草蔭の小蛇が這ひ出すなども奇であつた。かくて落合登山口の道を合して、四五町、一の宮に至る。山の名は自然の產兒として蘚に靑く息づき、木々の茂りは秋とはいへ未だ綠を含み、傍らのダウダン（燈臺躑躅）の紅を飾つてゐるのも風情ある、ミレーの繪其儘であつた。

ダウダンは惠那山を飾る生命である。秋の聲は先づ此の高峯の一樹を染め出せば、大氣は凝つて狹霧となり、徐かに流れて美濃平野を覆ひそこに蟲の美音を生み、妙なる調をおこして琅玕詩人の心をそゝるのではあるまいか。水に影を映つすダウダンの紅、濃きに薄きに十步の樂園を築き泉水を形くり立ち竝ぶ灌木倭松の優姿に交りて咲く仙草靈卉の嬌艶仙態は土佐繪の美を描出して女性的な山の景は擴げられたのである。借問す、三保の松原は人里近きために、霓裳羽衣の曲をなし、天の羽衣風に和し、雨に潤ふ花の袖、ふりさしかざして東遊の駿河舞を人間が見たのであらう。それにひきかへ此のダウダン仙境は海をぬく七千尺の人寰を隔りゐるので、降りて集ひ遊ぶ月宮殿の奉仕の天女を見得ぬのは人間界の遺憾である。

雲去來すダウダンの紅葉ゆれつゝ

全山ダウダンの茂みであると云ふ觀念に眩惑の色彩を恐れて十五六町を行けば、絶頂に鎮座する宮は雲表にその粗朴な宮造り、ざらめける戸錠はそのまゝに偉大の莊嚴と、嚴肅とを把持してゐるのであつた。時に午後二時、霽れゆく雲の明るさを一眸に收めて遠き赤石山の峇饒、富士の秀峯が權威を表示して居る崇さには、一行快哉の聲を思はず發したのである。

俯瞰すれば濛々たる一面の雲の海、脚下遠く近江の湖、伊勢の青波は、空影となつて見えず、徒らに我が網膜を去來するのみ。暫く襟を正せば男性的な血潮は渾身の力と和して身は山巔の聖地にある心。自然の力よ、此大自然よ、今我等に此の清淨なる天地を須臾の間なりとも授けて、知識に彷徨ふ人類の懊惱より、救ふのであるか。踏みしむる此頂の此土此石は凝つて我等青年の意氣を暗示するものではあるが。低徊暫時、山雨は又來る、社前に額づき、三角點七千三百九十二尺に最後の別れを告げ、信美國境標に男性的の涙を惜んだ時は、強い雨の雲は吾々の面をうつのであつた。

吾々が籠堂で休むで居つた時、行者の如き異樣の服裝の二人上り來たので、是に信州路への道を尋ぬれば、霧ヶ原へ下るには此方によき道あるとのことに、最初陸地測量部五萬分の一地圖にて定めた針路を變更し、中津へ歸ると云ふJ氏と信州路への道は知らぬと云ふ川上青年と分れて、荷持の中津の金六を合せて十八名は、熊野社の脇を通つて信州路へ下りはじめた、時は午後三時である。

下り道は一行の元氣横溢して、年少者に至るまで一列に談笑の瞬間を持續したのであつた。針葉樹の茂り深く千年斧鉞を入れぬ處女林は雄々しくも尊い默示を續けて一面黑く緣に綿の如き和かき苔は木の間、木の間の地上を覆ふて一寸の土の色さへみる事の出來ぬ、大森林であつた。こゝはダウダンの影も絶えて心細く、名も知らぬ高山植物の蘚をぬきて紅葉せるも今は手にする暇を持たない。道は果てゝ暮も遠くはない。本の倒れてゐる處、截り口の鮮な樣に氣を得て、覺束なくも下れば今は杣道

も影失せて寂寥の想は犇と迫つて來た。杣か山神かと思へば彼方の山に木を倒す音のこだま返しにそぞろ響くのを「杣サーン――」と呼むで聊かの心强さに蘇つたのである。返事もなく音はやむだ。道は愈密林に入つて一行の列の最後からは中央の人すらみることの出來ないので人員點呼の番號をとり、十八と最後の金六の聲を聞きて進む。道のない大古の林を下る一行はたゞ先の木馬道をたよりとするのみである。又番號又杣サーンと呼び、道が分らぬ待て、先頭方向注意、列を切るな、など叫びつゝ進む、千年の蘚に包まれし地面は大樹の獨り枯れて幹は既に土となり、六百年にして腐つて土となると云ふ根株の上を覆ふ蘚を踏みて、空洞の中に落ちこむものもある、左手に賴みと摑むだ太き木は枯木にて折れて臂をうつ。白く走る雲は雨となる、風を呼ぶ。道は倒れ木に遮られる、勇を鼓し元氣をつけて下る、時に脚下に韡々と谷川の音を聽く、一同嗟！谷へ近い！と叫んだ、これから約十町も下つた處に、谷川を見、杣の家を見出した、時は一滴命脈の油と覺えて吾々が消えかゝる旅愁に光明を認めたのである、試みに駄句つて

奇草紅葉す深山の奥の杣が家

杣が家に木馬道を尋ねた、是より三町程下りて谷つた處から登れとの事に、蘇生の思ひしてもう大丈夫と下る。谷川の水は冷肌を透すのである、見上ぐる兩側の峭崖より風雨に墜ちし岩石は疊々として水の行くも困難であるやうである、そこへ數百尺の處から切落した、材木は縱横に散らされて、之が石を嚙み、水を飛ばして居る。如何しても行かれぬ絶望の淵に崖上百餘尺の處に杣七八人の、私共を瞰下せるのを見出した。下から木馬道を問ふも聲が通らない、何やらむ小石を左の方に投げて、上に登れとの手眞似をするのを、初めは何とも分らず、材木を墜すから、あちらへ行けともしや惡戲をされるのではあるまいかと合點した時には一同の顏色はなかつた、やがて杣の手まねの分りて登らうと思ふも道がない、けれど止る譯にはゆかぬ、岩角を攀ぢて懸崖を登り漸くにして杣の居る處に達し

た。左方遙に新しい木馬道のあるを見て嬉しいこと限がない、午後五時半である、四の宮熊野社より二十幾町、思へば此一里に足らぬ道程に二時間半を費した、深山は蒼然として雨に暮れやうとして居る。

束の間の喜びに垂直の處を下れば道は極まつて行くに由もない、數十日の後でなければ、完成せぬ木馬道の爲めに架せる丸木橋を渡らねばならぬ、丸木橋としてのそれではない、トロッコ用のレールを敷く準備の根太木であるのだから、皮付のもの、さうでないもの、兩の足を揃えて尙ほ餘地あるもの、片足をかけて餘地すらないもの、如何に狹くても、如何に辷つても通らなければ行きつけない、初めは左の崖に金剛杖をつきあてゝ甘く中心をとりながら渡つたが、行くに從ひ今は崖とは數間を離れて來た、下は低きも二三丈高きは數丈の丸木の上を通らねばならぬ、けれども吾々はどうしても得渡らぬに至つて、猿の如き身輕な働きを心得た、親切な、杣に手を取つて貰ひ、子供の一二は負ぶさつて八町も續く丸木の上を渡つた、そして互に心からの親切を感謝した、それからは山の中腹を切取つて開いたレールの道を行くこと半里餘にて杣の合宿所兼山林事務所へ着いたのはもう六時半であつた。こゝに亦親切な事務所の人は火を焚いて暖をとらし、熱き茶をすゝめて呉れたので、夢から覺めた思ひがして嬉しく思つた。聞けば此方面の御料林を丸半商會なるものが一部分の拂下げを受けて六年計劃で伐材を初めて居るのであると。思へば滅亡する大森林、大自然は此山此森林のみではあるまい、惜いことである。

午後七時禮を述べ、親切にも霧ヶ原迄案内してやると云ふ、若い杣二人前後に石油の松明をつけて、トロッコ道を過ぎて、下り坂に來た、八町の坂といふ、疲れた足は兀々と出た石に躓き、又は平たき石に滑りて、梟も鳴かぬ欝林を下る。疲勞の爲めか、とても八町とは思はれぬ、時間は一時間も要したらう、それから二十町位にて漸く風穴の廢穴に着いた。現在使用するのも見た、有名な神阪(ミサカ)の

風穴である、蠶の種を貯藏する信州の風穴である。これからの道は五萬分一圖にある、飯田へ通ずる道で、日本武尊の御通りになつた、神阪峠（ミサカ）（五千二百五十尺）へ通ずる道である、案内の杣が焚く火にあたゝまりて八時半頃、右手に遠く湯舟澤川の音を聽きつゝ霧（キリ）ヶ原へと心は急げど足は鈍い。兼好法師の塚のことなどはもう忘れて、霧ヶ原の人家に來たのは午後十一時である、此里程は一里半位であるとのことだが十里も歩むだやうに思つた。午前十一時、中の小屋にて食事を取つてから一物も食はぬ同行は人家に出たので氣が急に弛むだのか、稍々落付が出來たのか、頻りに空腹を訴へる。田舍宿もすると云ふ家へ行きて食を乞ふ、親切に山家らしい麥飯の握めしに一時を凌ぎ、案内の杣に分れて馬籠（マゴメ）に向ふ。

霧ヶ原から一里半と云ふ馬籠宿へ石ころの道を下る、下つて湯舟澤川と冷川（ツメタ）の合流點の少し下手に架けた、幅一尺位の一枚板の橋を渡り、石を飛びて味噌野に着いた。馬籠への道を問ふべく、路傍の家に聞けば、主人は語る『實はあなた方の一行が下つて來られるとの觸れを村長から受けたので、提灯など用意して私の風穴まで伴を迎えにやつた。午後六時迄待つたが、來られぬ。六時には馬籠へ着かれる豫定と聞いて居る。まだ來られぬは山で泊られたのであらうと思ひ、先程歸つたのです』と。それから馬籠迄は十八町にて道が二つある、此間道の方が近くてよい、道を教へてやる、とて五六町も共に來て、道を教へ、提灯を貸して呉れた。此人は神阪村の早川次郎八と云ふ人、神阪の風穴の元祖である。

十八町と云ふ馬籠迄も却々遠く感じた、道も分らぬ、霧ヶ原や馬籠から生徒の通ふといふ村の學校の脇を通りて、それからの道は一筋だと云ふが、向ふに宿場らしい處がない、分らぬまゝに既にとざした一軒の家に聞けば、一筋にゆけとのことに、又田の中の阪道を登つて中仙道に出た。宿屋のことから色々と世話になつた、村役場の前を過ぎ、神阪郵便局の隣の今宵の宿、下扇屋へついたのは既に

二十四日の午前一時であつた。昔からの宿屋丈に座敷も廣く、湯殿もあり、吾々の通つた室は奥の八疊貳間で、次の間付の綺麗な室であつた、夜具も古いながらに薩張りし、敷布、浴衣も氣持よく洗濯がしてある。夕方から用意してあると云ふ晩めしを濟ませて、脚足の關節に燒酎などつけて寢たのは午前三時であつた。

翌朝は六時出發の豫定であつたが、疲れとそして又降る雨に正午出發ときめた、私共の寢た裏二階の前には古杉に包まれて禪寺光明寺がある。表に出て遙に湯舟澤御料林より惠那の山々を雨の霽間に見る、建ち並ぶ家の何となく昔の驛路の俤が殘つて居る、中仙道の宿場らしい懷古の念が湧く、大名の道中が浮んで來る。明治二十五年に俳聖正岡子規居士が木曾路を行脚して妻籠(ツマゴ)により來て一旅亭に宿り雨に降られたとのことも偲ばれる、馬籠から落合の方へ向ふと初めて田野が開ける。居士麥の穗の黃なるを見て

桑の實の木曾路を出れば穗麥哉

と云ふのがある實景を叙したものであらう。

馬籠は木曾路に這入る第一の宿場である。馬籠とは何か馬に因緣のある土地のやうなれども分らぬと一書に書いてある、舊記に

莊名不詳岩郷百性家藏大般若經跋有曰濃州惠那郡遠山莊馬籠村想中世遠山氏領濃州時侵畧隣邑遂取此村屬濃州後生復耳是木曾路驛次其一也驛中南北三町相對成巷其餘民居散在山間至尾州府下二十三里云々、

とある、今は長野縣西筑摩郡神阪村の小字馬籠である。寶曆年間の調に租稅四十石、田畝數六十七町四反七畝十七歩なりしと、今もさう增しては居さうもない。道中旅日記に江戸ゟ八十一里半二十八町、京へ五十二里九町とある。此宿場の本陣は島崎藤村氏の家で、吾々の泊つた下扇屋は脇本陣であ

つたらしい。けれども本陣は屋敷のみとなり、下扇屋も今の若主人は小學校の先生をして居るので、宿は賴んでも十人以上となると斷るらしい。二人や三人なれば賴めばだしぬけでも泊めて呉れるだらう、宿賃は一圓も置けばよからう。

正午金六—共に難儀をして來た、荷持の金さん—には心付をやつて中津へかへし、同行は妻籠へと向ふた。妻籠迄は馬に乘つて行くことが出來るとのこと、然し乘り馴れぬものは隨分難儀なとのことに乘らうと云ふものがない、僕は子供の時から馬に乘つたので乘りたいと云ふと、軍隊生活の經驗あるK君と二人が乘つて行くことになつた。馬賃は妻籠迄一圓である、私の馬の手綱を馬子がとり、K君の馬は手綱なしにあとからついて來る、私は此放牧してある木曾の駒、道草せぬ爲めに口へ籠の付けてある木曾の駒に乘つて、中仙道の馬籠峠二千六百五十尺を越えるのが嬉しくてたまらぬ。カルサンを穿いた、何やら古雅な顏をして居る木曾の人を見て中仙道に馬上の人となつて居ると自分も昔の人になつたやうな氣になつて來た。峠の取付の人家のある所と峠を越えてから人家の今ない處の二ケ所に、明治天皇御東行の時の御駐蹕の御遺蹟を拜した、明治初年の御行列の有樣が目前に拜する樣にあり〳〵と偲ばれるのも恐多い事であつた。峠からは妻籠が見える、御料林の端の中仙道を、馬はゴトリ、コクリと行く、此邊の道は昔の中仙道と異う。此小川の向から雄瀧雌瀧の下を過ぎて今の道へ出たのである、もとの道は水の爲めに流されたのであるなど馬子は語る。下谷（クダリヤ）の左方の山に大なる地滑りがある、此地方で有名な地滑りで、砂防工事には大分の費用と日數を要したものださうな。

おとなしい馬を妻籠で乘り捨てゝ吾妻橋に向ふ。雨は又降り出した、道を急いで出力一萬二千六百キロの木曾川賤母水力發電工事を取入口から、二千七百八十三間殆ど$\frac{1}{2}$のみの水路工事を視た。トンネルは殆ど花崗岩を堀りぬくのである、卽ち中津方面の地層と同じである。晝なほ暗い「賤母日かげ」を阪下驛に向ふ、中央線は此木曾川の右岸を、吾々は左岸の國道を工事中の水路に沿ふて

阪下へと行くのである、賤母御料林、田立御料林の紅葉はまだ紅葉して居らぬのは遺憾であつた。此邊は十一月初が紅葉の時である、全山鬱蒼たる御料林の紅葉は木曾の紅葉として人に知られて居る、名古屋から行くと初めに見る錦の如き紅葉が之である。午後四時半水力工事事務所へ着いて、發電所敷地の切取を背景に登山記念寫眞を撮り、阪下驛へ事務所專屬の渡舟にて渡り、晩めしを濟ました、馬籠から凡そ三里半位である。賤母から阪下へ渡るのも今は名電燈が運搬用として阪下驛から道を改修して架した、對鶴橋と云ふ鐵橋がある、對鶴橋に月を見るか、紅葉を愛するか、急湍を瞰るか、としての木曾の名所一つとなるであらう、對鶴橋とは南部光臣氏の命名である。

午後七時二十三分發の汽車で阪下を立つて名古屋千種驛へ歸つたのは十一時二十分であつた。

吾々は下山道に於て意外な困難に遇つた。まだ人の通る道となつて居らぬ道を、食物の用意もなく、案内人もなく通りたるは不注意の至りである、然るに一人の落伍者もなかつたのは僥倖と云はねばならぬ。而して茲に一言せねばならぬのは、川上青年の案内人なるものである。信州へ下る道は全く知らぬなど云ひはるのは心得ぬ次第である、眞に知らないものとすれば彼等は惠那山案内人たるの資格のないものである、又案内はするが荷は持たぬ、たつて荷を持つならば案内賃一圓の外に五十錢を請求するなども癪にさわる、彼等は登山者の趣味など考へる事なく、川上口から登つたものは又川上へ下らして、以て川上繁榮策なんどの政策を取つて信州へ下ることを阻止せんとする狹き量見ではあるまいか、或は僻みかも知れぬ、兎に角川上青年なるものに對し不愉快に感じた。

因記、以上の土地に就きての資料一二を左に、

濃陽志略—惠那嶽是第一高山也、遠國望レ之形如二覆舟一、故俗名二覆舟山一、其麓接二信州湯舟澤及飯田一、經頂宿雪、至レ夏不レ滅、有二神祠一、毎年九月十九日遠近里民登レ山拜レ神（今は新暦九月二十九日）

延喜神名式—惠奈郡惠那神社。

◎「だうだん」の惠那山　西國寺

美濃國神名記—從五位下惠奈明神。
一宵話—此の山の祭に郡中の村々より馬を曳て登る其日必風雨す是多人數の二便に山内を穢すを明神嫌らひ給ひて雨を降らして不潔を洗ひ清め結ふよし土人言ひ傳ふ。
賤の小手卷—天照大神の胞衣を納め給ふの記あり。
神阪(ミサカ)—日本武尊碓氷峠より美濃路に出でんと中仙道即ち木曾街道を下られた、萬葉集にある、賀美乃美佐賀である、或は御阪と作る、後拾遺に、

白雲の上より見ゆるあし引の山の高根や御阪なるらむ。

霧(キリ)ヶ原—徒然草の作者兼好法師の家集に木曾の御阪に住すとあり、湯舟澤御料林中に其遺蹟がある。猿猴屋敷と云ふものがそれであると云ふ、世をすねて法師がこゝに庵を結びて餘生を送つたもので、兼好屋敷が音便にてエンコー屋敷となつたのであらう、今ではサル屋敷と云ふて居るとか、此外霧ヶ原から神阪の間に鎌倉街道と云ふのがあるとか聽く。

ハイランド　（千九百十四年の日記、同十七年補筆）

辻村伊助

六月十一日　London (St. Pancras Station)——Edinburgh (Waverley Station).
十二日　Edinburgh.
十三日　Edinburgh——Aberdeen——Ballater——Braemar Castleton (1100').
十四日　Braemar (Morrone Hill, (2819').

十五日 Braemar (Lochnagar, 3786').
十六日 Braemar——Derry Lodge——Glen Dee——Larig Ghru (2750')——Aviemore (697').
十七日 Aviemore (Loch Alvie, Loch Insh).
十八日 Aviemore——Inverness.
十九日 Inverness——Caledonian Canal——Fort William.
二十日 Fort William (Ben Nevis, 4406').
廿一日 Fort William (Glen Nevis).
廿二日 Fort William——Killin (360').
廿三日 Killin (Glen Lochey).
廿四日 Killin——Loch Tay——Kenmore——Edinburgh.
廿五日 Edinburgh——Callander.
廿六日 Callander (Ben Ledi, 2875').
廿七日 Callander——Trossachs——Loch Katrine——Loch Lomond——Rowardenan.
廿八日 Rowardenan (Ben Lomond, 3192').
廿九日 Rowardenan——Balloch——Glasgow——Edinburgh.

倫敦からアバディーンへ

六月十一日は倫敦らしい天氣であつた。プラットフォームに近藤君をのこして、汽車は徐かにセント・パンクラスの停車場を離れる。何の秩序も計畫も無く、家から家と空地を埋めて、ごた〳〵に建て增したらしい街の間をつきぬけると、もう飛び〳〵になつた家の間に青々と芽ぐむ若草が、陽氣はうすら寒いがさすがに夏の初めらしい。

倫敦からエディンバラへ四百〇六哩、急行で八時間半かゝる。室が込んで席がとれないから、荷物

◎ハイランド　辻村

を車掌にあづけて食堂へ座りこんだが、發車が午前九時三十分、此の日は珍らしくホテルの朝飯にありついたから、晝まで何も用はないけれど、給仕の方も心得たもので、煙草を出せばすぐ飛んで來て燐寸を擦つたり、灰皿を持つて來たり、新聞も貸して呉れるし席も樂々して、込んでゐなくとも客室よりは確に氣持がいゝ。食堂のことだから午になると中々込み合ふが、その時は一所に食事をするから別に迷惑はしない、あとに殘つてパイプをくわへてゐた連中が退去すると、御茶の時までは私一人、近藤君が親切に發車まぎわに買つてくれた數冊の雜誌を讀み了ると、窓際に倚りかゝつて、ついうと〳〵と寢こんでしまつた。

車掌に呼び起される。カーライルでグラスゴウ行きと離れるから荷物を見てくれと云ふ。あづけて置いたスートケイスに印しをして室に戻ると、窓にはいつの間にか薄日がさしてところ〴〵蒼空さへ仰がれる。丘にしきられた麥畑にはヒナゲシが紅く交つて、だん〳〵北へゆくにつれて、倫敦あたりでは先月が盛りであつたメイフラワーが、エルムやオウクの若葉の蔭に仄白く咲いて居る。

考へて見ると倫敦の生活は暢氣であつた、日曜などは武田君と近藤君と三人で、時によると朝つぱらから叩き起されて、朝食も晝飯も食べずに夕方まで歩かせられた恨もあるが、まあ暢氣に郊外を飛び廻つたものだ。今朝も近藤君がわざ〳〵見送つて呉れた、その親切にほだされて、エディンバラで待つて居るから夜行で來ないかとまで讓歩したら、笑談ぢやない、そんな暇があるものか、君は一體ビジネスメンに同情が無いからひどいと、一言の下に叱られてしまつた。そして旅行者に一片の同情をも寄せないのは理の當然と云ふ顔付をした。

尤も身勝手なのは近藤君ばかりでは無い。僕をそゝのかして北の方まで追ひこくつたのは、一つに武田君の勸告にあるので、ニュー・フォーレスト以來、人の顔さへ見ればハイランドの自慢で、地圖を持て來る、繪葉書を並べて見せる。平たく云へば、武田君の口車にのせられて出かけたやうなものだが、

全體それほどまで賞めるなら、案内がてら同行して然るべきだのに、何のかんのと用事をこさへて、とう〳〵昨夕もの別れになつてしまつたのだ。

まあいゝや、ハイランドは寂しい方が却つて身に泌みてよからうと思つたのは、餘ほど負け惜みに相違なかつた。あゝして三人で毎日のやうに往來して、暢氣にはしやいだ揚句には、今日の汽車の旅から已に少なからず寥しかつた。

私達の室はカーライルでグラスゴウの直行と離れて、今度は車掌も暢氣さうなハイランダーと更つてしまつた。オーアーイとなま温るく返事を曳つ張るのが、いかにも暢んびりした山國の氣分をたゞよはせる。

言葉も困るが閉口なのはハイランドの地名で、子音ばかり重つて讀方の見當もつかないのは一向に差し支へ無いが、讀めさうなのをそのまゝ英語流に發音すると、昨年何かの本の序文にあつたやうな、ケアンゴームやブレリアクなど云ふ珍妙な地名が製造されることになる。

此の線の終點はウェイヴァレイ・ステイションで、着いたのは午後六時。停車場に隣接したステイション・ホテルに室を定めて、すぐ街に飛び出してしまつた。

歐洲の都市のなかでは、ハイデルベルヒとサルツブルクと、此エディンバラとが一番好きだ。言ふ迄もなくエディンバラは、十一世紀の初め以來蘇國に屬し、又スチュアート家の最も愛好した主都として、史蹟に充ちて居る町である。東西・南北の徑各々一里餘で、東京の樣に坂が多く、略東西の方向に走るヴァレイによつて新舊の二部に別れて居る。王城のある舊市は街路甚だ不規則に錯雜して、狹い往來に面して見上げる樣な高い、そして粗つぽい石を疊んで拵へた家が立ならんで居る。折々は一人やつと通れる位な狹い路次があつて、其奥には妙に廣い庭(コート)のあるなども、甚だ異彩を放つて居る。これに反して新市の方は一千七百年の終り頃から盛に發達したもので、如何にも整然と區劃され、自分

の宿の前のプリンセス・ストリートを初めとして、ヂョーヂ・ストリート、クヰン・ストリートなどは巾の廣い立派な大通りで、中にも大店大旅館等が並立するプリンセス・ストリートなどは、英國（廣義の）とは一寸うけ取れぬくらゐ整頓して居る。それに自分の行つた時は時期もよかつた、左の丘に露を含んだ若葉がむく〳〵と生ひ重つて、其上に聳えるもの〳〵しい城壁は斜に夕陽を浴びてゐた。麓は芝生に花草がつゞいてその片側の整つた街には、店頭に飾りたてたタータンの切れ地が花よりも鮮かに人目をひく。山が近いだけに狩獵用具や蚊鈎（フライ）の面白いのが大分並べてあるが、用は無くても一寸欲しくなる。大通をぶらついて王立劇場のそばまで來て晩餐にする。

スコッチブロースの雞肉は、ほんの申し譯ほどしか泳いでゐなかつたが、分量の多いのに度膽をぬかれる。魚の絶大なのはいゝが、知らずに注文したアントレなどは、もう見るだけで澤山になつた。それに一パイントのエイルを合せて二志六片。成る程スコットランドは氣樂な譯だ。後で聞くと晩餐は一志で充分ださうで、近藤君でさへグラスゴウではそれで滿足したさうだが、考へて見ると戰爭中で無くとも日本は高い、高くても相當な喰ものなら我慢もするが、値がよくつて品が惡いのだから人を馬鹿にしてゐる。

翌る朝は寢ごゝちのよかつた倫敦のレコードを破つて、八時にはちやんと入浴も濟み食事も終つて、うす靄のこめた街に飛び出した。丘の上の城壁が大通の左にぼんやり聳えて、氣息がほーっと白く見えるくらゐ、陽氣もまるで夏とはうけ取れない。買物と旅の仕度で晝前をつぶして、晝すぎはリイスの川むかうを岡へかゝつて植物園に行く。

折り〳〵散つて來る霧雨に氣持よくぬれながら夕方まで園にゐたが、てうど高山植物の花盛りで、時間の大部分はそこに費してしまつた。高山園はさすがに大規模なもので、丘の間に曲折した路の樣子からすでに、"Valley type" のキュウの高山園のやうに淺い感じを與へない。又種類も產地も、よく

ロホナガール頂上の東望

辻村伊助氏撮影

かう根氣よく集めたものだと驚ろくの外はない。

築山の所々に鐵管が立つてるのが、少し眼ざはりだが、高壓の水をノッヅルから噴霧させて灌水する裝置になつてゐる。

築山は岩の置き方も自然なのがうれしい、その間を埋めた高山植物、もつとも日本產のクリンサウや伊太利產のォーブリーシャなども有るにはあるが、純高山植物も非常な勢で繁茂して居る、Draba olympica, Silene pumilio, Saxifraga decipens などが、栽培は容易ださうだが、何にしても人目につくし、Fax Mac Nabiana の岩壁の間に純白な花を開いてゐるのも、前園長の名だと思ふと、外處で見るよりもなつかしい。殊にAndrosace の小さなクッションに可憐な花をつけたのが、もう山に來たやうな氣がして無闇とうれしかつた。

高山園につゞいて樺の林がある、雨脚がはげしくなると、白樺の木立をくゞつて丘の上の温室に逃げこんで、止めばまた、岩山に戻つて露にぬれた山草の間をさまよつた。門を出るといつか雨は收つて、歸り途に城へ登つた頃には薄日さへさし初めた、塔の上から明日行く方面を見渡すと、フォースの流をさしはさむ沃野の果に、雲にしては重すぎる薄墨のかたまりが、ながゝと西北の空に重なるのを眺めた。

六月十三日は曇り日ながら雨は止んで朝のうちはいやに寒むい、武田君の注意を思ひ出して、折角かたづけた鞄をあけて毛織の下着を着こむ始末、大きな荷物は殘らずホテルに預けて、寫眞機とリュックサックと手廻りの道具や着がへを入れたスートケイスを一つぶら下げて、十時四十分にウェイヴァレイ・ステイションを發つてアバディーンへむかつた。

線路は城の眞下を通ると隧道になつて街を横ぎる。遠くから見ると、丘上の古城を中心に、青葉若葉の梢から尖塔の見えかくれるのが畫のやうだ。岡の間を屈曲して打ち開いた沃野をフォース・ブリッ

ヂにかゝる。入江の水は鉛を延べた如く重くるしい。約二週間の後縱航したロッホ・テイから流れ出るテイ川の下流が、北海に開いた上に架した延長二哩に垂んとする鐵橋を渡ると、間もなく蘇國第四の市なるダンディーである。

今にも一と雨來さうに搔き濁つて空の低い、北海の濱邊にそうて西北に進めば、アーブロー、モントロースも須臾にして通過し、やがてストウンヘイヴンを離れると、ディー川の上流も暗色の雲に包まれて、汽車は綠の丘と草葺の百姓家とそれを連接する白樺の木立を分けてアバディーンに着く。

こゝは其の名の示すが如く、私が溯らうとする、ディー川の川口に在るので、街區も整然とし、又花崗石で築き上げた大きな建物が多いので、Granite City といふ異名で知られて居る。此の市の大學は中々古いもので、去る明治卅九年の秋設立四百年の祝賀祭を催したことがある。支線に乘りかへるまでの一時間に大通りをうろついて、午後三時二十分にまたこゝを發つた。ディーサイド線(ライン)の田舍びた客車は、白樺の見える丘の間を縫つて、ディー川の左岸を西へ走る。

ディー河の旅

終點のバーラター (Ballater) は小さな村である、六時に發つ乘合自動(バス)車を待ち合せる間に、廣くもない村を一と廻りして山の書ハガキを獵つて來た。ディー川をさしはさむ山脈は近いが雪らしいものは見えない。日本の何とかいふ大學者が、モリマッといふこぢつけた名を與へたスコッバインの潤ひの無い森を圍んだ新綠が、思ひ切つた派手な色彩を展べて、近い山を包んでをるが、ディー川の水はやゝ開いた山合ひを貫流して、さまで山河らしいおもむきは無い。

バスは殆んど滿員で、少し遲れて驅けつけた時はもう席を選ぶやうな譯にもゆかず、宛てがはれた左側に申しわけ程の席を見出した。これからの路も左岸に沿つて行くから窮屈な思ひをして振り向か

なくては、流れの樣子は思ふやうに見られない。村はづれのグレン・ケールンを渡ると兩側の山がせまつて、ディー川の澄み切つた水が見下ろされる。

山の裾は森の若葉がすれ〳〵になるばかり街道に覆ひかぶさつて、開け放した窓からそよ〳〵吹き込む夕風が旅らしい興をそゝる、そして昔から、ものゝ本などでくり返したリヴァー・ディーのほとりを、斯うした日暮に旅するのが何とも云へずうれしかつた。

山毛欅の若葉は晩霜に枯れて、遠目には黄葉かとも疑はれる、或は、時に樅、落葉松の密林を穿つて坦道は遠く西につゞく、山には夕靄がたなびいてアバゲルディー(Abergeldie)の古城を包む森の上に帶をひいた一沫の烟の果は、なだらかな山また山が重なつて、ロホナガールはとう〳〵頂を見せなかつた。

折り〳〵對岸に野鹿を見る、ドライヴァーが面白半分に警笛を鳴らすと、バヲ仕掛のやうに飛び上つて、下葉をくゞり〳〵密林の間に逃げ込んでしまふ。

ブリッヂ・オヴ・ディーの中高な石橋は非常にいゝ、眞つ白な小砂利を洗つて滑かに辷り落ちる流は、橋の下手に深淵をたゝへて再び白く碎け落ちる、白樺の林は落葉松の木立になつてクレイグ・クルーニー(Craig Cluny)の森には夕靄が湧いた。對岸は水づいた草野からこんもりとした木立の上に、やゝ開いた遠山の裾が烟る、S字にうねる流に離れて、點綴する百姓家の間を去つてブレマール・カッスルトンに入る。

ブレマール(Braemar)

Fife Arms Hotel の前で下りた時は午後七時半、室を定めるとすぐ食堂へ出た。ハイランドでは武田君も旅服のまゝで工合の惡いこともあつたさうだが、何かまふもんか、旅行服で澤山さなんて威張る

から、ついその氣になつて、面倒な衣裝は殘らずエディンバラへ置て來たが、田舍のくせに宿の樣子も思つたより立派なのに少々變な氣持で食堂へ出ると、案の定、いづれもディナー・ジャケットか何かで澄してゐる、見廻したところ連れの女客もなし、そんなに澄まさなくつても夕飯ぐらゐ食へさうなものだ。壁には鹿の首がいくつも並べてあるが、何年何月キング・ヂョーヂから拜領などゝ眞鍮の札がかけてある、秋の鹿狩には陛下の御座所になるのださうな。

外に出るともう九時すぎ、曇り日の日はすでに、ケールンゴルムの山の端に隱れたと見えるが、表はまだなか〳〵明るい。ホテルの側の石橋のたもとから、山川の流れにそうてグレン・クルーニー(Glen Cluny)を溯る。流は村を貫いて、對岸の若葉の蔭には、單調な律を刻む水車(ミル)がある。

水はひた〳〵と淺く小砂を洗つて、路ばたに突き出た岩の上には釣をしてゐる若者が見える、トラウトでも釣る氣だらう。村に近いモローン・ヒル(Morrone Hill)には陰鬱な夕靄がかぶさつて、對岸のクリーク・ナ・レイック(Kreng nan Leachde)の頂にも、鉛色の雲がじつと動かない、谷のすべてはひつそりと呼吸をつめて、胸を押しつけるばかりに重くるしい。

宿に歸るとがらんとした玄關にポーターがぼんやり立つてゐたが、洞窟のやうな廊下に靴音の高く響くのが妙に氣になつた、ナイトスタンドの蠟燭を灯して給仕を呼ぶ。武田君の注意で、明日は途のりも遠し車のきくカーラターまで馬車を仕立てさせるつもりであつたが、失策つた、明日は日曜だと……。

凡そ旅行者の身にとつて英國の日曜ほど馬鹿々々しいものはあるまい。都會にゐれば芝居は休み、煙草屋以外は店を閉めて落ち〳〵飲むことも出來ず、雨でも降つたらそれこそみじめなもので、郵便は來ないし、手紙を出すなら倍額の切手を貼つて來いなんて、どこまで人を馬鹿にするのか譯が分らない。日曜にいゝ商賣をするのは坊主ばかり、素人には何等の恩惠も與へられない。(武田曰それでも

日本の田舍で、暦にも載つて居ない鎭守の祭禮だとか、乃至は盂蘭盆や養蠶で、往々人夫を得られなかつたりして、豫定の行動を急に變更せねばならないのよりも、一般に休養を得るといふ點だけでも少しは勝つて居るかも知れない)(辻村曰、ちつとも勝つては居ない共に無要の儀式から起る不便なのだ)

癪にはさわつたが、考へて見ればウェイターの罪でも無し、仕方が無いから此の近所でもうろつくことにして、燭火を吹き消して床に入る。窓にはうす月の光でもさすらしいが、戸を排せばモローン・ヒルの雲はどんより濁つたまゝに厚くたゝんで、西の空はまだ暮れきらず、往還はまだ人顏もわかるくらゐ……夜は十一時に近かつた。(武田曰)辻村君は日曜の故に馬車を雇ふことが出來なかつたので、ロホナガール行を一日延して、モローン・ヒルに登られたが、自分はアバディーンを午後に立つて、其の夕ディー川の中流ディネットの附近でシラカバの林中をさまよひ、終列車でバーラターに着いて此處に一泊した。其の翌朝バーラターの近くのクレイゲンダロッホといふ丘陵に登つた處が、遙にロホナガールの雄姿を望んだので、それを更に近くから見たくなり、丘陵を駈下つてからグレン・ムックに沿うて二哩餘り西南のコイルといふ小山に上つて、晝飯までにバーラターに歸り着き、食後自動車でブレマール・カッスルトンに向ひ、町に着いたのがかれこれ四時頃、小休の後直にモローン・ヒルに登つて、六時半頃山を下りた。其の翌日は日曜であつたが、談判は首尾よく成立して馬車を傲ひ、午前七時に出發してロホ・カーラターに向ひ、そこから徒步ロホナガールの頂を極めて北に下り、バルモーラル・フォレストを通過し、バロッホビューイの美しい深林を賞し、ガラワルトの瀑を見て歸宅した。ロッホナガールは、バイロン卿が青年時代の一部を此の邊に送つたので、卿と親しみ深いものである。　序を以て卿の詩を次に掲げる。

Away, ye gay landscapes, ye gardens of roses!
In you let the minions of luxury rove;

◎バイランド　辻村

Restore me the rocks, where the snow-flake reposes,
　Though still they are sacred to freedom and love:
Yet, Caledonia, beloved are thy mountains,
　Round their white summits though elements war;
Though cataracts foam 'stead of smooth-flowing fountains,
　I sigh for the valley of dark Loch na Garr.
Ah! there my young footsteps in infancy wander'd;
　My cap was the bonnet, my cloak was the plaid;
On chieftains long perish'd my memory ponder'd,
　As daily I strode through the pine-cover'd glade:
I sought not my home till the day's dying glory
　Gave place to the rays of the bright polar star;
For fancy was cheer'd by traditional story,
　Disclosed by the natives of dark Loch na Garr.

山名ロホナガールは。山頂のサーカスの下にあるロホ・ナ・ガール（即ち兎の湖）から出たもので、日本でよく澤の名から山名が導かれたのに類似して居る》。

山村の日曜

北國の夏の夜は思ひ切つて短い、三時にはもう白ら〳〵明けになつたらしい、うすら寒いので何度も目覺めたが時計はなか〳〵はかどらない、八時の筈の朝飯が日曜は三十分遲れるのも馬鹿々々しい。

宿を出ると街道を戻つてディー川のふちに來る。空には大束な雲塊がむく〳〵して、重くるしい鼠色の輪劃がもつれ合つたまゝ、無理やりに押し流されて西の山蔭へ隱れてゆく。カールン・ナ・スレーヤ (Carn nan Sgliat) の頂からグレン・クルーニーの上流へかけて、ねち〳〵した雲が低く覆ひかぶさつて、今にも一と雨來さうに見えるが、空は曇るとすればまた何處となく雲透きの日がほんのりとさして、寂しい笑顏を見せるやうに、ディー川の水も落葉松の綠もパッと明るくなる。

こゝに川の瀨は原をいくつに分流して、さら〳〵と岸を洗つて東へ落ちる。流れを限る丘の上には、こゝに一とむれ彼處に一群と、朝露にしつとり濕れた葉末の、力なく枝垂れた白樺の木立の奧か、どことは知らず雨を含んで昔語りをするらしく、クックーの鳴く音がもの寥しく響いて來る。

この靜かな谷合にゐて、どこを見まはしても一片の雪もなく、たゞ綠の丘と、遠紫に山また山の幾重にも折り重るのを眺めながら、心には淡い失望を懷かずにはゐられなかつた。然しこの時にさへ私はかう思つた、ふとした旅の終にかういふ山奧へ來たのなら、恐く聲をあげて喜んだに違ひないと、が、山登りの仕度をして、峯から峯に飛び廻るつもりで來た今は、西の空を限るケールンゴルムの赤黑い山の褶を望んでも、鋭い氷の牙の眉にせまるアルプの旅を思ひ出して、いさゝかの不滿を感せずにはゐられなかつた。ハイランドはかういふ景色とは、全く趣を異にしてをる。

暫くして、又思ひかへした。今、草の上にレインコウトを敷いて長閑にパイプをくわへて居ると、何の鳥か小鴨のやうな水鳥が、ひた〳〵と水をうつばかりに流をかすめて、石をなげれば屆くばかりの丸石に羽を休めてゐたのも、水づいた草野の果に殘雪のやうにワタスゲの綿毛の波のつゞくのも、又折から朝の空氣をゆるがせて、鐘のねの高く低く鳴り渡るのも忘れぬものゝいくつに數へられる、私はたち上つて流れにそうて歩き初めた、鐘のねはなほ木がくれに響いて來る。

山毛欅の林をはづれると敎會の塔が望まれた、鐘のねはいつか收つて、メローディヤスな讃美歌が、

窓を漏れて聞えて來る。私はクルーニーの橋のたもとに腰をかけて、靜かな山村の日曜を心から味つた。

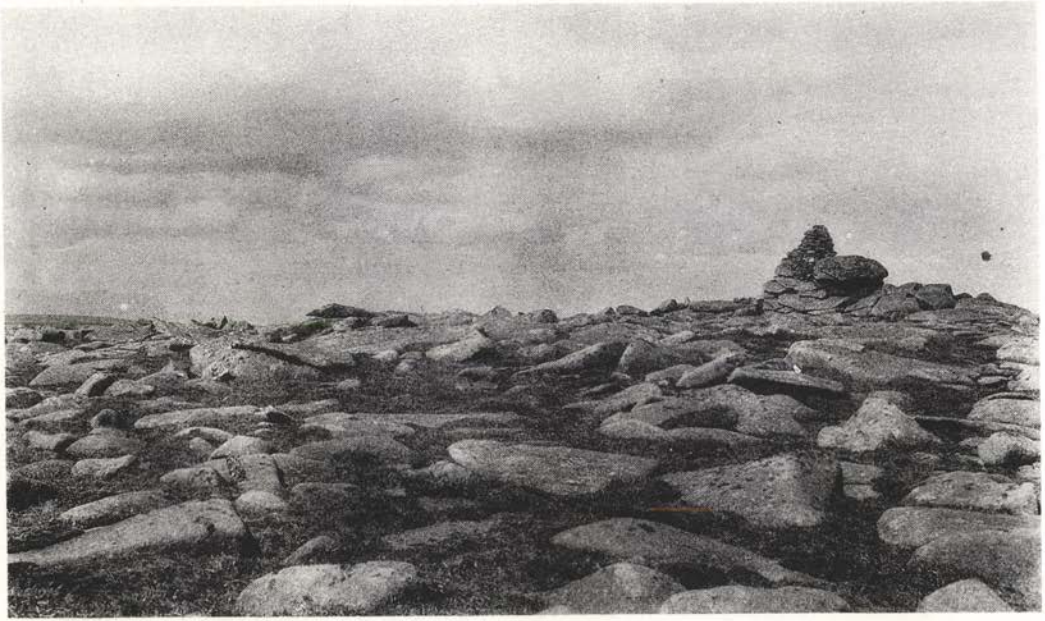
午後は、クルーニーの流れに沿うたゴルフ・リンクの側にある百姓家の横手から、闊葉樹林の下葉をくゞつて、路ともつかず、下草の踏みしだかれた茂みを分けてモローン・ヒルへ登つて行つた。森を離れると、ごつ〳〵の岩の間に雪解け水のぢく〳〵した草野にかゝる、ブレマールはもう眼下になつて、帶のやうに森を穿つて麓を繞ぐるディー川の對岸には、ケールンゴルムの山脈が、切つ立てに北から西を圍んでをる。

こゝまで來るともう足跡は消えて、たゞいゝ加減に高いところを目がけて、岩の間を登つてゆく、小瀑のやうな落ち水のふちには、ヘザーが敷きつめられて、あちこちツマトリサウの可憐な花や、ムシトリスミレの紫も見える。

モローン・ヒルの頂は登るにつれて西に動いて、こゝが頂上かと思へば、更に小高い山がその先に表はれて、三つ四つはかう云ふ峯を越えて來た、尾根は南北に渡つてS字を描いたなだらかな草山で、荒れ果てた斜面から、カールン・モア (Carn Mohr) が、間は低いが尾根づたひになつてをる。

頂上の岩に登つて、北にディー川の對岸を望んだ。雨もよひの空はどす黑く、ケールンゴルムの山脈を覆うて、陰鬱な雲の間に、あちこち殘雪が指さゝれる。グレン・ディーの、蛇のやうにのたくつて執念く、岩の間をうねつて行くはづれには、洞穴とも見えるグレンの兩側に、ブレーリアッハ (Braeriach, 4248.) とベン・マクドゥーイ (Ben Muick Dhui, 4296.) の赫黑い急斜が、ディー川の谷合は一雨來てゐるらしく、スクリーンのやうに薄もや立つた空を透して望まれる。

この方面は、數へきれない山と山とが押し合つて、削りとつた斷崖の直下から、絲筋のやうな谷水が深く岩の間をえぐりながら、幾條のグレンとなつて、殆んど直立に見える山の麓に落ち込むと、眼



ロホナガールの積石(ケールン)

辻村伊助氏撮影

下に展げられたブレマールの谷を東へ走るディー川の流れにそゝぎ込む。

山の東は、圓い草山の踞に、クルーニーの水が絲よりも細く、森と丘と、入れ違ひに小高くなつたバルモーラル・フォーレストの上に、ロホナガールが屹立する。この方面には雪は極めて少い。背ろには、湖の色に空が透いて、厚い綿雲の切れ目にはところ〴〵蒼空が望まれる。

ふと目をあげてケールンゴルムの方をふりかへると、雨脚はもう麓の谷に押しよせたらしく、烟のやうに山頂から吹き下ろす霧が、いつの間にかグレン・コーイッヒ (Glen Quoich) に流れ込んで來る。ディー川の空はまつくろに搔き曇つて、折り〳〵遠雷さへ聞かれた。雨もよひは氣にならぬでもないが、この景色に見惚れて、また暫く岩の上に腰かけてゐた。

東につゞく積石(ケールン)の横に、獵師とも思はれるのがひよつくり表はれたが、急にあわてた樣子をして、すたこら麓をさして下りてゆく、と、ぽつっと雨が降り出した。いよ〳〵來たなと思ひながら、雨と驅つこをするつもりで、山腹の草の斜面をまつすぐに、じめ〳〵した原と云はず、がら〳〵の岩と云はず、眼の前にぶつかるものを跳ね越え飛び下りて、ブレマールさして驅け下りた。

大粒な雨は、ぴしりぴしッりと頰の痛むくらゐやけに叩きつける。レインコウトは置いて來たので、瀑のやうなしぶきを切つて、眼に泌みる電光の中を、やつと麓の木蔭に着いて一息ついた時には、毛織の上衣はづく〳〵に濕れて、靴下からは生ぬるい湯氣が氣もち惡く立ち上る。

吹き降りの中をホテルに驅け込んだときは、かれこれ四時に近かつた。雲は低く山をかすめて、モローン・ヒルの斜面は木立の裾を見るばかり、まだ盛んに雷鳴がしてゐる。ぬぎ更へた旅行服を乾させて、窓を打つ雨の音を聞きながら、浴槽にゆつたりと身を横たへた。

御茶の時には、もう名殘の雨滴がぴちり〳〵軒にしたゝつて、日の沈むころから思ひ出したやうに夕日がさし初めた。晩餐のあと、橋のたもとから流れに沿うて、グレン・クルーニーを溯る。夜は九

◎ハイランド　辻村　二六

時に近い。雨あがりの濕れ空は磨きをかけて橙色に冴え、露を浴びた森の間には、淡い烟がじつと動かない。流につき出た岩に腰かけて、何を見るともなくぼんやり水面を見つめてゐた。

クルーニーの流は、淀をなして脚下にたゝへてゐる。その水面には、無數の羽蟲がせゝこましく小さな輪を畫いてをるが、雲も浮かぬ夕空のあか〳〵と山は覆ひながら、流を包む白樺の葉末も寂として、谷は寢靜まつたやうにひつそりしてゐる。八時半の日沒から、九時、十時、十一時と、その長い黄昏の寂しさは、ハイランドで無くては決して味へない。

荒凉たるグレンを目掛けて、山は筋張つた稜をいくつとなく投げ下して、無數の關門を築いてをる。人は、たとへば許されて、一尺でも遠く都會の生活から逃れたいとあせるやうに、山の裾、流れのほとり、或は時に、晃上げるばかりに碎け落ちた、ランドテラスの直下にさへも、幾尺の岩をならして、ほつと一と息つくさまに、さゝやかな巢を營んでをる。そして手を延せば屆くばかりの岩の間に、箱庭のやうな菜園が作られる……かうして山懷の小村々々は墓場の如く築れてゆく。

淙々と、人の世とは何のかけかまひも無く、惜めば僅かに滴々と、然らざれば野を山を押し流さんず勢に、岩に怒號する溪流に沿うて、しかも、彼等は惠深い自然の一面にすがつて山奥深く分けて行く、かく自然と人生と交綏するグレンは、山そのものゝ徒に荒凉たる景色よりも、又思ふがまゝに振舞ふ人の世よりも、なつかしく悲しく胸をそゝると覺える。

降り積る春の淡雪は、融けては置き、消えてはまたも降り續いて、暗いグレンの奥にさへロビンの歌は甲高く響きながら、筧の水は宵毎に凍つて、いつまでも永い冬は去らない。待ちあぐんで早くも芽ぐむ楢の葉や、おづ〳〵と朽葉を分けて、羊齒の若芽のそつと頭をもたげて、冬の行くへを窺ふうち、晩霜は若葉の上に白く置いて、淺綠の野は、山は、いく度となく淡い黄葉に枯れてゆく。

ハイランドに夏は來ない。山はエリカの花をつゞつて紫に映え、クックーの啼く音のうら悲しく雨

を呼ぶこの頃から、落葉松の綠はいつとなく薄く黃ばんで、もう近づいて來る冬の仕度の松薪は、納屋の入口に山のやうに積まれる。幾群も〳〵、山越しの風に追はれて鶇(スラッシュ)の來る頃には、白樺の林を搖する夕風の凄まじい山村は、呼吸がつまるやうに短くなつてゆく其日々々に、心細くも爐に近い窓を閉ぢて、「北國の巨人」と怖れた雪の近づくのを待たなければならぬ。と、澄み渡つた空はいつか搔き曇つて、いつまでも〳〵晴れ〳〵した蒼空は見られない、佗しい村人を悲しむかのやうに……。

夜は寂然と孤客にせまる。水の如き大空はなほ靜かに山を覆うて、モローン・ヒルの頂近く夕星のまたゝくを仰いだ。

ロホナガール (Lochnagar)

六月十五日、朝六時にノックされた、食堂を出てスモーキング・ルームで一服やつてると、辨當にサンドウィッチを紙包みにして、チースと林檎とチョコレイトをそへて持つて來た。馬車でホテルを出たのが午前七時、一人乘りの小さなので、ドライヴァーと並んで腰かける。

村から右に細徑を行くと、クルーニーの流れを右に、森をぬけて、カールン・ナ・スレーヤ (Carn nan Sgliat) の裾に、朝露にしつとゝ濕れた夏草の間を南をさして走らせる。間も無く谷は二股に分れて、右はグレン・クルーニーの奥深く、馬車はこれと分れて、橋も架けてない山川の淺い瀨を渡り越すと、左から來るグレン・カーラター (Glen Callater) を溯つて、路の兩側にせまる丘の間を東南さして登つて行つた。

朝風は氣持ちよくそよ〳〵吹いて、露を含む落葉松の木蔭に入ると思はず襟を合せる程だ。山の裾は、なだらかな傾斜が一面のヒースで、ふり返ると、いつの間にか高く登つたと見えて、ディー川は麓の丘に遮られて見えない。谷の北は、ケールンゴルムの山脈が、昨日の陰欝な景色にひきかへて、

今朝は非常に明快に見えるが、無數の谷にゑぐり取られた山の膚は極めて荒らかなものである。モローン・ヒルは綠草に覆れて築山のやうに小さい、麓を繞るクルーニーの流は、朝の日にキラ〳〵と水銀の如く閃いてをる。凡ての物象は秋のやうに透徹な感じを與へる。

折り〳〵野飼ひの山羊に逢ふ、馬車に驚ろいてあたふた一筋道を逃げて行くが、立ち停つては振りかへつてキョトンと馬の顏を見つめて居る。

だら〳〵蹄のはづれは、心もち兩側の山が遠のいて、小高くなつた丘の上の一軒家の裏手に、細長い湖水が現れた、このロッホ・カーラターに着いたのが七時四十分、こゝで馬車を歸して、磁石を相手に小屋の前からすぐ左の斜面を登りはじめる。

山合ひの小瀧の末は、水みちも無くじく〳〵したヒースにあふれて、ムシトリスミレやモウセンゴケの一種 Drosera intermedia が花をつけた、丘の斜面から斜面に、始めのうちは飛び〳〵に續いた足形も、小屋が見えなくなると間もなく消えてしまつて、もう地圖と磁石を賴るよりほかに途はない。三四三〇と記したケールン・タッガールト (Cairn Taggart) の積石(ケールン)を目がけて、山腹のヒースをぐるつと廻ると、ケールン・バーノッホ (Cairn Bannoch) へかけて、なが〳〵と續くなだらかな分水嶺の向う側は、なそひに低く、雪解け水のちよろ〳〵と流れ集る谷合に、ドゥー・ロッホ (Dubh Loch) の蒼い水と、更に遠くロッホ・ムック (Loch Muick) の折れ曲つた西のはづれが見下ろされた。

ロホナガールの頂は、この方面から眺めてはたゞ草野につゞく平な丘ばかり續いて、どれが最高峯やら殆んど見わけ難いくらゐ、山と云ふよりは高原と呼ぶ方が適當であらう。丈も低く、芝生のやうなヒースを足にまかせて歩く。

武田君から借りて來た地圖には、鉛筆で通つた時刻が記してある。君の長脚のほどは、倫敦以來しばしば拜見して、怖氣を顫つたものだが、ホースレイからビッチ・ヒルへの散歩？などでは、後を追

つかけるので爪先へ三つばかりマメをこしらへたし、茂ちやんに至つては、マメなんか出來たのか出來ないのか、午後の八時にやつとエイルにありつくまでは、口もろくに利けない程悲慘な目に逢はされたやうだつたが、かうして同じ路を登つて見ると、今更ながら飛び脚の速いのにあきれかへる。

ケールン・タッガルトから東へ曳く尾根を登ると、不意に眼の前に、切つ立ての斷崖の底に、遠い麓の草原が覗かれた。霧でも深ければ眞つ逆に落ちるところだ。土饅頭のやうな山の北半は、頂上からまつ二つにわんぐりゑぐれて、北側には竈の形に繞らした絶壁の底に、ロハンイーアン (Lochan an Eoin) の水溜りが、赤く崩れた石塊の間にピカッと光つてゐた。

こゝへ來たのが十時、尾根の草原をロホナガールの頂上まで、かれこれ一時間はかゝる、絶壁のふちを離れゝば、山の半面は、そのまゝ馬場にもなりさうな廣ろ〳〵としたヒースで、クーディー・クロム (Cuidue Crom, 3552,) の頂近く野鹿の群の遊ぶのが見えた。

ロホナガールの頂上は、北東にゑぐり取られたサーカスを圍んで、最高峯のカック・カールン・ベーイック (Cac Carn Beag, 3786,) から、南はなぞひに低く、ロホナガールの積石(ケールン)の盛り上つたあとから、南から東へぐるつと絶壁の上をとり卷いて、東北の端がミーケル・パップ (Meikle Pap, 3211,) に終つてゐる。

山の北は、崖の直下に冷くたゝへたロホナガールの湖と、そこにつゞいて、更に低く、更に遠く、末廣がりのヒースから、一帶のバルモーラル・フォーレスト (Balmoral Forest) が瞰下ろされるが、南は頂上からゆるやかな草野が、だら〳〵に丘から丘につながつて、山らしい樣子はない。リュックサックを草の上に殘して最高點に急ぐ。

カック・カールン・ベイックの岩の上に腰を下ろして、西側には眞北にむかつて口を開いたロハンイーアンのコーリーを、東側にはすばらしい斷崖の底に、ロホナガールの金屬性の水の色を瞰下ろし

て、その餘り荒涼たる景色に呆氣にとられた。この側には殘雪は多いが、日溜りの斜面は綠の山草に彩られて、そこ〻に灰色の脊を干した岩石に、午近い日がやけに照りつけるばかりである。

リュックサックを置いたケールンの側まで戻つて、山草の上に寢そべつて携へた果ものを食べる。陽氣こそ冷しいが、眞夏の空には一沫の雲もなく、晝近い日は强く草野を照らして、登りにはさすがに汗がにじむ。ヘザーはうす紫の蕾が固く、草の上には、とび〳〵に Primula farinosa が咲いてゐるそのユキワリサウに似たのも、ムシトリスミレの紫の敷きつめたやうなのも、赤城の地藏を想ひ出させる。

地圖で見ると、武田君は山を下りて晝食にしたらしく、鉛筆で時刻が記してあるから、十一時は過ぎたが我慢して眼下の湖畔まで下らうとした。障壁の上をぐるつと廻つたが、崖は七十度から塲所によると殆んど直立の岩壁なので、殘念だがどうにも手がつけられない、ミーケル・バッブの途中から二三度下りかけては見たが、下に斷崖がゑぐられてゐるのと、岩がが〻ら〳〵崩れ落ちるので、危くてこの方面からはどうしても下りることは出來ない、仕方なしにぐるつと遠廻りをして、積石(ケーン)のやうに大きな岩の重なつた東北の斜面を下りて、漸く湖水(ロッホ)のふちに出た。

ロホナガールは、今私が下り着いた湖水の名から來た山名であるが、ロッホと云ふ言葉から思ひついて、湖水に登つたと云ふのは不思議だ、餘り長く入浴しないから手足に水搔が出來て泳ぎ渡つた事と存じ候と、さる有名な登山家から御小言を頂戴したことがあつたが、バーンスの有名な詩を見てもわかるが、これは立派に山の名前である。決して泳いで登つた譯では無い。

北側から仰ぐロホナガールのサーカスは、實に凄愴の極である。今しがたこ〻を瞰下ろして立つた山頂は、胸を壓すばかりの斷崖の上になつて、赫黑ぐが〻ら〳〵にひゞ割れた岩の褶に獅嚙みついて、毒蛇のごとく二條三すぢ這ひまつわる殘雪の直下に、陰森と鱗のやうな小波をのせて湖は碧くたゝへ

てをる。落ち口にうづ高く盛り上つた堆石の下をくゞつて水は走るらしく、地の底にざわ〳〵流の音は聞えるが、遙か下手のヒースの上に、初めてさら〳〵と流れは日の光に照し出される。

モレインを下りて、がら〳〵の石の上を漸く流のふちに來て辨當を開いた。水の行く手はなだらかなヒースで、一里の間眼を遮るものも無い。ゲルダー・ブルン（Gelder Burn）の源たる Lochnagar Burn の水は、原の右寄りに流れ落ちて、そのはづれにぽちつと小く、山番の小屋らしいのが望まれる。

十二時半こゝを發つて、日の強いヒースを横ぎつて、眞北に見えるライプ・ヒル（Ripe Hill）の松山を目あてに、一直線に下りて行つた。原はところ〴〵段丘になつて、その蔭に遊んでゐた野鹿の群が、足音に驚ろいて夢中になつて逃げてゆく。あちこち水づいたところには、ヘザーの絶え間に黑土が表は　て、靴はくろぶし近くまでもぐり込んでしまふ。

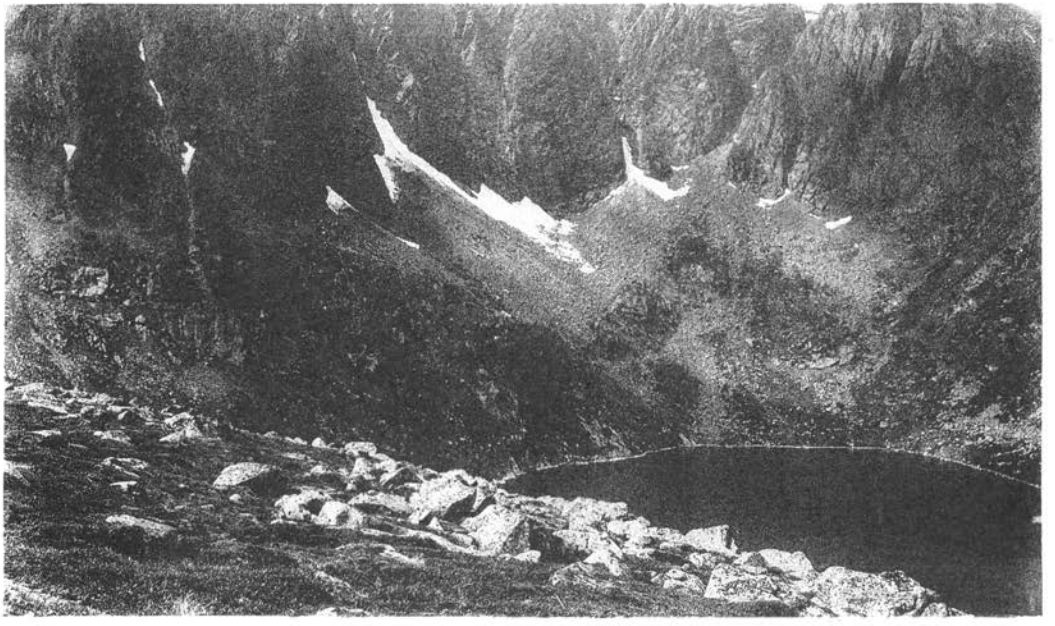
正面のライプ・ヒルは、いくら歩いても同じ距りにあつて、雲の影さへないヒースは思ひの外遠く、風はばつたり止んで、上衣はどうに脱ぎすてゝ、シャツ一枚になつてゐたがなか〳〵暑い。方々に小さな水溜りはあるが、近づけば腐蝕土（ヒューマス）でも含んでゐるやうな暗綠色で、とても咽喉を濕すわけにゆかない。

かれこれ一時間もかゝつてヒースを横ぎると、水の涸れた小川のむかうに、ライプヒルを繞る徑があつた。漸く森陰に日を除けて一息つく。スコッツパインの落ち葉は厚く土を覆うて、幾年にも日の光は仰がぬらしく、岩を包む苔はエメラルドのやうに美しい。溜め息ほどの風も吹かない、網の目のやうに入り亂れた梢は、寂として聲を收めて、何の鳥かキリ〳〵つと折り〳〵遠く聞えるのが、かへつて寥しさを增すばかりであつた。

流れの床に水は涸れて、小砂利の白い山川に沿うて、細徑は、折り〳〵白樺も交じつてます〳〵深

くなつてゆく下蔭を西北に急いだ時は、已でに二時に近かつた。かうした路を折れ曲つて半時間も歩いて、やゝ廣い路へ出たと思ふと、一軒家の横手に來た、小屋には誰も住まぬ樣子で、小窓にはしつかりシャッターが鎖つてゐる、窓の下をだら〳〵の坂路へ登ると、木立を透してディー川の深い流が瞰下ろされた。溪を距てた對岸の森の中に、この間通つた街道が白く望まれる、暫は流に沿うてゐたが、細徑はやがてバーロッホビューイ（Balloch buie）の密林に入つて、木がくれに瀨の音は高く響くが、流れは見えなくなつた。

さゝやかな清水はいくつとなく路を横ぎつては、右に落ちてディー川の崖にそゝいでゐる。私は路ばたにリュックサックを下ろして、汗にぬれた顏を洗つた。歩けばさすがに暑いが、少し息をいれると木蔭は冷や〳〵するくらゐ氣持ちよく膚に泌みて、夏の旅とは思はれない。《（武田曰）自分もロホナガールの頂上から、辻村君のと略同一の路をとつて、可なり急なサーカスの一部を降り、凄絶な峭壁の裾に蟠まる湖水、即ちロホ・ナ・ガールのふちに出で、湖畔を半周してから其の落口の附近で辨當を開いた。ミヅゴケのじく〳〵した間にタカヲスギカヅラだの、又山羊か何かの死肉の上に生へたTetraplodon　といふ珍らしい蘚などを採集してから、バルモーラル・フォレストを北に横斷し初めると、やがて雷雨に襲はれてたので、たゞまつしぐらに北々西に此のヒースを横ぎつてGelder Burnの一支流なるAllt an Laiogh　といふ小流を跳びこえて一と息入れた。雨を氣にしながら地圖を展いて見ると、丁度ライブ・ヒルの眞南の所で、坦道は西北に通じて居るが、シマッタ、此の處は英皇の別墅バルモーラル・カッスルの裏手で禁苑の一部だ。丁度皇帝滯在の折であるから、下手をまごつくと番人に取捕まらないでもない。しかし今更舊路を戻ることもならず、只進むの外道はなかつた。生憎雨外套の用意がなかつたので、豫て日本から携帶して、先年ウェイルスの山中でも役に立つた、二枚の油紙を頭からすつぽりかぶつて、此の道を西北に林の中を出かけた。小流をこえてからそれにそうて行



スカーサのルーガナホロ

影撮氏助伊村辻

くと、やがて路は兩岐する、再び地圖を見ると、驚くべし行手には番人の小屋が明に記してある。思ひ切つて右に折れてガルマディーの森（Woods of Garmaddie）に入つたが、實は城に近づかぬ内に、うまく行けばディー川をこえて街道に出やうといふ考。然るに豫期は全くはづれて、時間は遠慮なくたつにかゝはらず對岸に逃るゝ術もなさそうだ。もうかうなると存外度胸のすはるもので、同じ禁苑をさまよふなら、寧ろブレーマールの方角に進んだ方が得策と思ひかへして、再び方向轉換をやつてディー川に沿ふて上流に向ふことゝした。道は細砂を敷めつた立派なもので、幅も二間程であつたと記憶する。一哩許も行くと先刻回避した Connachat Cottage といふ番人の家の横手に出た、どうしても其の前を通らねばならないので、喚ばれぬ先に許を請はうと、思ひきつて其の玄關に立つと、これはしたり中には人も居らぬか、一向に應もない、ぐるりと主屋の方に廻つて窓から中を窺えば、室内は整然と片づいては居るが、人一人犬一疋の姿さへ見えない。これ幸と遂に無斷に失敬して前途を急ぐと、雷は最早收まつたが雨は依然として降りしきるので、例の油紙をすつぽりかぶつて、やがてバーロッホ・ビューイの森林へ近づいた。折しもあれ忽然として行手に現はれたのは一臺の自動車で、其の形貌から察すると或は高貴の方の乘用のものかとも思はれた。何分劇しい雨中なので脱帽どころか油紙さへ脱げないから、そのまゝ路傍に佇立して居ると、車は間もなく接近して直に走り去つた。しかも桐油紙で體を包んだ人間を產れて初めて見た此の搭乘者——誰方であつたかは知る由もないが——の顏には、少なからぬ驚異の色が窺はれた》。

蕨（ブラック）の若々しい下葉に腰を下ろして、かうやつて考へて見ると、悲しいことには日本は陽氣の惡い國だ、何しろ半年以上はじめ〳〵濕つぽくて氣持が惡くてたまらない、夏になると、鹽化石灰か濃硫酸でも入れた乾燥器（デシケイター）の中にでも住はなくては、生身の人間にも黴が生えさうだ、今度歸つたら吸取紙の衣物でも注文して夏の間着て見やう。

さうかと思ふと、空つ風のひゆう〳〵吹きつのる冬になると、焚付になるやうに何から何まで思ひ切りよくかさ〳〵に乾き切つて、ぶる〳〵胴顫ひの止まらないのも寒さばかりのせいでは無くて、血液の水分が蒸發し盡して貧血性になる爲めではあるまいかとも考へられる。第一住居がひどい。夏中しつくり合つてゐた天井板なんか、いつの間にか反り返つて、椽の下からは風が吹き上る、座敷で火を焚くと、まるで烟突の中に住むやうなものだから、嗟かいと喜ぶのは天井裏の鼠ばかり。鼠と云へば日本の鼠は……いやこれは別問題、御小言を頂かぬうちにやめにするが、要するに日本は氣候が惡いんだぞ、ゑらさうに自慢なぞしてはならないぞと云ふことを呑み込んでさへ貰へば宜しい。

路はこゝから二股に分れて、アルト・ロハン・イーアン（Allt Lochan an Eoin）の小橋を渡ると、その上手に小瀑がある、あとで見ると案内記などにも麗々しく書きたてゝあつたが、庭さきにでもあるなら格別、何もわざ〳〵見に來るほどの瀑ではない。然しミーラン・スーイッと（Meall an t-Sluichd）の麓を圍む、バーロッホビューイの自然林は、わざ〳〵日本から見物に來ても、失望することは決してあるまい。

路はやがてディー川に近いて、しばらく離れてゐた對岸の往還も森の葉ごしに窺はれる。白樺の木立は次第に深くなつて、そこをぬけると、ディー川に架した橋の手前に出た。街道へつゞいたこの路には立派な鐵門が鎖つてゐる。外に出口も見當らないから、扉に手をかけて飛び越したが、往來の眞中に門なんか建てゝ邪魔っ氣なと、いさゝか中ッ腹でふりかへると、「私有道路」と記してあつた、私は山から下りて來たので、裏口のロホナガールの方面には、何の仕掛も無いから、山番の小屋の前も、鼻歌か何かで暢氣に通り過ぎたのはいさゝか痛快だつたが、なる程さう云へば、瀑へゆく分れ道に、通りぬけ無用と云ふやうな立札があつたやうにも思ふが、現在歩いてゐる路のことゝは氣が付かず、折角の制札も効力は更に無かつた。

此の橋はインヴァーコウルド・ブリッヂ（Invercauld Bridge）と呼ぶもので、街道へ出ると直に先の日渡つたブリッチ・オヴ・ディーの袂に出た。橋の附近は、バスで素通りをしたよりまた更に美しい。白樺の林に入つて、ゆつくりと煙草をふかす、こゝからブレマールまではたつた三哩、落葉松林の坦道をディー川に沿うて、もう片影になつた木蔭を、ホテルに戻つたのは午後五時半。

ケールンゴルム山脈（Cairngorm Mountains）

十六日はやはり六時に起された。天氣は今日も申し分はない、これからハイランドの最も荒涼たる山地と呼ばれた、ケールンゴルムの山脈を横斷して、夕方までにアヴェモア（Aviemore）まで出やうと云ふのだが、この間の距離が直徑にしても二十哩の上あるので、山路はディー川の源流まで谷にそうてぐるつと溯つて、分水嶺を北へ越えてフェーシーの谷へ入るのだから、途のりは中々遠い。武田君の旅程の通り、村からどうやら車のきくデリー・ロッヂ（Derry Lodge）までは馬車を雇ふことにした。

荷は着がへのシャツに、レイン・コウトとロール・フイルムを五本リュックサックへつっ込んで、あとは寫眞機に杖一本、外の雜物は殘らずスートケイスに藏めた上、一番のバスでバーラターの停車場へ屆けて、客車便で再びアバディーンに送り、ハントレイ、キースを經てぐるつと廻して、アヴェモアの停車場留めに送るやうに命じてから、ネイルド・ブーツの足ごしらへ嚴重に、馬車の仕度を待つてゐた。昨日のドライヴァーは約束通り、七時少し前にホテルへやつて來た。

ディー川に沿うてゆく街道は、モロン・ヒルの麓を繞つてゆく。白樺の木立はます〳〵深く、そよそよと吹く朝風は、薄衣の膚には涼し過ぎる。空には雲もなく、入り亂れた若葉を透して、折り〳〵蒼空は仰がれる、流は崖の下に深く、木立の底に瀨の音がざあ〳〵響く。街道は或る時は近く、または

川から遠のいて、山の麓をインヴァレイ（Inverey）の城の下を通りこすと、だら〳〵に下りてディー川が一と跨ぎに出來る程狹まつたリン・ノヴ・ディー（Linn of Dee）で橋を渡つて、始めて正面に雪の多いケールンゴルムの山脈を仰いだ。

折り〳〵森蔭から鹿が飛び出す。川を渡ると今度は流れの左岸を後戻りして、さつき通つたインヴァレイの城の對岸まで來て、始めて川に離れて西北へと山の斜面を登つて行つた。車の輪は、路の兩側から覆ひかぶさる夏草にきしるばかり、路は次第に細くなつて、眼の前に屹えるカールン・クロム（Carn Crom）をさして登つてゆくのだ。

さつきから遠くに見えた落葉松の森がデリー・ロッヂで、一軒家の横手に車を停めたのが八時三十分、こゝから馬車を歸して、たつた一人いよ〳〵山路に分け入つた。

森をぬけて小屋の裏手へ出ると、山のとっつきまで一帶のヒースで、右に分れる細徑だけは辛うじて認められるが、これはミール・ナ・グールヤ（Meal na Guaille）から、ベン・ブレイック（Beinn Bhreac）へ登るグレン・デリーで、アヴェモアへ越えるには、左のグレン・ルー・ベック（Glen Lui Beg）を溯る筈だが、足跡らしいのはてんで見あたらない。聞かうと思つて小屋まで引つ返したが、馭者はもう歸つてしまつたし、小屋の窓はぴつたり閉つて、聲をかけても人のけはひもしない。仕方が無いから山を目あてに、地圖で見當をつけて、ヒースの上をめちや〳〵に歩いて行つた。

路はルー・ベックの流れについて登る筈だから、兎に角川まで出て見やうと左へ切れると、向うに顯れた小屋の横手に、ちらつと人影が見えたので、大聲をあげて聞くと、その路を川に沿うて登れと敎へてくれた。川については呑み込めたが、路らしいものは此の近所にはありやしない。兎に角川に離れないやうに、地圖をたよつて西へ向つて登りはじめた。

その小屋がいつか眼の下になると、野を瞰下ろして松一本、もうアヴェモアの近くまで十數哩にわ

たつて人は住はない。流はやがて二つに分れて、ルー・ベックの本流はベン・マクドゥーイ（Ben Muick Dhui, 4299,）の横へ入つてゐる。アヴェモアへは川を渉つて西へゆくのだが、こゝで地圖を擴げて散々考へた。よほど旅程を變更して、ベン・マクドゥーイへ登らうかと迷つたのだ。

山は急だが岩ばかりがら〳〵して、見わたしたところ頂上まで三四時間もかゝれば行けさうに見える。日の永い盛りだから、夜の十時でも山路は歩けるし、分水嶺の方へ頂上からうまく下られゝば、今日のうちにアヴェモアまで出られるだらう。いろ〳〵と考へて見たが、地圖を見ると武田君のあの脚で、こゝはおとなしく寄り路もしてゐないし、時間も相應にかゝつてるやうだから、斷念して本流を靴のまゝざぶ〳〵渉ると、眞西に折れた支流を溯つて、ベン・マクドゥイの裙を大廻りにまはることにした。《（武田曰）實は自分は辻村君が通つた本道を行かないで、ルー・ベックの流れを離れると、間もなく右手に峙つカルナ・メイム（Carn à Mhaim, 3328,）に上り、此の山の背を野兎の足跡かと思はれる樣な小徑を辿つて、やがてそれがベン・マクドゥイに連る所から、左手に山腹をかけ下りて本道に合した。丁度デリー・ロッヂを出る頃からふり出した雨は風さへ加はつて、雨傘を持つ手は中々油斷が出來ない位であつた。しかしベン・マクドゥイから凸出したカルナ・メームの山陵から右にはルー・ベック・ブルンの流れるグレン・ルー・ベックの雲の籠つた谷を見下ろし、左にはディー川の源流を宿すグレン・ディーをこえてケールン・トゥールを望みながら、正面に暗雲の間から隱見する黑丈夫ベン・マクドゥイの肩のあたりを仰いで、細長い山の脊を進んだ、僅か一時間餘りではあつたが、此の凄絶壯快な登山の記憶は今だに腦裡に歷然たるものである。本道に合してから生ひ茂るヘザー（Calluna vulgaris）の間に、クマコケモヽが夥しく生じて居るのを見たのは甚だ愉快であつた。此の邊で前々日ロホナガールの麓で採つたと同じ白花のヘザーを發見したので、雨にぬれるをも意とせずして採集した、しかしそれが後に如何なる幸運を自分に齎したかは不明である》。

山の直下で、丘にかゝると支流に離れて、眼の下にはその源に小さな池が瞰下ろされる。この邊まで來ると、ところ〳〵起形も見える、日本の山のハヒマツと異つて、生長の速いヘザーでは、僅の間に路を埋めて生ひ茂げるのであらう。十時近くになつて、デヴルス・ポイント（The Devil's point）の直下、リヴァー・ディーの本流に入り込んだ。

眞北に曲つた谷のゆく手は、暗くなるまで岩山が押し重つて、右はベン・マクドゥイの急斜、左には頭の上にケールン・トゥール（Cairn Toul, 4241,）の雪の多いサーカスの蔭に、ブレーリアッハ（Braeriach, 4248,）が望まれる。

私は川の左岸を登つてゆく。ふりかへるとディー川の流の末は、スコール・モーア（Sgor mor）の蔭に曲り込んで、見あげるやうな山々に圍まれた狹い谷には、幾百尺と知れぬ高さから崩れ落ちたランドテラスが、投網の形に積み上つて、登つてゆく岩路を遮つては、大きな岡がから〳〵に谷の行く手に築かれてある。

山の斜面に、ヘザーは時折り見うけるが、あとは赤禿に崩れた岩石ばかり、凡ての景色がいかにも物凄い。右に落とすベン・マクドゥイの、頂近く四五疋の野鹿が小く見えた。リヴァー・ディーは間もなく西へ折れて、ケールン・トゥールとブレーリアッハの間には水づいた溪が開いてゐる。山は頭上に近く、落ち散る水は小瀑となつて、路は次第に嶮しくなつた。

ところ〳〵に殘雪が顯はれる。雪崩のあとや山暴れに押し流された石塊を乘り越えて、漸くディー川の源の小さな池のふちまで來た、更らに登ると縱につゞいて二つの水溜りがある、このブールス・オヴ・ディー（Pools of Dee）を通りこして、分水嶺のやゝ廣い石原に着いた時丁度正午であつた。

《（武田曰）此の三つの小池はディー川水源の一と見做されるもので、水極めて冷たく又異魚を產すと言はれて居るが、自分は遂に其の魚を見なかつた》。

石の上にリュックサックを放り出して、寢ころびながら晝飯にする、日は強いが非常に凉しいので、今まで一と休みもしなかつたが、汗も大してかゝず、荷物もさして苦にならない、そしてこの荒れ果てた、樹木のろくに生えてゐないケールンゴルムの山脈に來て、始めてハイランドの旅の面白さが分つたと、ひそかに武田君に感謝した。右も左も赤禿の山また山で、實際ティベット邊の山越しでもするやうな感じがする。

南には、今まで登つて來たグレン・ディーの狹い溪が遙る〳〵と瞰下ろされる。分水嶺の西は、山がいくらかうち開いて、ラーリッヒ・グルー (Larig Ghru) の狹い谷が、まつ黑に生ひ茂る遠木立の中に消えてしまふあたりから、一帶の高原が展開せられて、背ろにはカールン・デールク (Carn Dearg) の連脈がつゞいてゐる、雪は少しも見えない。南の溪のすき透るやうに晴れわたつた景色にひきかへて、この方面の空には、暗い雲がむく〳〵動いて、グレンモーアの高原は、暴風雨でも待つやうに陰森と脚下に横たはつてをる。

アヴェモアはあの山脈の麓だから、見渡したところまだ隨分ありさうだし、天氣もあまり思はしくないから、午後一時に分水嶺を發つて、ラーリッヒ・グルーの細流を右にして、北へ急いで下りた。左には山の裾が次第になだらかになつて、その山かげにブレーリアッハの雪の多い半面が仰がれた。クレーク・ナ・レイッヒン (Creag na Leacainn) の直下まで、可なり急いで四十五分かゝる、こゝで初めて、さまで水の多くないレルク・グルーマッハの水 (Alit na Leirg Gruamach) を渉つて、だらだらに小高い丘へかゝると、なぞひに北へ曳くベンマクドゥイの北の斜面に出た。

原にはスコッツパインや白樺が茂つて、クマコケモモが一面に路の兩側に生えてゐた。遠くアヴェモアの平野を望むと、眞川の溪を徒渉して、有峯へゆく山路を思ひ出す。空はいつか暗く搔き曇つて、どうも雨が氣がゝりだ、陽氣は冷しくて實に申し分は無い。

◎ハイランド　辻村　四〇

ロヒマルハス（Rothiemurchus）の木立はだん〳〵深くなつて、やがて細路と丁字に行き會つた、そこにあつた路標（サインポスト）のところで立ち休みして、時計を見るともう三時になつてゐる。今度は路なりに左へ曲つて、林の中をつっきつてだら〳〵に下ると、今迄しばらく離れてゐた流れのふちに出た。

無住になつたあばら屋の下手に丸木橋がある、これを渡つて左岸に出てからは草原の眞中を、材木でも搬び出したものらしいトラックの跡をつたうて、天氣を氣にしながら驅け足で急ぐ。リヴァー・スペイ（River Spey）の橋へ出た時は、アヴェモアはもう對岸の丘の上だし、川の樣子が餘りいゝので、今にも降りさうな天氣だが、暫くは立停つて見とれてしまつた。坂道を上つて村へ着いたのは午後五時二十分、停車場前の丘にある、ケールンゴルム・ホテルに泊る。停車場には今朝出した荷物も幸ひ着いてゐたので、早速一風呂浴びると、そのうち雷鳴がして夕立になつて來た。

浴室の玻璃扉を目がけて、やけに叩きつける吹き降りは痛快だが、御客のろくにゐないせいか、命つけた温浴（ホットバース）は冷水に心もち生温いぐらゐなもので、室に歸ると湯上りと雨上りで寒くて閉口した。

晩餐後、露にぬれた道草を踏んで、うしろの丘に登る、小さな東屋から瞰下ろすと、グレンモアの高原には夕靄がたなびいて、雪の多いケールンゴルムは墨繪のやうに望まれた。

アヴェモア（Aviemore）

リヴァー・スペイに臨んだ高臺にあるアヴェモアは、ブレマールのやうな山間の小村と云ふ感じは全然しないが、村の背ろに生ひ茂る白樺の蔭に、青草の斜面の見えるその丘の上までわざ〳〵登る必要はない、停車場からすでに立派な展望臺で、廣ろ〳〵と南を瞰下ろすプラットフォームからは、山越しにやつて來たラーリッヒ・グルーや、そのすぐ右に屹えるブレーリアッハの、雪のすさまじいツーカスの直下まで、一帶にひろがる高原は遠望するだけでも充分の滿足は與へられる。

源水の川一デ

影撮氏助伊村辻

裏山は前に述べた草山で、その裾には、むく〳〵と柳かと遠目には見える白樺の、木立の中に數軒のホテルがあるだけで、停車場こそあるが非常に靜かだ。私は暇さへあれば丘の上の東屋へ來て、イーズィー・チェーヤに倚りかゝつて、人の聲もろくに聞えない高臺から遠い山脈を眺めてゐた。

ケールンゴルムから西に曳いて、ギール・カールン（Geal Cluarn）まで、ハイランドの殆んど中心になつてゐる連脈は、標高こそそれ程ではないが、個々の山の形も、がら〳〵に崩壞した谷の樣子も、あちこちにわんぐりと削り取つたサーカスに、殘雪の遠白く光るのも、又その連山の裾になだらかに横たはる高原も、スコットランドの景としてもすでに異數で、もし廣角度の寫眞に撮したら、西藏の高原と云つても恐く疑ふ人はあるまいと思ふ。

ブレマールで雪を見ずに失望した私も、ケールンゴルムの山越しと、アヴェモアの展望では心から滿足して、此の間倫敦の武田君へあてた八つ當りの手紙に對して、「以後決してハイランドの惡る口申すまじく」と丁寧な取り消しさへ出した位だ。日本でよく會ふ英國人や、蘇國生れの人達でさへ、トゥローサックスとか、ロッホ・カットリンとか、ベン・ローモントなどの自慢をする連中が、云ひ合せたやうに此の山脈の存在をも認めないのが不思議でならない。《（武田曰）ロホ・カトリンはサー・ウォルター・スコットの詩で有名ではあるが、景はロホ・ローモントの方がよいと思ふ。前者は小規模の十和田で、そしてそれを横におしつぶした樣なもの、後者は中禪寺湖を引延して大小の島を置いた樣なものだ》。

然し現に同人の間には、同じ感じをもつてる人があるのだから、私達の見方が別に片よつてゐるとばかりは云はれまい。景色のよし惡しは云ふ人を見て信ずべきだと思つたのは、シベリヤ線を通つた人が退屈だ〳〵とそればかりこぼすから、渡歐の時もつい正直にその氣になつて、汽車の中で讀むつもりで書物なども持ち込んだものだが、どうして〳〵退屈どころか、日の暮れるのが惜しくつて、寢て

ある夜を除いては、食堂で食事する際にさへ、窓の外ばかり見てをつた。葉をふるつた白樺の林の奥にバイカルの水のちら〳〵光るのや、雪の中に黒い樅の梢を並べたウラールの密林ばかりではない、マンチュリヤの西、沙漠のやうな荒原に日の入るのも、チャダエフカの落葉松の粗林も、引つくるめて云へば浦鹽からモスクワまで、實際汽車の走るのが惜しいくらゐあの荒漠たる原野に見惚れてゐた。私は決して誇張してかう云ふのではない、アイスランド・ポピーの黄白に彩る初夏の景色は知らないが、肅條とした秋の末でも、あの幾日は忘れ得ぬ印象を與へて呉れた。倫敦で會つた時、武田君は人の顔を見るとすぐ、「シベリヤ線はよかつたらう！今度日本へ行く時はどこか途中で下りて見るつもりだ」と云つた。五月に近藤君に聞いたら、「グラスゴウでシベリヤ線を賞めたらば何處が面白いのかと聞かれたから、何もこれと云つて見るものは無い、その何もない荒原が非常にうれしいと話してやつた」と答へた。私達と同じ感じを持つ人があるのは非常にうれしい。學校では一時間足らずの講義でさへいゝ加減退屈をして、欠伸の三十や五十は嚙み殺すのが常だが、あゝ云ふ景色では八日の旅が短くてならない。然し多くの人々、恐らくシベリヤ線で欠伸をする方々は、この雄大なケールンゴルムの山脈を見ても、ちつとも木が無いね、何故植林しないんだらう位で、あとは同室の女の顔でもじろじろ見るのが落ちだらう。《(武田曰)二度目に西比利亞線を通つた時は、二月の中旬嚴冬の眞只中で、あの廣い野も、深い林も、山も、川も、會堂の圓家根も、盡く雪に埋まつた時であつたのと、戰時中交通の不規則な時であつたが爲に、つい途中に降りて見る機を失つたが、滿目白皚々たる荒原や、雪吹の中を突破する汽車旅行の壯快さ！用水が凍結したのは不便であつたが、それでも汽車は大して遲延もせずに發着したには感心した。それに較べると僅の降雪に埋沒や顚覆すらする日本の汽車は、之を交通機關の一に算へることさへ疑問である。只西比利亞線で一番不愉快なのは、チト言ひにくいが、折々趣味の低い同胞に出會ふことで、とりわけ獨逸仕込みの醫者、佛蘭西仕込みの畫家、低級な文士、

商人、軍人ときては、口を開けば傍若無人な遊蕩文學の實歴談ばかりで、少しも清新な話題のないにも呆れかへる。斯ういふ人達に限つて山岳に親しみのないもので、御氣の毒だが、人間としての價値は九十パーセント位割引する必要がありさうだ》。

アヴェモアには二夕晩しか泊らなかつた。天氣模樣があまり思はしくないので、ブレーリアッハには登らなかつたが、此の秋こそはと思つたのも、戰爭の御蔭で行く機會を失つたのは殘念である。着いた次の日は思ひがけ無い好天氣で、こんなことなら登れるのにと一寸あきらめ兼ねたが、麓までの馬車も命つけて無かつたので、今更らどうすることも出來ないから、リヴァー・スペイの上流にむかつて、湖水めぐりにキングギュースィッヒ（Kinguessie）の方へ歩いて行つた。

しつとり濕れた白樺の森の間を西に貫く街道は、村をはづれてだら〳〵に下りると、蕨や落葉松の粗林になつて、日の強く照りつけた砂地は、森を境として朝のうちから、乾きゝつた白砂の反射で眼が眩むばかり、ロッホ・アルヴィー（Loch Alvie）につき出た半島の會堂の蔭へ來るまでは、さすがに夏らしい汗さへ覺えた。北を圍むギール・カールン・モーア（Geal Charn Mor）の麓はなぞひに草原になつて、開いた湖水は決して大した景色ではない、それに街道につゞいた水際は松林で、一體この松と云ふ奴はどこまで見てもいやにかさ〳〵して蟲の好かない木だ。

こゝからキンクレーク（Kincraig）まで四哩ばかりの眞直な街道は、風のないせいもあつたが暑くてたまらなかつた。これから先も見渡したところ同じやうな景色だから、村の角の郵便局を兼ねた茶屋でエイルに咽喉をうるほして、左に坂道を下りるとキングギュースィッヒの往還から離れて、すぐ丘の下のロッホ・インシュ（Loch Insh）のふちに出た。

湖水の周りは三哩とはあるまい、リヴァー・スペイが原の間にだゞつ廣く溜つただけの水たまりで、岸は淺く、山は遠く、釣でもして暇をつぶしたら格別、景色が目的ではまづ完全な失望に終つて

しまふ。松林の中の教會の側を廻つて、山に近い路からアヴェモアへ歸ることにした。フェスィー・ブリッヂは山の中らしい靜かなところだ、橋むかうの坂を登ると、段丘の麓にスペイの水を瞰下ろして一面のゴースの原にかゝる。

先月末のニュー・フォーレストの旅行では、武田君にひつばり廻されて、いゝ加減な路を歩かされた揚句、ゴースの棘でひどい目にあつたが、あれはカラタチよりも始末が惡い、然しかうして黃色い花がまばらに咲いて、何リーグとも知れない丘から丘につゞいてゐるのは實に立派だ。

右は常綠樹の丘からアルヴィーの高原になつて、ギール・カールンの背ろに、スコーラン・ドゥー・モア (Sgor an Dubh Mor) の雪が見える。ブレーリアッハは裾から滲じんで、朝晴れの空はどうやら雨にでもなりさうだ。怪しく濁つた雲から落す岳をろしが、氣のせいかいやに濕つぽい。

丘の上の路は隨分遠い。サウス・キンラーラから森づたひにロハネラン (Loch an Eilean) の方へ入りかけたが、暗くなつたのは木立の爲めばかりでなく、此の頃毎日のやうにくりかへされる遠雷まで妙に氣になるから、早や足で村の方へ引きかへした。リヴァー・スペイの橋まで來ると夕立になつた。宿は丘の上だが、レインコウトだけでは我慢にもしのげないから、坂路の右にあつたラムベランス・ホテルに逃げ込んで、晴れ間を待ちながら御茶を命つけた。

蘇國山岳會の連中が五人同じテイブルにやつて來る。今日ケールンゴルムから下りて來たさうで、明日はブレーリアッハへ登るのだが、此の天氣ではどうもなどゝ心配してゐた。室にはカッシュ氏が停車場のプラットフォームから寫した、ケールンゴルム山脈の見取圖がある、欲しかつたがもう絕版ださうで、去年武田君に贈られるまで、時々思ひ出しては欲しがつてゐたものだ。その時聞くと、君の泊つたのはこの宿だつたといふ。(武田曰) ラーリッヒ・グルーの山越えをやつた自分は、ネイルド・ブーツにリュックサック、手にはぬれた雨傘をついて、アヴェモアに着いたのが四時半頃、途中で

敎はつた何とかホテルに辿り著いたが、異樣な、しかも見すぼらしい風彩に、プロプライェターも不安に思つたか、滿員で客室がないと體よく斷はつてしまつた。巡査か何かに敎へられて停車場からダラダラと坂を下りて左側のテンペランス・ホテルに行て見ると、幸なるかな、南にケールンゴルム連山を一と目に見渡せるヴェランダーを前にした一室に通された。風呂はチト鐵さびに色づいた水ではあつたが、冷水をうめた位熱いものであつたと記憶する。色々な事實を綜合して臆測すると、テンペランス・ホテルは眞面目な登山家の定宿であるらしい。して見ると自分が他のホテルで斷はられたのは、決して不面目ではなくて、多分不活潑な逗留客の泊るホテルは御門違ひであるから、テンペランスの方へ行けといふ暗示であつたのかも知れないのだ。到着の翌朝ヴェランダーで一人地圖を按じて山を眺めて居ると、ロヒマルハスの森林の彼方に横はる連山が如何にもよくて、もうどうしても今一度ケールンゴルムの山脈中に分け入らずには居られなくなつた。主人を呼んで相談すると、馬車でロホ・ユーナッハ (Loch Eunach) まで走らせれば、ブレーリアッハの日歸りは可能だといふ。直樣馬車を命じて、自分は登山服に着かへ、再びネイルド・ブーツをはき地圖を携へ、辨當の用意も萬端整つて、宿を出たのが午前十時半。ロハネランの傍を通り、ロヒマルハスの森林を穿ち、ベン・モーアの流れ (Allt na Bein Mor) に沿うてグレン・ユーナッハを南へ〳〵と車を急がせ、ロホ・ユーナッハの落口に近い山番の小屋に著いたのは十二時二十分であつた。馬車の上で辨當を濟せた自分は直樣出發。大きなサーカスに取圍まれた細長いユーナッハ湖を右に瞰下しながら、左手の山腹をからんで、サーカスの一部から流れ下る小溪に沿うて鹿の足跡をたよりに昇ると、一時間許りでブレーリアッハ連山の肩の邊に達した。サーカスの急な岩壁をこえると小徑は消えてしまつたので、フェシー川の上流の一支流を距てゝ、金字塔形のケールン・トゥールと、其左のエインヂェルス・ピークを正面に見て、東に向つて進んだが、それではディー川とフェシー川との分水嶺の尾根に出て、やがてはケール

ン・トゥールの方に行つてしまふので、時間に餘裕のない自分は思ひきつて左に折れて、廣い山頂に突起する四一四九呎のケールンに向つた。此の邊は一寸白峯山脈白河内(シラカウチ)の頂上に似て、只岩石は花崗岩であることが異るのみである。蘇國の山殊に此のグランピアン山系の山は、山腹が見るも恐ろしいサーカスになつて居るに係はらず、山頂は比較的平かな、平原的光景を呈して居る。自分は山の脊ばかり傳つて、半圓を描いて最高點四二四八呎のブレーリアッハのケールンに行くには時間が不十分であつたので、急に東北に曲つて、最高點を目がけて岩石狼藉たる所を突進した。足もとの景は平凡ではあるが、此の八月の末に、而も此の如く標高の低い山に雪を見る事を豫期しなかつた自分は、初めは單に細かく碎けた花崗岩が、平かに敷つめられてあるのかと思つたに反して、淺いながらも、眞正の殘雪を發見して驚喜せざるを得なかつた。殘雪の消えはてた所には、日本では稀品とされて居るタカネ井が一面に生じて居た。絶點に達する半途で稍低く下つて細溪を越えなければならない、これはガルブコアールの流 (Alt a Gharbhchoire) の上で、ブレーリアッハ山頂の Wells of Dee といふ泉から湧出して流れるもので、ディー川本流の源である。ディー川の河口のアバディーンから九十哩を溯つて、終に其の源に達した自分は甚だ愉快に感じた。其の翌年三峯川三十哩を溯つて、鰍(ヤマメ)や岩魚ではないが、此の種の旅行の甚だ愉快なることを忘れることが出來ない。さてブレーリッハ山嶺から舊路を引かへすも面白くないので、前日越えたラーリッヒ・グルーの左手(西)に峙つスロナ・レールグ(Sronna Leirg. 3834') に寄つた所から、路のないサーカスを下りて、ブレーリアッハの山腹北面をぐるりと半周して、またもとの山番小屋に辿りついた。退屈顔で待つて居た馭者は直に馬車の準備をして、再びアヴェモアに少し道をかへて引かへした。馭者は例のホテルの主人で暢氣な蘇國人であつた。彼はテンペランス・ホテルを經營するに係はらず、大分酒好と見えて。今朝も家を出る時一杯か二杯か引かけたので、甚だ酒臭くて同乘には稍々迷惑したが、それで甘味もすきなのか、しきりにポッケッ

トからトフェーを出してシャぶつて居た。夕方アヴェモアに歸つて直ぐ旅裝を整へ、ハイランド・レイルウェイでインヴァネスに向ひ、午後八時に同地に着した》。

一時間あまりで大雨も收つたので、登山家の連中と停車場上を散歩してホテルに戻る。晩餐後の散歩は昨夕のやうにうれしい。グレンモアのいつ見ても同じ位置に夕靄がねばりついてゐるのが、丘の蔭に湖水か水溜りでもあるのかも知れない。雲は薄いが時々小雨がちつて、雨氣を帶びた夕風がこのまゝ地降りにでもなりさうな氣がする。

インヴァネス (Inverness) へ

ブレーリアッハの登山は雨で見事失敗した。此の降りでは散歩にも出られず、十八日の朝は日記や通信に時を移したが、明日の天氣もわからず、窓をあけても霧がまいて何も見えないので、急に旅程を變更して、午前十一時四十分の汽車で降りしきる雨の中をインヴァネスへ向つた。しぶきに濕れた窓からは何も見えず、讀みかけの本をかゝへたまゝ寢込んでしまつた。

同乘の旅客にゆり起されるともう停車してゐた、いつの間にかインヴァネスへ着いたので、プラットフォームにつゞいたステイションホテルに入つた時二時少し前、すぐ晝飯をすまして、レインコウトをひつかけて表へ出る。インヴァネスといへば、日本では外套の一種位のことゝしか思ふまいが、あのトンビなるものは元來此の町に名を得たもので、アイルランドのアルスターの町で造られる一種のラシャで仕立てた特殊な形の外套を、アルスターと呼ぶのと同じ樣なものだ。市は中々古いもので、十二世紀頃から borough に擧げられたもので、現在では古趾は少いが、それでも the capital of the Highlands と呼ばれるだけに、古ぼけて薄よごれてゐるのが何となく貴い。雨は未だ盛に降つてをる。

濕れたので思ひ出して本屋へ入つて地圖を買ふ。借り物に此の天氣では氣がひけるから、ハイランドのをいろ〳〵買ひ集めて來た。のこらずそろへるとスコットランドだけで二十九葉だが、今度歩くところは七枚あれば足りる。パーソロミューの十二萬六千七百二十分ノ一で、と云ふと一寸面倒のやうだが、つまり二哩を一吋に表はしてあるのだから、距離などを見るに非常に便利だし、着色も見事に出來てゐる。又道路の等級や、湖沼の深度が精しく示してあるのも便利である。

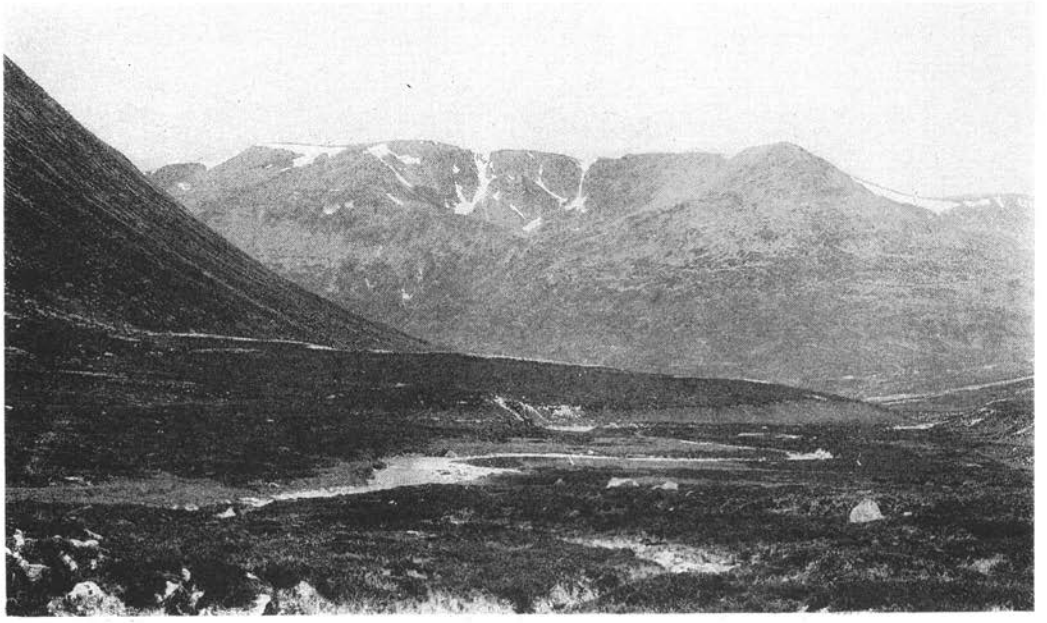
今日は珍らしくじと〳〵して、日本の梅雨期のやうに蒸し暑い、もつとも衣物がちがふからそのせいもあるが、こんな衣服なんか日本へ持つて歸つても役に立つ時は少い、冬になれば風が冷たいんだから衣ものぐらゐで防げる筈はない、魔法壜(テルモス)でも着なくつてはをち〳〵往來は歩けまい。

とは云ふものゝレインコウトを着てゐては今日は實際暑い、宿に歸つて入浴すると、閉め込んだ浴室は蒸し風呂のやうに不快に感ぜられた。雨は夜になつてもなか〳〵止まない。

カレドーニアン・カナール (Caledonian Canal)

翌る日雨は上つたが雲が低く、あまり思はしい天氣では無かつた。ホテルの馬車で Muirtown にある運河の埠頭に行つて八時發の小蒸汽に乘り込んだ、このカナールは、グレンモーアに一列に並んだ細長い四つの湖水を人工で連結したもので、全長六十二哩に亘つてをる。埠頭から離れると、綠褐色のとろりとした水を分けて、外輪の汽船は鷗の大群に圍まれたまゝ靜かに動き初める。

水はなが〳〵と行く手に擴がつて、長徑二十四哩のロッホ・ネッス (Loch Ness) が表はれる、兩側は小山がせまつて、巾はせい〳〵一哩にも及ぶまい、水ぎわにはカラマツの新綠が美しい、蕨(ブラックン)の原のあちこちゴースの花盛りなのが、山吹のやうに水に映る、そして重くるしい水の面は鏡のやうに反射してゐる。《(武田曰) 八月の末に自分が通つた時には、山腹といはず湖畔といはず、盡く淡紫のヘ



ケールンゴルム山脈の一部

辻村伊助氏撮影

ザーの花で彩られて、水まで美しい淡紫に見えて居た。八月の末から九月の初めにかけて、ハイランドの山々が、一面に生えて居るヘザーの花の淡紫の粧をつける時を、「富士は申さずまづ紫の筑波山」などゝいふ句を暗唱して喜ぶ人達に見せたら、何といふだらう》。

船をめぐつてあわたゞしく羽うちながら群れ集まる鷗は、全體どこまでついて來るつもりなのか、乘客の投げてやるパンのかけらを、翔びながら器用に受け取つては、いつまでも〳〵後を追つて騒いで來る。

甲板に小供を抱いた婦人がゐて、パンのかけを小供に持たせて見た、鷗はすぐ近くまでは來るが、なか〳〵手からは取らうとしない、小供も倦きて側目をしてゐると、横からそれて來た一羽が見事にさらつて飛んで行つた。小供はびつくりして大聲に泣き出す、船の人達はみんな一所に集まつて賑かに笑つた。實際カレドーニアン・カナールは鷗を見るだけでも非常に面白い。

十一時にフォート・オーガスタス (Fort Augustus) の堰に着いた。ロッホネッスの西南端で、小さな流れと並行した運河で連接する次のロッホ・オーイッヒ (Loch Oich) の湖水面は遙かに高いから、順次に築かれた堤の間に船を乘り入れて、水門を密閉してはだん〳〵高く浮び上るので、この間にかれこれ四十分かゝる、水門の岸は船とすれ〳〵だから、私達は岸に下りて書はがきを認めたりした。

倫敦から來たと云ふ御爺さんが、クックの廻遊切符で來たとかで、インヴァーネッスからフォート・ウィリヤムまでの賃金を私の切符と比べて見ていくら高いとか云つてこぼしてゐた。御爺さんと船に戻つて食堂に入る、食事の中にフォート・オーガスタスを離れて、狹い運河に入ると岸に沿うたカラマツの枝の地に伏すばかりに枝垂れたのが非常に美しい。食堂からは船尾の方ばかり見えるので、五哩の細い運河は、兩側に行儀よく並んだ落葉松や樅が次第に遠く隱れ去るのを見送るだけであつた。

ロッホ・オーイッヒは小さな湖で、岸はロッホ・ネッスよりも更らに打ち開いて、水づいた草野にワタスゲかと思ふ草の穂の、殘雪のやうにつゞくのさへ見渡される。又カナールを通りぬけると、最後のロッホ・ロッヒー（Loch Lochy）へ出た、廣さは見たところロッホ・ネッスの半分はあるまい、景色も似たりよつたりで、右手に山は重つてるが雪のある高さのは見えぬ。

湖水の西南端から、リヴァー・ロッヒーの流れについて運河に入ると、左の堤の上に雪の非常に多いベン・ネヴィス（Ben Nevis）が前山の蔭に顯れた。こゝからは北の半面を望むので、さすが英國第一の山だけに、形からして何となくもの〳〵しい、標高は低いが、高緯度のため積雪の量は極めて多い。この方面にはかなり山岳が重なつて見えるけれど、船の行く手はもう海岸に近い平原のやうに、小高い丘がうねるだけで目覺しい景色は見られない。

午後四時バナヴィー（Banavie）に着いた。乘客の大部分はオウバン（Oban）まで直行する此の船を下りて、カナールの堤に近い停車場に待てゐる汽車に乘つて、三哩とは離れてゐないフォート・ウリヤム（Fort William）へ行つた。

アレクザンドラ・ホテルは小さな感じのいゝ家である。曇り日ながら午後九時はまだ晝のやうで、グレン・ネヴィスの散歩も非常に愉快であつた。流のふちにテントを張つて、夜營の仕度をしてゐる連中がある。此の森をぬけると夕霧のせまつた牧場のむかうに、ベン・ネヴィスの中腹から裾へかけて、ブラックンの繁つた斜面が見えるだけで、この分では明日の登山は少し心細くも思はれる。

ベン・ネヴィス（Ben Nevis, 4406′）

二十日は夜明けから霧のやうな小雨で、室にゐてさへ冷や〳〵する。途中から降り出す雨には氣がひけるが、どうせこんな霧雨では、宿にゐたところで窓から何も見えるわけでは無し、その位なら明

日また登りなほすまでも、一度頂上まで行つた方がよさそうだ。辨當をあつらへて九時半にフォート・ウ井リヤムを出發する。

ブリッヂ・オヴ・ネヴィスを渡ると、すぐ川に沿う小路を右に折れて、シカモアの森をぬけるとひろ〳〵とした牧場にかゝる。行く手にはベン・ネヴィスの西尾根、ミーラン・スーイ(Meal an t-Suie)の頂までは見えたが、右よりにつゞくらしい山の斜面は雨雲に包まれて、吹き下ろす岳おろしが中々寒い。小高い丘の上にある二軒の百姓家から、煙のむく〳〵と立ち登るのが、上るとすれば吹き亂れて家根へまつしろに覆ひかぶさる。

原をこえると、グレン・ネヴィス・ハウスと地圖に示した一軒家に達する、小屋の側から、爪先上りに左に曲つて草山の斜面にかゝる。Pony Road とあるだけに立派な路で、さまで山らしい趣はない。《(武田曰) 嘗て此の路を自動車が上下したことがある。一週日を要したとかいふことだ》。

麓の方でしきりに呼び聲がする、誰だか霧の中で姿は見えないし、第一呼び止められる用事も無さそうだから、二三度どなつて置いてそのまゝずん〳〵登つて行つた。頂上は無論見えないが、霧の絶え間に見わたしたところ、南むきの此の斜面は岩から岩に草山がつゞいて、先づ箱根の明星ヶ岳に似たもので、雪なんか藥にしたくも見あたらない。

カールン・ディルク (Carn Dearg) の直下にある小屋で、北風を防けながら一服する。頂上から吹き下ろす霧はます〳〵濃くなつて、入口を見つめると、小さな水滴が空中にもや〳〵するのまで認められる。靴音が聞えると思つたら、霧の中から黑影が吐き出されて、小屋の入口に百姓らしい男が立ちはだかつた。先刻呼んだのは果して彼であつた、實は此の登路には路錢が要るさうで、その徵集に遠い山路をわざ〳〵追つかけて來たのである。切符と引きかへに一志の路錢を貰つて、やつと落ち付いた顏をして奴は煙草を喫ひ初めた。帽子を脫ると、隨分急いだものだらう、可愛さうに頭からは燒芋の

やうに湯氣が立つた。

頂上の小屋には人が居るさうだ、奴がこれから一緒に登るのなら霧の中でも安心だと思つたが、頼まれた荷物を置いたまゝ急いで來たので、荷を取りに出直すのだと答へた。それでは路錢を貰ひに課業をうつちやつて來た譯だが、ことによるとその方が本當の收入なのかも知れない。

風に追はれて下りて行く路錢を見送つて、小屋を離れるとすぐ霧に包まれてしまつた。カールン・ディルクの横手にかゝると、雨はさほどでも無いが、まともに吹き下ろす風は物凄いくらゐ、さつきの路錢が、頂上の小屋に人がゐると云つたから行くやうなものゝ、さも無くばすぐに引き返すところだ。

から〳〵に碎けた平らな石原へ出たと思ふと、ところ〴〵に表はれた積雪には足跡も見えない、烈風の間で地圖を見て、磁石で見當をつけて進んだが、後で考へるとベン・ネヴィスの頂上よりは、餘程カールン・ディルクの方に近よつてゐたらしい。まつすぐに積雪を踏んで、東へ東へと歩いてゆくが、どこまで行つても平らな雪田で、頂上も小屋もさつぱり見當がつかない。散々うろついてゐる中に、ふと雪の間に石標を見出した。

眞白な霧の中を歩き廻るうち、ふと大きな岩壁に出つ會した、これが絶頂かと思つて近づくと短かい煙突が見える、これが頂上の小屋であつた。石垣に沿つてぐるつと廻ると凹んだ入口が窺かれる。名付けて Ben Nevis Summit Hotel はいくら慾目に見ても餘ほど掛け値がある、これがホテルなら神河内の温泉あたりはまさに大旅館の部だが、物價の高いところはまづ負けず劣らず、紅茶の六ペンスにも一寸一驚を喫するが、この時だけは、風防けの代にしては安いものだと思つた。《(武田曰) 此の所謂ホテルに續いて、氣象觀測所があつて、明治十六年以來春夏秋冬を通じて一名の主任と二名の助手とが觀測に從事して居たが、今から十年餘り前に費用の點とかで中止することになつた》。

リュックサックのサンドウィッチを開きながら、宿の奴に山の樣子を聞く。歸路は殘雪の多い北側のサーカスへ下りるつもりであつたが、餘り激烈に反對されたのに怖氣づいて、神妙に今朝のポニー・ロウドを下ることにした。風はまだ〳〵猛烈に吹きつのつて、板戸の透き間が口笛のやうに鳴る。

午後一時小屋を出たが、戸口へ來ると、眞ともに當てる北風に吹き飛ばされさうで、雨も激しいし、霧は相變らず深く、これでは賴まれても知らない路へ下りる氣はしない。然し雪田を西に渡つて、カールン・デイルクの山蔭へ下りると、風はさほどではない、雨は瀑のやうに落ちて來るが霧は薄く、もう吹き飛ばされる心配は無い。歩きい〻傾斜を驅け足で、今朝路錢につかまつた小屋へ這入つて、板戸を閉め込んでほつと一と息つく。

馬ではあるまいしポニー・ロウドの往復は餘り氣が利かない、第一、初めての山に來ながら、同じ登路をくりかへすのは、申し譯が無いやうな氣がする。地圖を土間に擴げて散々考へた揚句、カールン・デイルクの西麓にあたる小さな池からミーラン・スーイ（Meal an t-Suie）の頂上を越えてフォート・ウィリヤムへ出る小徑が細い點線で地圖に記してあるので、距離も近し面白さうだからそれへ出ることにする。實は後で分つたが、點線とブロークン・ラインの見違へで、これは路では無くて、敎會の管轄區域の境界線であつたのだ。

小屋を發つと登路から北の斜面へ下りて、草原の間を分けて湖水のふちへ出た、水は清冽ではあるが餘り深くは無い、すぐ前はミーランスーイの草の間に岩のごつ〳〵したのが屹えて、湖水の落ち口は低い峠のやうに見える。地圖にもある路はそこへ續いてゐるが、點線で記してある方はさつぱり見あたらない、又これは無いのが當り前だが、その時は地圖の讀み違ひとは知らず、湖尻の附近を本氣になつてさがしたものだ。

路は無論見あたらないが、湖のふちは水づいた草野で、まづ思ふやうに歩いてゆかれる。落ち口の

アルト・コーラン・ロッヘーン（Allt coire an Lochain）を難なく跳び越して、急な斜面をミーランスーイの高所を目掛けて登つて行つた。もう地圖など當てにしないで、高い所〳〵と進むうち、四十分あまりで、ミーランスーイの頂上に達した。

山の西側は中々急で、岩石と山草と錯雜した急斜の底に、今朝見た二軒の百姓家が覗かれる。麓はブラックンの濃綠につゞいた牧場で、途中には邪魔な流れも見えないが、頂上からのこの急斜はどう考へても二の足を踏む。然しこの時はまだ點線の間違ひとは氣がつかず、山登りの連中は平氣で通ることゝ承知してゐた折だし、多少の負け惜しみも手つだつて、無理に岩につかまつて途中まで下りて行つた。

ふと氣がつくと、草の中はどこへ行つても、ナメクジだらけ、それもこの年まで見たことも無い絶大な奴、背中は念入りにどす黑い縞の染まつた、長さは萬年筆ぐらゐ確かにあるのが、何百か何千か、斯うなるとどこを見廻してもナメクジだらけ、ネイルド・ブーツでグシャリと踏みつぶす心持と云つたら無い。

蟲なんかそれほど苦にしない積りだつたが、この時ばかりは冷汗が出た、どう考へても牧師管區などへ踏み込むものではない。おまけに雨にぬれた岩角がナメクジと一所にぬる〳〵して、餘ほど注意しないと足を取られる、一度辷つたらそれ切りだから、實はもう先の小屋まで引き返さうかと思つた。山登りに負け惜しみは大の禁物とは悟つたが、これもいゝ經驗だとあきらめて、二時間も手間どつて、漸く百姓家のそばまで下りた。思ひの外に時間をつぶして、フォートウィリヤムへ着いたのは午後六時、びしよ濕れの登山服を脱ぎかへて、一風呂浴びてやつとナメクジのぬる〳〵が洗ひ落された氣持がした。考へると胸が惡くなる、晩餐にまた運惡く出つ會した犢（カーフスヘッド）の頭がナメクジの背中のやうで、折角の御馳走も喰べる氣にならなかつた位だ。《（武田曰）自分の持て居た案内記には此の邊を

下る歩道がチャント記してあるので、下山の時通る考で湖の北を周つて西岸に出で、山腹に上つたが道が知れないのと、折柄吹きつのる烈風と濃霧との爲め、殘念ながらおとなしく舊路を引かへした》。

グレン・ネヴィス (Glen Nevis)

やかましい鐘の音で叩き起される。いくら坊主の書き入れ日だつて、こうグワン〳〵騷がなくともよさそうだ、敎會が隣だから火の見櫓の側に住むより始末に惡い、おまけに朝飯は九時でなくては食べさせないなんて、これに比べると日本の生活は自由だ。

曉方かけて吹きすさんだ暴風雨の名殘もなく、空は一沫の霞を帶びて漂渺としてをる。インヴァーロッヒー (Inverlochy) の平原からはベン・ネヴィスの北面のサーカスが、雪の碎けた急斜まで眞近く見えるブリッヂ・オヴ・ネヴィスを渡つて、北へぶら〳〵歩いて行く。丘から丘につゞいて、なぞひに低くなるロッホ・リンネー (Loch Linnhe) の方面には、遠山の長閑に霞んだのが見えるばかり、雪の多いのは、南から東へつゞく、ベン・ネヴィスの群峯だけである。街道の兩側は水づいた草野と落葉松の木立で、一筋道の突きあたりに、インヴァーロッヒー城のこんもりした黑木の森を見るだけで、畑こそ無いが、どことなく、茅ヶ崎附近の平原を思はせる。

四哩ばかり來たが別に變つた景色も無し、風の落ちて日蔭のない街道は、いくら北緯五十六度を超えてゐても暑つ過ぎる。午頃にホテルに引き返して、午後はグレン・ネヴィスの左岸の森を、流に沿うて溯つた。シカモアの青葉に、鋭い日影がちら〳〵して、ブラックンの柔い綠に葉漏りの光のきらめくのが美しい。

その森のたえ間に、ミーランスーイを仰いで、又細徑は密林に沒して、羊齒の廣葉の茂る中を南へ折れる、土の香が心よく胸に泌みる。

木立を出ると、青草の牧にむく〳〵茂つたオウクの木蔭に入る、あちこちに牛が放してあつた。谷の突きあたりは、ムーラッハ・ナン・コーラン(Mullach nan Coirean, 3077')の岩の崩れが仰がれる。グレン・ネヴィスの水はさら〳〵と林を穿つて、河床の白沙が眼に痛い。ベン・ネヴィスは、西の半面が仰がれる、雪は殆んど無い、たゞ箱根の明星ヶ岳の様な草山の膚に長々とポニーロウドが望まれる。

グレン・ネヴィスの上流は、幾重にも合さつた、山の間に屈曲して、尙奥深さを暗示する雲の間に沒してをる。晴れに晴れた空にはいつとも無く鼠いろの雲塊があふれて、山麓のブラックンの原は眼まぐるしく陰影が動く。

牧場の石垣をたび〳〵乘り越えて、四哩ばかりでロッキング・ストーン(Rocking Stone)に着く。ムーラッハ・ナン・コーランは正面に近く、うち開いたブラックンの原から頂上まで樂に登れる。ベン・ネヴィスはその一角と、草山の斜面を見るだけで、山頂に近い雪田さへ望むことは出來ない、昨日登つたポニーロウドが電光形に屈折して、ミーランスーイの裏山でふっつり終つてゐるが、あの山陰に昨日の湖があるらしい。

草の上にレインコウトを敷いて寢ころぶ。晴れるともつかず、又雨を含むでもない雲がねち〳〵して、ぱつたりと風の落ちた谷の空氣は妙に蒸し暑い。動くとも見えず押し合ひもつれ合つた雲塊の透き間には、明り取りのやうな上空が窺かれて、深い、狹い、そして清澄な上層には雲母の如き卷雲が仰がれた……、壓迫されるやうな下界の不快な氣象を知らぬかのやうに……。

日暮れに近く牛の群は番犬に追はれておとなしく村路へ下つて行く、見廻したところ人も家も見えない、彼等は悠々と列を組んで雲の暗い草原を過ぎて行く。人間の絶滅した時、曾て訓練された通り、彼等はかうして働いてゆくのかと思つた。

山から丘へ續く西北の空は火の如く輝いた、然もベン・ネヴィスの急斜には煙のやうな霧が吹き下

近附クーレクローダンラーカ

影撮氏助伊村辻

ろして、山陰になつたグレン・ネヴィスの上流は極めて暗憺たる景色であつた。折り〳〵遠雷が聞えた、林の奥でブラックバードがしきりに鳴く。

ウエストハイランド鐵道 (West Highland Railway)

月曜は朝飯のころから降り初めた雨の中を、十時にフォート・ウィリヤムを發つてキリン (Killin) へ向ふ。線路はベン・ネヴィスの北麓を大まはりに東へ走るのだが、折角雪の多い方面も雨雲に封せられて、裾野の水溜りのあちこちに、落葉松の群落を見るばかりであつた。

ロッホ・トレーク (Loch Treig) の細長い水に沿ふころから、雨は小降りになつたらしいが、呼吸のつまるやうな濃霧で、折り〳〵影繪のやうに畫かれては消え去る落葉松の外に、何の眺望も得られなかつた。

汽車は山の間を根氣よく走りつゞけて、十二時五分にクリヤンラーリッヒ (Crianlarich) に着いた。小さな停車場の待合で、サンドウィッチと紅茶で六ペンスの晝食を終つて、折り〳〵降つて來る小雨を浴びて、キリン行きの汽車の出るカレドーニアン線の停車場へ行つた。この線路は殆んど十字に交叉して、一寸代々木の停車場と言つた工合だが、丘の下へ二町餘り歩かなくてはならない。

二時二十分クリアンラーリッヒ發、グレン・ドッハール (Glen Dochart) のやゝ開いた谷を東へ走ると、窓に近い湖水の小島にロッホ・ドッハールトの城が見える。小川で連結されたロッホ・トッベール (Loch Tubhair) の、草の中に淺く沈んだ水の色が、雨上りの爲めか非常に美しい。ベン・モーアの裾は寛やかな木立になつて、開いた谷を左に見下ろすと、間も無く Killin Junction に着いた。ロッホ・テイ (Loch Tay) に近いキリンへはこゝで乘り換へだが、まだ日ぐれに間もあるし、この方面に出直すのも厄介だから、ついでにロッホ・ヴォイル (Loch Voil) を見るつもりで、三つばかり

先の停車場まで乘り越した。

多くも無いが邪魔になる荷はバルキッダー(Balquhidder)の停車場へ預けて、木立の暗い村路を南へゆくと左側にキングスハウスホテルと云ふ名前だけゐらさうな小屋がある。丁度四時だから御茶を飲む。宿の前に丁字に來てゐる路をまつすぐに西に向ふと、さまで山らしい趣は無いが、飛び〳〵に並んだ百姓家を覆ふシカモアの並木が美しい。

二哩あまりでロッホ・ヴォイルの湖畔に着く、細長い湖水の北を限るバルキッダーの斜面(Braes of Balquhidder)のはづれに、ストッブ・コーラン・ロッハーン(Stob Coire an Lochan, 3497,)の草山の斜面を望む。湖の長さは四哩とはあるまい、巾は極めて狹く、南岸の森や水ぎわに並ぶ落葉松のそのまゝ鏡のやうに寫るのが面白い。街道のすぐ上にはシカモアの大木があつて、そこに見える會堂の入口に近く、ユー・トッリースに包まれたロブ・ローイの墓があつた。

湖畔で散々遊んで、同じ路を停車場へ戻つて、また降り初めた小雨の中を、六時四十分の汽車で、キリン・ジャンクションで乘りかへてその終點のキリンへ着いた。

武田君に敎つた宿は、リヴァー・ロッヘイの落ち口に近い所へ架したブリッチ・オヴ・ロヘイの直側のBridge of Lochay Hotelで、停車場からはざつと一哩ある。荷物は宿から取りによこすつもりで停車場に遺して、夕靄の籠めた村路をぶら〳〵歩いて行つた。草葺きの屋根からは湯氣のやうな煙が漏れて、キヅタの蔓ひかゝつた百姓家の前を通ると、ブロックンハーストへでも歸つたやうな氣がする。橋のたもとにあるホテルの入口には蔓薔薇が咲いて、草屋根の低いのもまるで百姓家、それに部屋へ案内してくれた婆さんも、田舍びてはゐるが上品な顏をしてゐる。狹い階段のとっつきで、往還に面した小さな室で、後で聞くと武田君も同じ室に泊つたことがあるさうだ。

荷物を受け取りにやつて、使が戻るとじめ〳〵した着物をかへて食堂へ行く。相客は婆さんと女が

三人。ハイランドの地名の發音はいくら敎つても眞似が出來ないで大笑ひした。何しろ Loch Katrine で獨逸仕込みのロッホの發音は及第したが、カトリンで無し、カットリンで無し、カットルンでも無し、と云つてキャッツルンでも無い、丁度その中間の發音だなんて敎へて呉れるから大變だ、それで宜しいと云ふから、得意になつてくり返すと今度はいけないと叱られる、終ひに、實はどう發音しても大抵通じると云ふ寛大な許可を得て、安心して部屋に引きあげた。もう午後九時、日の沈むころだから表へ出たが、グレン・ロッヘイの上流は山合の空が暗く濁つて、シカモアの古木に覆はれた橋のあたりには夕闇が忍んで來た、今日もあちこちで、ブラック・バードが盛んにぐせる。

グレン・ロッヘイ

ピアノで眼が覺める、これが本當に叩き起されたんだと感心はして見たが、小供なんだらうアンニー・ローリーか何かで、馬鹿〳〵しいから又床にもぐる、正式に起き上つた時は、日は高くシカモアの梢にかゝつて、街道は白砂の反射に眩しいほどであつた。

朝飯が終ると、ロッホ・テイの北岸に沿ふ山腹の街道を、ターマハンス (Tarmachans) の麓まで來た。湖は低く草野の裾を繞つて、山頂から曳くなだらかな斜面に、ブラックンの暗綠色がきわだつて、白樺や落葉松の入り亂れた間に、牛や山羊が小さく〳〵望まれた。《(武田曰) ターマハンスといふ山は、グランピアン山系のものと異つて、マイカ・シストの山塊で、中腹以上はミヅゴケが一面に生じてジク〳〵して居る。それでも頂上の岩壁には色々美しい高山植物が澤山生じて居る。山頂は幾つもの峰に分れて居て中々廣い。頂上から東北に Allt a Mhoirneas の流れを距てゝベン・ロワースがよく見える》。

牧場には崛强な山人がシャツの袖を短くくゝつて、大きな草刈鎌をふるつては飼料を作つてゐる。

空には眞白な雲が風に吹かれていろ〳〵な形に變る、そして丘の麓に展げられた湖水に網のやうな模様の染められるのが美しい。

大きな白樺の蔭に、百姓家の赤屋根がくつきり綠の中にぬけ出して見える、草の上にレインコウトをひろげて、寢ころびながら日記を書いて高野君へ宛名したが、その最後の數葉は萬年筆のインクが涸れて、草の露を筆先に滴らして辛うじて書き終つた。

同じ路を冷風に吹かれて宿に戻る。食事の時、例の發音婆さんに路を聞いて城址へゆく。橋のたもとからゴルフ・リンクをぬけて、オウクの暗い森に入ると、石の崩れた古塔がある。歸りはホテルの方へ戻らずに、リヴァー・ロヘイの右岸を上流に向つた。

初夏の日ざしはさすがに強いが、微風は氣持よく谷をわたつて、日向の草野でも汗を覺えない。原にはヒナギクとマーガレットが白く咲いて、スコッツバインの淺い木立をぬけると白樺の森にかゝる。低い石垣で區劃された百姓家がある、こんな廣い山の中でも、せゝこましく領分を定めなければ氣が濟まない人間の心が、不思議に感ぜられた。

白樺の森はなか〳〵奥深く、五時過ぎまで溪流に沿つて、路もない木蔭を六哩餘り歩いたが果が無い。クレーク・モアの斜面に近く川をはなれて、森の梢を見下ろしながら、片蔭になつた草原を一軒家まで引つかへして、リヴァー・ロッヘイの小橋を渡ると、今度は左岸の小徑を上流に向つて、Falls of Lochay まで來た。スコットランドで瀑見にゆくのは第一間違のもとだらうが、こゝでも完全に失望した、これは瀑布ではない、川の中に一間ばかりの段があつて、そこで堰かれた溪流に過ぎない。

シカモアの古木がある、木蔭に腰を下ろして、廣葉など寫して高野君へ畫はがきを送る。ブラックンの一面に生えた山の裾を通つてホテルへ戻る、まだ食事に少し間もあるし、夕日を浴びたミール・ナ・タルマッハン（Meall nan Tarmachan）の半面は、草の斜面が天鵞絨のやうに見えるので、キリン

の方まで撮影に出かけた。

晩餐後は城趾の森をぬけてロッホ・テイの埠頭にゆく。午後の九時はさすがに森蔭は薄暗い。草の中でかさ〳〵するのを杖でさぐると小兎が飛び出した、つかまへてポケットへ入れたまゝ埠頭へ來る。小舟が一艘遠い湖面に浮いてるだけで、狹い入江に覆ひかぶさる森蔭は、胸が押しつけられるやうだ。水ぎわには蘆の若芽がすら〳〵と丈延びて、綠の濃い川楊の茂みにロビンはゐないが、ミレーズの畫にありさうな所だ。

小兎はカクシの中でをとなしくして居る、然し考へて見れは、小包にして郵送する譯にもゆかず、もとの草むらへ連れて來て、そつと放してやつたが、遠く逃げやうともしない。

翌日はホテルの小さな馬車でこの路を送られて、キリン・ビーヤから十時四十分の船に乘つた。空は晴れたが甲板は非常に寒むい。「ハイランドの尤も美しき湖」とベデカーの云ふのは私には呑み込み兼ねる。ベン・ロワースのなだらかな斜面は美しいが、長さ十五哩と云ふ大きな湖だけに、少くも船の甲板からはまとまつた感じは得られない。《武田曰）自分はキリンから船でロワースに行き、そこからベン・ロワースに登つた。生憎フォート・ウヰリアムで時計を壞してしまつて、時間が確にわからないので、ケンモアからキリンに行く最終の船に遲れまいと、路もなにもかまはずに山腹を駈け下りて見ると、まだ〳〵早すぎる位なので、御蔭でロワース・ホテルでゆる〳〵茶を喫むことが出來た》。

東のはづれのケンモア（Kenmore）まで一時間半かゝる、埠頭に待ち受けたバスでアバフェルディー（Aberfeldy）へ來て、そこからは汽車でバースを經由し、エディンバラへ戻つた。

プリンセス街のクックの店へ行つて、那威行きの汽船をリザーヴする、トゥロンジェームまでの切符はウィルスン線で求めたが、そこから歐洲最北端のノルトカップまでの那威船がわからないので、

トッロンジェームへ問ひ合させたが、此所でぼんやり返電を待つのも馬鹿〳〵しいから、ニウカッスルで受信することにして、七月一日の出帆までの數日間、また山登りに行くことにした。

ステイション・ホテルに預けて置いた荷物をニウカッスルの停車場留めに送り、ハット・ケイスは倫敦の近藤君へ、借りて來た案内記と地圖は武田君へ郵送して、もうリュックサックと寫眞機だけになつて、明日からの旅程を考へ初めた。

カーランダー (Callander)

廿五日は朝の中クックの店に電話をかけたり、カルトン・ヒルへ登つたり、方々へ手紙を認めたり、久しぶりで忙がしい思ひをして、やつと十一時二十分の發車に間に合つた。平原と小丘の間を過ぎて、一時間餘りでカーランダーに着いた、武田君の泊つた Ancaster Arms Hotel に宿を定めて、食事が濟むと街の横手から、すぐ頭上にめぐらした絶壁の上へ登つて行つた。

いろ〳〵な用事でエディンバラへ戻つたけれど、さもなくばキリンから此の町へ直行した方が宜しい。ロッホ・ライは兎に角有名な湖水だから、船で渡つてケンモーアまで來るにしても、そこから先の景色は平凡だから、湖水のふちを馬車で走るなり、或は同じ汽船で引つかへして、キリンから汽車で、ロッホ・エールン (Loch Earn) あたりを見て、カーランダーへ出た方がよい。

カーランダー・クレーク (Callander Craig) の南は、街へ面した斷崖で、スコッツバインの下に屋根が低く見下ろされるが、北側はなだらかな丘から丘が起伏して、その間を深く忍ぐるケルティー・ウォーター (Keltie water) が絲よりも細く見下されて、黄色に咲いたゴースの原はいかにもハイランドらしい。然も遠山の背後からは、初夏の日を憶はせる雲の峯がむく〳〵して、クレークへ登りきると西の風がなか〳〵激しい。《(武田曰) ケルティーの流れが岩石に狹められて、その岩石が階段狀に積

重なつた所に、ブラックリンの瀑といふのが懸つて居るが、日本の山水になれて居る眼には感心は出來ない》。

ヘザーの花はもう咲きはじめて、遠くからは山が紫に見える。カーランダーの盆地に曳くベン・レディ（Ben Ledi）の裾にはロッホ・ヴェンナッハール（Loch Vennachar）が碧色に望まれた。頂上の岩の上を西に廻ると傾斜は一面のヒースになるが、分けてゆくとどこまでも左に石垣が續いて、街の方へ下りられない。後戻りも厭だし、垣を乘りこして常綠樹の森へ入る、いかにも幽邃でまるで庭のやうに見えるが、下蔭には何千と云ふ野兎が跳ね廻つてゐた。石でも叩きつければ即座に二三十は捕れさうだ、暢氣なところもあるものと感心しながら、歩きいゝ草原を麓へ下ると、木立が開いて忽ち立派な建物の前に出てしまつた。

どこかの邸内だなと氣がついた時は、もう三匹の番犬にいやと云ふほど吠えつかれた後で、喰ひつかれては事だから、手頃な石を片手に持つて、どん〳〵逃げ出したところは、今考へると餘りいゝ體裁ではなかつたらしい。あとで聞くとこれが有名な Leny House だつたさうだが、庭の中では見透しがきかず、テニス・コートや植込みを突つ切つて必死になつて逃げて行くと外圍ひの石塀へ達した。表門へ行けば出口があるとは悟つたが、此の際、門衛の顏など見たくも無いから、喰ひつきさうな番犬に石を叩きつけて、塀に飛びつくと、向う見ずに往來へ飛び下りてしまつた。運惡く通りかゝつた女連れが、餘程驚ろいたと見えて、こつちが膽をつぶすくらゐ悲鳴をあげた。

極りが惡いから知らん顏をして來てしまつたが、曲り角でふり返るとまだキョトンとして居る、巡査でも呼ばなければいゝが。ハイランドでは思ひがけ無い所に貴族の邸があるから、餘程注意しないと面喰ふ。

Leny River を渡つて、ティースの川向うをぐるつと一廻りしてホテルに歸る。此二つの合流點は廣

ろ廣ろとした濕原で、ベン・レディの右に遠く、ベン・ヴォーリッヒ（Ben Voirlich）の連峯を望むのは非常にいゝ。原にはマーガレットが白くつゞいて明るい景色ではあるが、いかにも落ちついた所だ。

ベン・レディ（Ben Ledi, 2875′）

標高は低いが、神の山と云ふ名を得ただけに、カーランダーから見た形は美しい。こゝに着いた次の朝、十時に辨當持參で宿を出ると、ティースに架けた石橋を渡つて、やゝ開いた草原から再び川を越すと、トゥローサックスの街道へ出る。山毛欅の林をぬけるとベン・レディの裾野に百姓家がある、Scott の Lady of the Lake にある Coilantogle Ford は此の近傍にあることなのだらう。登路はその横から入るので、山の斜面へ遠くまで標木が數へられる。登路の外に立ち入るものは何シリングの罰金だとか云ふやかましい制札が建てあつた。

山麓はなだらかな草原にブラックンが茂つてゐる。今度はネイルド・ブーツをニウ・カッスルへと送つてしまつたので、水づいた登路が非常に歩きにくい。小高い丘へかゝると、さつきの百姓家は眼下になつて、山羊の群れた裾野の蔭にロッホ・ヴェンナッハールが瞰下ろされる。登路は急では無いが、つる〳〵辷つて閉口したが、そのうち石の崩壞した草原にかゝつてやつと一息つく。

標木のつゞいた登路は、黑土がつる〳〵して非常に歩き惡くいから、まつすぐに山頂を目掛けて、ミルトン・ブルンによつた斜面を進んだ。カーランダーから登り二時間半乃至三時間と案内記にあるのは、正直に登路を辿つた時間だと見えて、宿から二時間を經た時は、已に頂上の岩の上で辨當を開いてゐた。山は樂だがその展望は中々いゝ、殊にロッホ・ルーブネーク（Loch Lubnaig）からレニー・リヴァーの狹谷の寂しい樣子がたまらなくいゝ。

イデレ・ンベ

辻村伊助氏撮影

頂上に二時間ばかりゐた。歸りは例の黑土の辷るのが厭だから、東側レニー・リヴァーに面した、コーラッハロムビー (Coireachrombie) の傾斜を下り初めた。頂上から暫の間は、ガラ〳〵の石原と草野で、難なく驅下りられるが、今朝の登りより距離が近いだけに、その斜面が終ると頂上からは見えなかつた崖が現はれた。もう引きかへすのも厭だし、無理に瀑をからんで下りて見たが、かれこれ一時間もかゝつて、レニーの岸に出た。靴下からシャツまで水だらけになつたから、行くつもりでゐたロッホ・ルーブネークも止めにして、カーランダーへ引き返す。ベン・レディの頂上より少し尾根を下りてからコーラッハロムビーにかゝればよかつたが、何しろ十二萬六千七百二十分ノ一の地圖が相手だから、等高線は少し込んでゐたが崖などは精しく書いては無かつた。《(武田曰) カーランダーからベン・レディに登るには、ロッホ・ルーブネークへ行く道により、レニーの峠をこえたら間もなくレニー・リヴァーの右岸に移り、尙北に山麓を進んで、スタンクと云ふ百姓家に出る、こゝからスタンク・グレンについて上ると、途に一寸見るに堪ゆる瀑もあるし、傾斜もひどく急でなくて樂である。カーランダーから山頂のケールンまで三時間半許りもかゝる。歸りは辻村君の登られた路を、山の背を東南に下ると、右手にはグレン・フィングラースをこえてロッホ・ヴェナハールやベン・ヴェヌーを望む景は絶佳である。自分は此の道を Coilantogle の百姓家、即ち辻村君の登り口に出ないで、それよりも下手の Tarandoun に下つたが、別に罰金もとられなかつた。しかしネイルド・ブーツをはいて居なかつたので、黑土に足を奪はれまいとしたせいか、それとも景に見とれたせいか、下りに二時間程かゝつた》。

トゥロサックス (The. Trossachs)

二十七日午前九時二十分、カーランダーの停車場前からバスの二階に座を占めてトゥロサックスへ

向ふ。レニー・ハウスの前からリヴァー・レニーを渡つて、昨日の途を西へ走ると、三哩ばかりでヴェナッハールの湖畔に近づく。街道はその北岸、ベンレディ山麓の密林を穿つてゆくのだが、山は見えないが、森と水は極めて美しい。山毛欅の木蔭に山羊が放してある、顔だけは面をかぶつたやうに眞黑で、何だか滑稽な樣子をしてゐるが、Highlander Black Faced と云ふ品種だ。

間もなくフイングラス(Finglas)の流れに架した Brig o'Turk を渡ると、いよ〳〵トゥロサックスに入るので、そこには自動車を乘り入ることを禁ずといふ立札があつた。やがて小さなロッホ・アッハレイ(Loch Achray)にかゝると、森蔭に沈んだ水を距てゝ、街道の正面に屹えるベン・ヴェヌー(Ben Venue, 2393')の寬かな草山が美しい。路はトゥロサックスの密林に入つて、冷つとする空氣まで今までとは急に樣子が變る。トゥロサックス、ホテルの前で一と休みしたが、こゝとロッホ・カットリン(Loch Katrine)の間の密林はスコットの詩にある 'In the deep Trossachs' wildest nook His solitary refuge took' といふ句をあり〳〵と見せつける程で、今まで見た最も美しいもの〻一つであつた。山毛欅、白樺、樅、落葉松等の、日の目も透さない位生ひ茂つた蔭に、羊齒の廣葉のやわらかい綠が鮮かで、「盛夏の夜の夢」の舞臺面を想はせる。サー・ウォールター・スコットが、The Lady of the Lake の場面を此の地に取つたのも、さてこそとうなづかれる。梓川の河畔神河內附近は、小規模ながらもここに劣らぬ景色であつたが、それも十餘年も昔のことで、已に六七年前に美しい密林の大部分は亂暴な人達に伐り去られてしまつた。

森の木がくれに、ロッホ・カットリンの東のはづれが現はれる。馬車は埠頭に停つて、私達は待ちうけた外輪の汽船に乘り移つた。そして船は靜かに暗綠の波を截つて、冷たい西風に齒むかひながら、入江を離れて Ellen's Isle に近づいた。

詩を胸に畫いてロッホ・カットリンに浮んだ人は、恐く多少の破幻(ディスイリュージョン)を感ぜざるを得まい。然

も一方に吾々の期待しなかつた何者かを見出して滿足するであらう。《(武田曰)勿論スコットの時代と今とは此の邊一般の光景が大分異つて居る筈だ。トッロサックスといふ名が Bristled territory といふ意味であるが如く、其の當時は此の邊一帶に深い籔で、今馬車の通る立派な路は只木の根が階段の樣になつて居た所を攀ぢて通行する外道はなかつたさうである》。

凡そハイランドの湖水として、最も人を魅する力のあるのは、暗綠に溷濁したその水の色であらう。氷河の裾にしぼれた水、乳白に一沫の蒼碧を混じたアルプの湖水は、單に水として吾々が想像する以上に重々しい、しかも彈性のある光澤を與へる。徒に透明な水は重味が無い、見倦きがする、此の腐蝕土を含んだ水は、風立てば波のうね〳〵するまゝに、湖邊の物象は明快に反映して、フレキシブルな鏡を渡るやうな氣がする。

實際この暗綠に溷濁した水面の反射は、ハイランドに入るまでは想像し得なかつた位である……或は時としてそんな汚れた水がと嘲ふ人が無いでは無い、又、事實こゝを旅した文士で、濁水云々と惡口を云つた人もある。然し水道の濁つたのと混同してはいけない、飲料ならばアポリナリスかヴィシーで結構だ、湖水の水を飲む必要を認めない、いくら毒草でもコマクサやトリカブトを美しいと見る人は、少くもロッホの水と飲料の批判とは區別して欲しい。《(武田曰)ロッホ・カトリンの水は一八五九年十月十四日に起工式を擧げた水道工事によつて、三十六哩を距てたグラスゴウに引かれてある。日本の文士とやらはそれを知つて居たので湖水の色を云々したのかも知れないが、濾過さへ充分に行へばこれしきの事は何んでもない。雨降りには馬糞だの田圃の水だのが流れ込む玉川の水が東京市民の上水道として用ひられることを考へれば、蓋し思ひ半に過ぐるだらう。殊に佐賀縣の某市の水道の樣に、地下水だから清潔だといふので、それを貯水池に導いて微生物を一杯繁殖させた上、臭氣芬々たる水を濾過もしないで市民に呑ませるなどは、考へてもゾッとする》。

ストローナッハラッハール (Stronachlachar) のホテルの下で上陸すると、三臺の馬車が待ち受けてゐた、ドライヴァーはいづれも絹帽で眞紅の上衣を着込んだのが人を馬鹿にしてゐる。峠へかゝると路はいかにも高原らしく、ペン・ヴェヌーも頂上の丘に隱れてやがて下り坂になる。路ばたの石に腰かけた乞食が、馬車を見ると急にバッグ・パイプを吹き初めた、妙に考へさせるやうな音だ。丘を繞るともう聞えなくなつた、路に沿うてたつた一本の電線が架つてゐるが、遠い人里の聲も聞けば寂しく響きさうでかへつてもの寥しい。ベックリンの自畫像に骸骨の彈く只一筋のG線を思ひ出した。

左に小さな湖ロホ・アルクレットがある、坂路をグレン・アルクレットに沿うて西に下ると木立に入つて、やがてロッホ・ローモントが廣ろ〳〵と見渡される。坂の終りは船つきのインヴァースネッド (Inversnaid) で湖水に面した同じ名のホテルに着いたのは午後一時半。湖を南へ通ふ汽船は二時の出帆ださうで、その間に食事を終り繪ハガキを認めなどした。

鷗の群に包まれて北から來た汽船は乘客を滿載して、今まで旅客らしいものにろくに逢はなかつた身には、何だか妙な氣持ちがした、それに女連が多いので鷗よりも遙かに騷しい。殆んど全部は湖水の遊覽客で、グラスゴウ附近から週末(ウヰークエンド)にやつて來たものらしい。《(武田曰) 自分が大雨の中をトゥロサックスやロホ・カトリンを旅して、インヴァスネドへ着いて晝食して居ると、空はカラリと晴れてしまつて、只白い霧が風に吹かれてロホ・ローモントの兩岸の山腹を高く低く飛んで居た。船に乘つて湖水を下ると兩岸に峙つ山の中腹には雨水がしぼれて大小幾つかの臨時の瀑を懸けて、景は平常よりも奇拔であつた》。

ペン・ローモントの麓、ロウチーデナン (Rowardenan) の船付きで下りたのは私一人、船は鷗を誘つて對岸へ去つてしまつた。埠頭に近いロウチーデナンホテルに室をとつて、御茶が濟むと撮影ながら湖水のふちの丘上を南へ歩いて行つた。

ベン・ローモントは草山の小山から小山へ次第に高く、裾はなぞひのヒースになつて居る、空は高く、秋晴のやうに雲も無く、ヒースを渡る風が冷たい。二哩もゆくと山毛欅の木蔭に小さな湖がある、武田君の話に、この水に影うつるロッホ・ローモントの對岸の山が非常にいゝと聞いたが、今日は風がひどくて、淺い水は盛んにしぶきが立つて、寫眞はとてもものにならなかつた。

然し實際對岸の三山、ベン・ブレーック (Ben Bhreac) を眞ン中に、トゥーリッヒ・ヒル (Tullich Hill) とベン・リーオッホ (Ben Reoch) をその左右に遠望する景は中々美しい。風がやむのを待つのも暢氣らしいが、折角來て寫眞も撮さないと、又武田君に文句を言はれさうだし、さし當つて用事も無いから、山毛欅の木蔭に寢ころんで、本など讀みながら二時間餘り待つて見たが、風はます〳〵激しくなるばかり、あきらめて宿に歸る頃は、あれ程晴れたベン・ローモントの頂近く、眞つ黑な雲が渦まいて、湖水の景色も妙に凄く變つて來た。《(武田曰) 折角辻村君に勸めてドゥー・ロハーンに行つて貰つたが、烈風で湖面に波が立つては美しいリフレクションもなし、寫眞など思ひもよらぬことで、甚だ遺憾に堪えない。しかし風のやむのを木蔭に二時間も待つてくれた君の根氣にも感心だが、さうと知つたらも少し先へ行つて、ロホ・ローモントの汀におりて見て貰ひたかつた。小流に架した橋を渡つて間もなく右に折れると直に波打ぎはで、そこからの景色は實に美しい。音樂好の君のことなら無論であらうが、自分の樣な者でも "The bonnie banks o' Loch Lomon'" を思ひ出さずには居られない》。

宿へ戻ると中庭のシカモアの大木がざは〳〵搖いで、窓から見る湖は、まともの風にしぶきが立つて、眞つ白に騷いでゐる。北の空は怪しく搔き曇つて、ベン・リーオッホの蔭に日は紅く沈んで行つた。

◎スイランド　辻村

ベン・ローモント（Ben Lomond, 3192′）

湖水に面した斜面からは二條の登路がある、然し水づいた原さへ氣にしなければ、頂上をめがけていづれの方角からも容易に登られる。二十八日の日曜は生憎ひどい天氣で、起きて見ると昨日の風は北に變つて、山頂から吹き下ろす濃霧の、裾野に湧き返るのがいかにも北國の山らしい。

風は兎に角、此の霧では登つても仕方が無いとは思つたが、明日は晩までにニューカッスルへ行く約束だから、行けるところまで行くつもりで、急に辨當を仕度させて十時半にホテルを發つた。

すぐ前の坂を登つて丘の上に出ると、間もなく霧に卷かれてしまつた。Path to summit と地圖にもある通り、僅ながら路形だけは認められる、磁石を頼に、昨日遠望した地形を想像しながら、ブラックンの茂つた原を登つて行くと、烈風につれて雨がひどく降り初めた。斯うなると、路と云はず草原と云はず、凹い所は小川になつて、餘ほど注意しないと方角をあやまる。

麓でしきりに呼び聲がしたが、此の吹き降りに待つのは耐らないから、御免を蒙むつて登つてしまつたが、後で聞くと、同じ食卓の連中で、折角週末（ウィークエンド）にグラスゴウからやつて來たのが、路が分らないで引つかへしたさうだが、成る程武田君の注意の通り磁石は放せない。然し地圖の方は、途中で路形は消失してしまつたので、かれこれ一時間あまり出鱈目に高所を目掛けて進んだから、餘り役にはたゝなかつた。

頂上に近づいて又路形が表はれた、この邊には大岩塊が重疊して、大天井かゲーロ岩附近を旅行するやうな氣がする。岩蔭をはなれると急に風がひどい、急な登りが平らになつて、何だか庭のやうだと思つたら、すぐ鼻の先に木標が顯はれた、こゝがベン・ローモントの頂上であつた。

着いたのは十二時二十分、餘り風雨が激しいので、さつきの岩蔭に下りて來て晝食にする。サンド

ウィッチはぐちや〳〵に濕れて、喰ひかけの辨當でも貰つたやうな氣がする。岩蔭で風はさほどでも無いが、横なぐりに吹きつける雨は中々激しい。

いゝ加減にして岩の間を飛び出すと、同じ路を麓をさして驅け出した、草原にかゝると此の大雨の中を、飛んでも無い方角から登つて來る若者に逢つた、こんな天氣にも登る仲間があるのは有り難い。頂上へゆく路を敎へて別れたが、ロウチーデナンゝら來たのでは無いさうで、これから下りたらモーター・バイスィクルでグラスゴウまで歸るのだとは、いよ〳〵以て恐れ入る。

ヒースをはづれると、ブラックンの原にかゝる、麓の方は雲も無く、湖の面にはほんのりと薄日さへさしてゐた。南の果に數の多い小島が墨繪のやうに望まれる。

ふりかへると、ベン・ローモントの雲のはづれに虹が現はれた。ベン・リーオッホの頂には雲が滲んで、山腹の草野はなめらかな膚を現はしてをる。此等に圍まれた湖水の色は蒼空のやうに美しかつた。（了）

ハイランド地名の讀み方

Abergeldie	アバゲルディー
Achray	アッハレイ
Aviemore	アヴェモーア
Balla chulish	バラフーリッシュ
Ballater	バーラター
Ballochbuie	バーロッホビューイ
Balquhidder	バルキッダー
Beinn Bhreac	ベンブレーック
Beinn a Bhuird	ベナブールト
Ben Avon	ベナーン
Ben Muickdhui	ベンマクドゥイ
Braemar	ブレーマール
Braeriach	ブレーリアッハ
Cac Carn Beag	カックカールンベーイック
Cairngorm	ケールンゴルム
Callander	カーランダー
Callater	カーラター
Carn nan Sgliat	カールンナスレイヤ
Coireachrombie	コーラッハロムビー
Corriemulzie	コリーマルシー
Creag na Leacainn	クレークナレイッヒン
Craigendarroch	クレーゲンダロッホ
Cruachan	クルアッハン
Cuidhe Crom	クーディークロム
Dubh Loch	ドゥーロッホ
Earn	エールン
Geal Charn	ギールカールン
Inversnaid	インヴァースネッド
Kingussie	キンギューシッヒ
Kreag nan Leachde	クレークナレーイッヒ

岳	山
Krianlarich	クリヤンラーリッヒ
Larig Ghru	ラーリッヒグルー
Loch an Eilean	ロッハネラン
Loch an Eoin	ロハンイーアン
Loch Avon	ロハーン
Loch Eunach	ロホユーナッハ
Lochnagar	ロホナガール
Lui Beg	ルーベック
Meakle	ミーケル
Meall Chuirn	ミールフーリン
Meal an t-Suie	ミーランスーイ
Meall an t-Sluichd	ミーランスーイッヒ
Meal na Guaille	ミールナグールヤ
Muick Dhui	マクドゥーイ
Mullach nan Coirean	ムーラッハナンコーラン
Oich	オーイッヒ
Quoich	コーイッヒ
Reoch	リーオッホ
Rothiemuchus	ロヒマルハス
Rowardenan	ルウォーデナン
Sgor mor	スコールモーア
Stob Coire an Lochain	ストップコーランロッハーン
Stronachlachar	ストロナッハラッハール
Tarmachan	タールマッハン
Tubhair	トッペール
Tullich	トウーリッヒ
Vennachar	ヴェナハール
Venue	ヴェヌー
Voirlich	ヴォーリッヒ
Vorlich	ヴォーリッヒ

雜錄

立山東面の登山路に就て

この登山路（勿論路はない）は、從來の信州方面から登る道、即ち温泉道や、ザラから鬼ヶ岳を登つて行く道や、御山澤の乘越から登る道を行かずに、直接黑部川から立山雄山下の大カールを突破して、雄山の三角點の所から頂上を極めることが出來るもので、先づ平小舍を起點とすれば、左岸（立山側）の岸邊を傳つて、約半日行程で御山澤か黑部川へ落ち込む處まで辿り着くことが出來る。私は立山の一の越から御山澤を降つて黑部川へ出て、翌日平小舍に至る三分の二强の處まで遊びに行つた。けれども晝食の用意が無く、途中に空腹になつた爲、殘念ながら小舍までは行けずに引返して來たが、荷を持つては半日行程は優にかかると思つた。それから御山澤を溯つて、一の越から室當迄は、荷物を持つて一日には可なり骨が折れる。御山澤は、乘越の溪流の落合から下は、兩岸がさし迫つてゐるから、黑部川近くでなければ適當な夜營地はない。然し一の越迄出ずに雄山へ登る目的ならば、御山澤の黑部川落口から一町程この澤を登ると、向つて右手の方から溪流が落下して來る。それを上つて立山の東面へ入つて行くので、この澤は、室堂の人々はライデン谷と云つてゐた。信州の方ではタンボ澤と云ふさうで、始めの中は樂な處だが、中程に大きな崩れがあつて、それから小瀧が四つ程連續してゐる。然し水量が大してないから、濕るつもりならば匍ひ上つて行くことが出來る。この瀧附近が山相が稍峻險なので、恐らく立山東面を通じて皆同じ樣な地勢だと思ふ。一番小規模のこの澤が一番樂で、御前澤になると遙かに險惡の趣きがあると信じてゐ

る。三時間も登ると、至極なだらかな殘雪の上へ出る、それからもう一面の大きな窪地狀の高原になつてゐて、その一番大きな雪の上を辿つて行けば、立山雄山の三角點から御山澤の方に出てゐる尾根と、東方に二六八一米突の三角點のある山稜とか、電光形になつてゐる間に出る。然し尾根近くなると縱谷が狹ばまつて、雪溪はすばらしく急峻になつて來るのに、裂虛が幾つも横に入つてゐるので、一番高い尾根附近には兎ても辿り付けない。私は雄山下のカールに出る豫定だつたが、如何にも鼓が酷さうなので、この道を登つたけれども行くに隨つて、餘り雪溪が急峻になつて來たので、危險を感じて引返したが、時間の都合でカールの方へ行かずに、御山澤の方へ出てゐる尾根へ上つて、夜營をしてしまつた。然し澤から雪溪へ來て窪地へ出たらば、右へ〳〵と廻つて、二六八一米突の磊々たる岩尾根のつきる邊にある、なだらかな鼓に蔽はれてゐる、丘の樣な尾根を目標に登つて、それを越せば最早御前澤の領分に入るので、即ち雄山下の大カールの下に出る。それからカールを登り切ると、雄山の三角點の直き下に辿り着くことが出來る。私は尾根に夜營して、翌朝雄山のカールを下つて、この登山路の樣子を畧ぼつき止めて來たが、こゝなら荷を持つても大して骨が折れずに登ることが出來ると思つた。兎に角この登山路は御山澤も同じだが、雨天には兎ても登れないから、多少食糧を餘分に携帶して行く必要がある。

平の小舍から御山澤の落口までは、立山側の崖側を縫つて行くので、行けなくなれば黑部川の淺瀨や洲を左右したり、岩壁（カベ）のへづりをしたりして又元の崖側へ戻つて行けばいゝ。これは餘程以前に、大町の岩魚釣が、年々御山澤の方まで入つてゐた爲、所々樹木に山刀がけの痕が付いてゐる、然し道は全く湮滅して、根曲笹や灌木、雜草の密叢になつてゐて、それらしい跡は今では殆ど見出せない。兎に角普通の登山に比して、遙かに險惡なので、弱い人夫では荷物を持つて、壁へヅリをしたり、崖を登降したりして行くことは中々骨が折れる。殊に雨でも降らうものなら、先づ途中の

籔の中で滯在をしなければならない。御山澤迄の黑部川は淺瀨も多く、川巾も廣いから、信州側への徒涉點も處々にある。然しそれは、左岸が通れる限り何の役にも立たない。

御山澤が黑部川に突き入る處は、大きな池の樣な丸い淵になつて、スバリ岳續きの、二千數百米突もある山稜の頂點から、下が直立に近い懸崖になつて、この淵からそゝり立つてゐる。御山澤の落口から下流の黑部川は、深淵の連續で、溪水はその碧潭の上を渦卷きながら、逆落しに流下して行く。そして、その下幾尋もの底に游ぎ廻つてゐる。岩魚の群を見たときは、私は心から釣がして見たくなつた。もうこの下は川巾も狹くなるし、流れは益々急になつてゐるから、兎ても徒涉なぞは思ひも及ばない。恐らくこれから下流を通して、徒涉は全く不可能だと思ふ。

御山澤は好い澤だ。乘越に分れる邊から暫くの間は可なり荒れて居るが、下方に行くに從つて、滴たる如き豐潤な濶葉の密林が流れを蔽ふて、谷の勾配の緩やかなるにつれて、何とも云へない柔かい、美しい感じを與へる。黑部川近くなると、川筋が平濶になつて、川楊の大木が森林を爲し、溪流が縱橫にその間を走つて行く樣も面白い。大殘雪の下からのみ迸り出る、この澤の水の冷たさと、その水量の多いのに、私は驚かされた。私は落口に夜營をしたが、前は里部川の深譚と、スバリの絕壁に臨み、顧みると立山本峯富士の折立に至る雪峯が、晶絕の縱谷を並べて、東西の深林の上から、その壯容を連らねてゐた。兎に角いゝ處だ。然し立山東面は御山澤と云はず、ライデン谷と云はず、中腹から下の籔は凄さまじいもので、その中を潛つて行く丈でも隨分疲勞する。

序でだが、ライデン谷の南方にある高地附近が、どうも五萬分の一の地形圖のと大分違ふ樣に思はれた。この澤の貫流してゐる兩岸の高地が、略同高度の樣に曲線が入つてゐるが、實際は御山澤寄の方のものが、二百米突前後も高くなつてゐる。そして此高地の南の方から小溪が落込んでゐる樣に地圖に見えるが、可なり氣を付けてゐたがそれは見當らなかつた。ライデン澤を二三町登る

と向つて左側に三十人位宿れる大きな岩窟と、五六人位入れる小さなものとがあつた。兎に角この方面は日本アルプス中第一の遊山地である。（冠）

大日岳早乙女岳奥大日岳登路

二三年前、地獄谷の湯を引き、五色温泉を創めると云ふので、稱名川の右岸を、地獄谷迄路が開かれた。其温泉は物にならなかつたが、粗末な路が、今でも一の谷の右岸に添つて付けられてある。去年あたりから、地獄谷の硫黄を運搬したり、沿道から出る鑛石を採掘する爲、立山鑛業會社と云ふのが事業を始めて、今年は立派な道路が雜穀谷の先迄付けられ、今迄登山者のあまり行かなかつた、この方面も非常に便利になつた。芦峅の方から行くと、藤橋を渡らずに、左へ入る道を、稱名川の岸に添つて一時間餘も行くと、小さな、鑛業所の事務所へ出て、その少し先にコヅラ小舍と云ふのがある。それから三十分程で、雜穀谷に出る。又一時間程行くとワサビ谷の小舍と云ふ大きな人足小舍がある。其處から大日平——阿彌陀ヶ原と一の谷を隔てた高原、——迄は、稱名川の崖側の歩道を行くので、稱名川の對岸が二千尺近くもある大きな岩壁續きになつてゐるのが、中々の壯觀で、その奥の方から稱名瀧の全部或は一部時々見える。大日平へ出る乘越近くになると、道が急になり、登り切ると尾根らしい森林が續いて、雜穀谷の上流、ザクロ谷がすぐ下に見え、もう殘雪が處々に點在してゐる。ワサビ谷の小舍から乘越迄は、荷物を持つては七時間以上かゝる。右に山稜を少し行き、左に廻りながら二三十分も崖上を行くと、大日平と云ふ壯快な高原に出る。約一時間半も原の中に切つてある一筋路を行くと、一の谷に沿ふて左に曲る樣になつて、暫く行く內原が低下して、その下の美くしい窪地の中に、大きな新らしい小舍が二つ程見える。それが大日平の小舍で、重荷を負はしては芦峅から一日半位かゝる。もうこの小舍迄來ると、大日、早乙女の二峯は、城壁の樣に連らなつて、その谷々や頂上の樣子がよく見える。大日平は阿彌陀ヶ原よりも遙かに狹いが、

何となく引縮つた山懷の高原らしい處で、夕方なぞに小舍の南方の丘へ出て見ると、一の谷向ふに連らなつてゐる森林の後から、藥師ヶ岳が殘照に夥しい額の雪を光らして、その赤裸々の豪容が悠大な高原の緩坂の上へ拔け出てゐるのが、何とも云へぬ絶景を容ちづくる。大日平の小舍は夜營地としては胸のすく樣な心地よい處で、唯大日續きの此方面には雪の少いのが如何にも殘り惜しい。

小舍からなだらかな凹地を北東に下つて行くと、籔の中へ入り、小さな溪流に出る、それを暫く行くと、左手へ曲る樣になる。私等はそれから五萬分の一圖の、二四九八米突の三角點のある峯、即ち大日岳の方向へ、籔を横切つて一時間程行き、小流を登つて殘雪の上へ出て、ミヤマハンノキや根曲り笹の籔を横つて、大日岳の西南、即ち大日平の方に出てゐる尾根の、可なり上の方へ出た。それから尾根を傳つて、大日岳に登つたが、唐檜の森林の下が、ミヤマハンノキの密叢になつてゐるのに、上の方へ行くと、長大な偃松が茂り出して中々歩きにくいので、輕い荷を持つても半日近くかゝつた。

大日岳から早乙女岳までは、二三十分もあれば登れる。この峯は三ッ程の隆起が連らなつて、一寸面白い現象をしてゐる。(五萬分の一の地圖の早乙女岳とあるものは無名の低山で、芦峠の者によると、その東にある二四九八米突のが大日岳で、その隣にある三つの隆起を有するのが早乙女岳、それから室堂乘越の一番近くにある二六〇五米突のが奥大日岳である。伊折の者は奥大日岳を前大日岳と云ふて、大日嶽の方を奥大日岳だと云ふてゐた)。私等は人夫一人を連れ、殘りの者に荷を持たせて、一の谷に沿ふてる廢道を室堂へ出させたから、一日で大日平から室堂迄出られたが、荷を持つてゐてはどうしても途中に夜營する樣になる。早乙女岳の裾を下り切ると、知らず〳〵南側の窪地に出る、山稜は巨岩が堆くなつて窪地寄りの方の下に、四五人位宿れる岩窟がある。この附近は南側の方が廣いのに、眺望が甚だ佳く、高原にでも夜營してゐる樣な氣持のする處だ。

山稜は奥大日岳のが一番長い。登りかけると偃

松の原になつてゐるので、迂闊に其中へ入らうものなら、飛んでもない勞力と時間とを無駄にする。これは右横の方の偃松の少い處を選んで、ヘヅッて行けば、別段困難もなくその次の隆起に辿り付ける。それから二三の小隆起を越すと、最後に奥大日の三角點が鼻先に見える。この山の頂點は、山稜から少し北の方へ突き出てゐる爲、霧の深いときは餘程注意して降りないと、室堂乘越の方へ行かずに、立山川の方へ出てゐる尾根へ降りたくなる。こゝまで來れば、室堂乘越までは半時間もあれば降りられるし、それから河を徒渉して地獄谷に出て、御厨ヶ池の方から室堂へ一時間もあれば達せられる。

大日の山稜は南側の方は雪が少ないが、立山川の方は驚くべき大殘雪に埋められて、山側の到る處に盛んに雪田や雪堤を築き上げてゐる。奥大日岳の雪窪も凄まじいものだが、大日岳を早乙女方面から見たのが、一番壯大な感じがした。高山深谷第一輯の石崎氏の撮影されたものがそれであつた。（冠）

高山植物雜記（二）

武田久吉

四　惠那山のダウダンツヽジ。秋期惠那山頂を飾るダウダンツヽジの紅葉が、一大美觀を呈することは、夙に會員八木道三君から聞く處で、其の美しいだらうといふことは想像するに難くはなかつたが、其の所謂ダウダンなる植物が、普通庭園に見る處のダウダンツヽジ即ち Enkianthus perulatus, Mak.（=E. japonicus, Hook. fil.）と同一種であるかどうか、或は亞高山帶に見る同屬の他の種類例へばサラサダウダンででもあるかどうか、一向確證がなかつたので、その如何なる植物であるかを確定し得る日の速ならんことを冀望して居つた。

從來ダウダンツヽジの自生地は、專門學者の間にも疑問であつたもので、その自生地が土佐に確證されたのは、實に去る大正元年八月のことである。同國では高岡郡能津村錦山、同郡日下（クサカ）村中村附近、土佐郡土佐村宮ノ窪附近、同郡十六村行川（ナメガハ）、上里（ジヤウリ）の坂路及び柱谷の四產地が、大正元年から二

年に亘つて發見されたのであるが、その以後邦內他にその自生地を知られなかつた。從て若し眞正のダウダンツヽジが惠那山に——而も聞くが如き多量に——產するとすれば、植物分布學上甚だ興味のあることであるのは言を俟たない處である。

熱心な八木君は昨春五月、東濃中津の人に囑して、惠那山中に開花せる自生品を採集させて之を予に送られたので、早速之を檢するに、花梗及び葉柄が紅色を帶びない點の外は、通常庭園に栽植されるダウダンツヽジと異るなく、決して同屬の他の種——例へば山地に多いシロダウダン、ベニダウダン、サラサダウダン等——でないことがわかつた。しかし予は万一の誤謬を恐れて、之をシャクナゲ科專攻の小松理學士の精査を煩はした處が、同氏も亦そのダウダンツヽジに外ならないことを證明された。故にダウダンツヽジが惠那山に自生することは最早秋毫も疑ふの餘地はないので、予は此の興味ある事實を報告するの光榮を喜ぶと共に、その闡明の爲に努力を吝まれなかつた八木君の誠意に對して敬意を表する處である。

土佐にてはダウダンツヽジは必ず蛇紋岩の地に生ずるさうである、今此の植物を花崗岩の山に得たのは、本種の生育地に關しての新事實である。

惠那山には、前記のダウダンツヽジのみならず、ベニダウダンも亦生ずるので、恐らくは相混生して秋期山頂を燃ゆるが如く彩るのであらう。去歲六月に東京植物學會例會の席上で、松村博士が日本植物名の語源について講演された時、ダウダンは即ち昭丹 (tau dan) から出た語で、昭は耀、丹は赤色即ち葉の赤變するに取つたものだと言はれた。此の美しいダウダンを以て蔽はれた惠那の山巓は、他の條件から言つても、紅葉の名所として一流のものであらうと思ふ。

尙ベニダウダンは名古屋附近の山地に少くないので、同地の槖駄師は之を盆栽として販ぐことは敢て稀ではない。

五　サギスゲとワタスゲ。日光赤沼ヶ原を初め類似の地にはサギスゲ及びワタスゲの何れか又は兩方共に生じて居るのは山地旅行家のよく知る處である。從て是等の名が紀行等に現はれる場合は少

くなく、手近な例を擧げると、第十一年第三號にある拙文中三九頁第八行に「サギスゲの白花」云々（白花は白穗の誤）や、第十二年第一號に出て居る大島、田中兩君の記文中五三頁第十四行にも「サギスゲ」の名が見えて居るし、五六頁に對する火打火山の寫眞には兩君の所謂サギスゲと思はれる植物が明に認められる。此の外では拙著「高山植物」第一版一三頁及び第二版一四頁にも「サギスゲ、ワタスゲの白穗」云々の語がある故、此の兩者の區別を明にして置くも無益なことではあるまい。而も兩者共にスゲ科の Eriophorum なる屬に隸する別々の種類である。

先づ第一にサギスゲ、ワタスゲの兩者を學名に對照して見ると、其の主なるものは左の通りである。

日本植物名彙（明治十七年出版）
Eriophorum gracile　スヾメノケヤリ、マユハキグサ。

日光山植物目錄（明治二十七年出版）
Eriophorum vaginatum　ワセワタスゲ。
Eriophorum gracile　マユハキサウ、ワタスゲ。

改正增補植物名彙（明治二十八年出版）
Eriophorum gracile　ワタスゲ、スヾメノケヤリ、マユハキグサ。
Eriophorum vaginatum　サギスゲ、ワセワタスゲ。

帝國植物名鑑、下卷前編（明治三十八年出版）
Eriophorum gracile　サギスゲ、マユハキグサ。
Eriophorum Scheuchzeri　ワタスゲ、スヾメノケヤリ。
Eriophorum vaginatum　和名なし。

改訂植物名彙後編（大正五年出版）
Eriophorum gracile　サギスゲ、マユハキグサ。
Eriophorum Scheuchzeri　ワタスゲ。
Eriophorum vaginatum　ワセワタスゲ、スヾメノケヤリ。

右の內改正增補植物名彙は一番廣く行はれた書物であるが爲に、此の書物に出でて居る名が多く用ひられるが、兎に角前記の書物を通覽すると、E. gracile なる植物はサギスゲ、ワタスゲの兩名が配せられたことさへあるので、單に和名を聞いただけでは、何れの種類であるのか一寸判別に苦しむ

むけである。

偖是等の名稱を確定せんが爲に、其の基となつた理科大學の標品を檢査すると、採集年月は不明であるが、兎に角一番古いと思はれる標品で、故伊藤圭介博士の筆蹟で次の如く記した名箋のある標品がある。

スヾメノケヤリ　日光
マユハキグサ　ワタスゲ
タテヤマワタ
Eriophorum angustifolium
日光赤沼ケ原　又立山戸隠山ニモ產ス

實際のところ此の標品は Eriophorum vaginatum であるのだが、一時は E. gracile だと考へられたり、又は E. Scheuchzeri だと推定された爲めに、前記の如く年代と共に此の標品に充てられた學名が變遷したのである。依てこれが E. vaginatum だとわかつて見れば、此の名箋にある四つの和名は皆同一植物の異名となるべき者である。

次にサギスゲの方は、これも年月は明でないが、多分明治十年前後に、當時横濱に居た花戸の L. Böhmer といふ獨逸人が、北海道で採集した Eriophorum gracile の標本があつて、それには E. angustifolium サギスゲと命名してある。これが後來サギスゲの和名の基となつたもので、從つて E. gracile にはサギスゲなる和名一つしかないことになる。

これでサギスゲ、ワタスゲの問題は一段落をつけたのだが、まだワセワタスゲなる和名と Eriophorum Scheuchzeri なる學名がとり殘されてある故、次にこれを簡單に始末すると、元來ワセワタスゲなる和名は誤つてワタスゲ其の者につけられた名であるから、寧ろ廢棄してしまふ方が混雜を起さなくて宜いと思ふ。又此の學名の方は日本から清水峠產のワタスゲの標品を英國キュウ植物園に居た C. B. Clarke と云ふ人に送つて檢定を依頼した時、同氏は之を E. Scheuchzeri と誤認して左樣返答をしてよこしたが爲に、名鑑に此の名が現れたので、眞正の Eriophorum Scheuchzeri は近年北海道で發見されて、これにエゾワタスゲなる

和名が命ぜられた。

最後に記すべきはサギスゲとワタスゲとの區別の要點である。本文の初めに引用した鎌ヶ池や高谷の野地又は立山等に生ずる一莖一穗のものが、ワタスゲ即ちスヾメノケヤリ、一名マユハキグサ、一名タテヤマワタで、北海道や日光の赤沼ヶ原に產することを知られて居るサギスゲは一莖數穗に分れて居るから、一見してわかるのである。

六　シラネアフヒ。此の植物は內地の高山には通有とはいひ難いが、立山とか白山とか、又日光や戸隱には決して稀ではなく、亞高山帶の多少陰濕の地には、所によると一面に生じて、花期には美しいセルフカラーのカーペットをを現出することがある。北海道では函館や札幌では附近の山地に一向鮮くなく、晩春山腹や溪谷を埋めて美しい群落を形作るのである。

さて此のシラネアフヒといふ名は、日光の白根山から出でたもので、此の草が同山に多く、又恐らく初めて草木僻ある人に知られた初めなのであらう。寶永七年(一七一〇年)に染井の花戸伊藤伊兵衛が著した增補地錦抄卷之六に、「しらね葵　夏初花むらさき葉は大きく丸く切込有　やぶれすげがさといふ草に似たり」とある(五丁裏)。これが此の名が記錄に上つた最初で、其の圖は天保八年正月(一八三七年)に上梓されて植田孟縉の日光山志卷之四に、椿山人寫生と號するものが最初であると考へられる。しかし此圖は葉はまだしもとして、花は實物とはあまりに甚しく異つたものであるが、稍正確なるものは天保十四年(一八四三年)にミュンヘンで出版になつたスィーボルト及びツッカリニ兩氏著の Florae Japonicae familiae naturales 第一圖版に出て居る。やゝ遲れて安政三年(一八五六年)に上木した飯沼慾齋の草木圖說卷之十二にも圖說があるが、あまり精密なものではなく、又其の當時は何の類とわからなかつたと見えて、「其族未考」としてある。

以上二三の文獻を擧げたが、其の內スィーボルトがシラネアフヒ屬を建設した基となつたものは、北海道產の標品で、其の當時和名はわからなかつたのか何も記してはないが、後年これがシラ

ネアフヒに該當するものであることは伊藤圭介博士によりて定められたのである。

さてシラネアフヒは北海道には所によつては少しも稀少でない爲に人の注目する處となり、それにヤマボタンといふ名が命ぜられた。それは可なり古いことであるらしく、予の知る處では文化十一年一月十二日（一八一四年）發行の北齋漫畫第八卷にもその圖があつて、側に山牡丹と記してある（二十二葉表）、そしてこれが記錄として最初のものかと思はれる。勿論これは北齋が其の材料を得た人から敎へられたのであると思ふ。此の漫畫にはこれに續いて同じく北海道產の三角草と黑百合との圖が出て居るが、その三角草といふものは、今吾人がオホバナノエンレイサウ（Trillium kamtschaticum）と呼ぶものである。

シラネアフヒの花色は通例淡紫であるが、時には、紫のキキャウだのツリガネニンジンだのにもあるが如く、白花のものがある。しかし之を直に一箇の變種として名をつける（Glaucidium palmatum var. leucanthum, Makino）ことには自分は贊成出來ない。若しこれが許されるならば、花色の濃いものにも何とか名を與へねばならず、加之若し生品であつた場合に、翌年同じ根から出た莖に色の異つた花が咲くことは有り勝のことである。

此の白花のものよりも面白いのは、エゾアフヒの名を得た Glaucidium paradoxum, Makino で、大體はシラネアフヒと異らないが、雄蘂のあるものは變じて心皮の狀を呈し、又心皮の數はシラネアフヒの二なのと異つて、四個其の基に於て癒合して居るといふのである。予は其の原標品を檢するの機はないが、記載を熟讀しただけで、それがシラネアフヒの畸形の標品に外ならぬことを想像するに難くないのである。元來此の類の植物では雄蘂が變じて花瓣狀等を呈したりすることは決して稀でなく、又シラネアフヒに於て雌蘂が一個乃至三個の心皮より成ることは往々あることで、敢て驚くには當らないのである。而もエゾアフヒの四個の心皮の中二個は發育不完全であるといふに於ては尙更らのことである。

シラネアフヒは通例莖頭に只一個の花を着くる

にすぎないが、極めてよく發育したものでは、時に二個の花を着くることがあるもので、其の場合通常苞であるべき葉が、一寸總苞になるかたちである。

前記シラネアフヒの一畸形品であるエゾアフヒでは、四個の心皮が存在して、其の基が癒合する點は、一寸北米に產する Hydrastis といふ屬を聯想させる。實際シラネアフヒでは二個の心皮が其の底部で癒合して居るが爲めに、初めて此の植物の花被の謝落したのを見た歐羅巴の學者は、之を Hydrastis の一種と考へ、之に H. jesoensis, Sieb. なる名さへ與へたが、此の植物は實際シラネアフヒに外ならないこと、其の記載を一讀すれば直に知ることが出來るのである。然るに獨逸のある學者は、これを本當の Hydrastis の一種と思ひ込んで、「日米共通の屬」などゝいふ例證に引出すのは甚だ以て迷惑至極である。

シラネアフヒは只今のところ一屬一種（モノテイピック）である。處が先年佛蘭西の有名な學者が二人もかゝつて、支那四川省から第二種 Glaucidium pinnatum, Finet et Gagn. なるものを記載した。その圖說を見ると、これはシラネアフヒ屬どころではなく、實はケシ科に屬して東亞に稀ならぬヤマブキサウであること殆んど疑ふの餘地がない。只其の雌蘂の工合が圖說を見ると、ウマノアシガタ科とケシ科との中間の性質を表はして居るが、しかし此の植物がケシ科の一種であるの證左としては、雄蘂の花絲が葯に達せぬ前にズット細く尖つて居ることで、これはウマノアシガタ科には見られない性質である。

シラネアフヒは通常ウマノアシガタ科に入れて置くが、同じ科の中でもウマノアシガタやフクジュサウやボタンヅルやニリンサウ等とは緣の遠いもので、却つて通例メギ科に籍を置くサンカエフ屬だの、トガクシショウマが嘗て屬するものと考へられた Podophyllum などに近く、若しウマノアシガタ群（Ranales）を詳しく調べて見たら現今行はれて居る分類は全く破壞されるかも知れない、そしてシラネアフヒはサンカエフ等と一緒に Podophyllaceae といふ科を形作る方が自然的である

かと考へられる。

L' Amateur の科學

○全然山に關係のない問題で、しかも考證の末について是非を爭ふのは、まことにつまらない事であるが、山本德三郎氏が再び疑義を挾まれたについて、默してゐては却つて失禮と御答をしたい。

○雲級の設定された萬國氣象會議の年代であるが、これについては、第一にこんなことを御承知を願ひたい。それは、かつて東北の某大學教授と、これも令名ある東京の歷史の教授とが、ピラミッドは天文臺なりしや否やについて論爭を重ね、はてはヘロドタスの英譯の字句の解釋について論せられたが、第三者から見るとこの最後の論點はまことに愚しい事としか思へない。何れの大先生もヘロドタスの原文を讀まれてゐないから、字句の末に拘泥したとて、何の結論も得られないのは明かである。

扨て次には、邦人はよく外國の書物を原書と云ふけれども、これも不適當な言葉である。外國語の書物だからとて、杜撰極るものの多いのは明かなことであるから、今の場合、會議の報告、若くはそれに代るべき書物によらねばならない。

私が一八九一年ミュンヘンの會議によつて開かれたと云つたのも、稻垣博士、馬場氏等の書物や、又は徒な外國の書物によつたのではない。

一九一〇年、有名な書肆 Gauthier-Villars から發行された Atlas international des Nuages (seconde édition) によつたので、これは H.-H. Hildebrandsson, L. Teisserenc de Bort Upsal et Paris, août 1910 の署名のあるもので、一九〇五年インスブルックの會議に於いて修正された意見をいれて雲の圖を書いたもので、その中に Classification des Nuages La Conférence internationale des météorologistes, réunie à *Munich en 1891*, recommanda la classification des nuages suivante, proposée par M. M. Abercromby et Hildebrandsson; としてあつて、そのあとに雲の階級十が書いてある。

私はこの書物が、稻垣博士の書物よりも、より

憑據すべきものであるを疑はない。何故かといふに、この圖を發兌するに到つた由緣は、Le Comité international météorologique, à sa réunion à Upsal en 1894, confia à M. M. H.-H. Hildebrandsson, A. Riggenbach et L. Teisserenc de Bort le soin de la publication d'un Atlas des nuages. であつて、會議に提出されたもので、やきなほしなどではない。

從つて、もし、稻垣博士の書物が（不幸にして私はまだ此の書物をみないが）考證の末について誤つてをるならば、それは當然正すべきであらう。けれど博士の書物は他に立派な本領が存するので、これをもつて一律に該書の價値を評價すべきでないことを、吳々もことわつておきたい。

これで充分に、或は相當に、御納得になつたことと信ずる。

○扨次に霄の字を卷雲と云ふか否かであるが、これはどうともつかぬ問題であらう。

成る程揚雄に「騰淸霄而軼浮景」とあつて「上天の雲氣」とも云へるが、果してこれが卷雲かしら。「絳雲在霄」と云ひ種々な字を冠して單に「そら」と云ふ意味に用ゐたのが多い。壤が必ずしも「こえたつち」だのと云ふことにとる必要もないと同じである。

けれども、こんなことは各人各樣に解して差支ない。何か三才圖會にでもありはしないかと思つたが、生憎貸してあつて見つからない。やつと渾天新語、天文經緯問答和解、遠西觀象圖說などと古めかしいものをひつぱり出したあげく、西川正休の天經或問（享保十五年江戸書林嵩山房）の地卷の十五枚に「霄霞」と云ふのを見出した。

曰霄者天之無雲氣而青碧者也天色在五行之外青亦非其眞躰莊生所謂天之蒼蒼其正色耶其遠而無所至極耶其視下也亦若是則已矣。

これで考へると雲でないやうにとりたい。單に「そら」「おほぞら」「あをぞら」と云ふ意味に。

○私はことわつておきたいのは、舊來の波動說よりも現在に於て、光は電磁光波說をとるべきものと信じてゐる。けれど空の色の說明としては、御同樣にレイレーの說に今の處代るべきものはないと思ふ。

それ故に尙ほ更のこと、塵埃のない晴天が靑く見えるだの、宇宙の光のない部分が靑く見えるとは、肯ひかねたのであるが、それが訂されたやうに天空と云ふ意味ならば、決して兎角は言はないつもりである。

○どう云ふ理由かはしらないが、日本の設定では、雲の記號などを、萬國氣象學會のと少しづゝ變更してある——少し簡明なものを用ゐてある。その上「氣象觀測法」などができて容易に手に入り易いものであるから、殊更に雲の形などの說明を繰りかへさないが、雲峯には、どうせ文學者の用ゐる概念的な文字であるから、私は積亂雲のみをとらうと云ふのではない。たゞ積亂雲の方が、積雲よりも、より力强く、壯大であつて、威壓さるゝの感が深い。露伴の所謂「坂東太郎」は積亂雲である。

雲の峯のうちには勿論積雲をいれてよいが、積雲には、所謂片積雲などがあつて雲の峯をなさないものもあるから、この例外を云ひたくないために、特に積亂雲を emphasize したのである。

○最後の問題は今悉しく論じたくないけれど、一つ云ひたいのは、成る程「湯釜の蓋を取り之を裏返しにして水平に保てる時の湯氣よりも、之を斜にした時の湯氣の方が小なる空間に集團して濃密な狀態に上昇する」けれども、始めから斜になつてゐる斜面では、これが水平に寐かされてある場合と、蒸發する程度はどうだらうか。同じ割合だけ、同じ面積から蒸發するかしら。斜面と水平面との上の同じだけの面積から、同じだけ蒸發するならば（そして直上するとすれば）密集もしようが、斜になつてゐたら同じだけ蒸發するか疑はしい。それにはもつともつとこれを支配する流通座標、要素がある。

一般の蒸發も、人によつて甚しい異る結果を得て、難しい問題になつてゐるのも、そこに大きな何か要素（未だに氣づかない）を忘れてゐるからであらうとは學者の承認する處である。もつと考が纏まつてから、書くことにする。

○山岳も烏水氏が書かなくなられてから、殊に著しく科學的の色彩を失つてきたことは免れない。

たゞ武田博士の植物に關する立派な學說を除いては。

僅に山本氏が每號創見を載せられてゐるのは、まことに心床しいことで、吾々もこゝに眞面目に研究のできることが嬉しい。

こゝに筆をとめるにあたり、幾重にも無作法な文言については御詫びする。（森の人）

丹澤山塊

山岳（第一年第一號　塔ヶ嶽）
（第八年第三號　丹澤山）登載
（第十一年第三號　相州蛭ヶ岳）

濃紫に富士の右、相模野の王者、丹澤山の一群は、私達には最も親しいが、然しどうやら疎ぜられて居ました。

私達は閑が有ると近い丘へ登て、西の空を仰ぐ時、屹度一番先に此の一群の天增を拜して、右に秩父、左に箱根と、瞳を轉ずるのが常で有ります。

それから、冬のよく晴れた日には、天城山の尖影を望みます。

同志が寄ると、何時も話題には上りますが、何時も其儘流れて終ひますので、在濱會員の六名と、外に一名とで、五月十一二日へかけて、塔ヶ岳から、丹澤山へ出かけました、天氣は晴でした。

前夜は曾屋、水無河畔の大川樓（關口重次郎）へ泊り、翌日の明け方、三時といふに發足しました。

人夫は前から宿屋へ賴んで置いたので、俥夫と蓑切りの男と、二人來ましたが、勿論案內では無いのです、塔ヶ岳山麓の大倉には、冬も藁ぐつをはいて、山を狩くらす獵夫が居るさうですから、それなら案內者になるでしようが、此山稜を、曾屋方面から上下するなら、案內者には及びません、

扨て私達は大倉で夜が明け放れ、頭上に塔ヶ岳を仰ぎましたが、此處は既に高く、江の島が見えるさうです、曾屋から此處まで俥を通じます。

うつかりして居たので、二萬分一圖の尾根と川との間に記された路を進で終たので、草野を橫切て、左の急傾斜を登り、八百米位の所で本道に出

ました。

塔ヶ岳へ登る路は大倉の人家を過て、直きに左へ折れ、畑の側を通り、水無河西岸の尾根へ取つくので、草山に松の大木が一本、其上に又一本有るのが好い目標で、路は其處を通て居ます、松田から來ても此路になります。

路は頂上から出る長大な尾根の上を辿て居るので、夏は茂る草いきれと、人に由ては、汗と渴とに惱されるでしよう、秋には枯れた薊のとげが、針をとがらせて居ります、遠望はきゝませんが、春は此憂が無くて、菜の花盛りの里の新綠を瞰、谷間には紅の八汐つゝじが、燃えて居ます、瘠た尾根を躋り、或は藥研の底を通て、一三七七米の草山へ行きます、此所には石地藏が一基、昔から雨にも風にも雪にもめげず立つて居ります。

既に頂上は額に近く、此處は麓から前山として、立派に認られます、稍下て、小笹の中を横に、本岳の西側を通ると、古木が立ち並で、葉が繁て陰陰として夕には、鼯鼠でも飛び交ひ相な中を、朽葉踏みつゝ登ると、急に明るく成て、頂上へ着きます。私達は曾屋から、休憩約一時間をませて、五時間半かゝりました。

此岳の祭神は、頂上から六七十米下つた西北側、玄倉川の上流に向て、半身を露して居る二丈餘の大石で、孫佛又は尊佛と呼ばれ、麓の人は塔ヶ岳をソブツ山と言はねば知らぬと答へます。

石に生えた苔は、御衣と呼で、瘧疾を治し、又旱天には、雨乞の祈を奉ると、忽ち驗が有る相です、大祭は毎年新暦の五月十五日で、近郷の人は押上て賑ふさうですが、其人達は眼界豁な此山上の草原で、野天の賭博を催して勝負を爭ふのださうです。

頂上近くで水を求めるには、孫佛の記號の所から細徑を（二萬分一）猶下り、千三百八十米の邊で尖つて曲つて居る所です、筧等が設けて有り、傍は平坦で野營地に宜しく、小屋の丸潰れが有ります、此所から下ると、玄倉川の上流の一、鍋割澤へ出られます、頂上から急降して直接に來る路も直き見付かります。

丹澤山へ通ふ路は、第八年第三號にある通り、

私達は山の春が未だ淺いせいか、思つたよりひどく笹に苦しめられず、塔ヶ岳から丹澤山頂へ一時間で左樣いそぎもしませんでした、龍の御塲は雪が消えて間も無いと見えて、草は未だ萠え出ず、雪ずれの跡が、枯草の伏したのに窺はれました。

横濱や、雨降山から望で、四季に依て山の膚が靑、赤、白と變るのは此處です、伐木の手が奥の谷まで延て居て狼藉たる有樣が見えます。

丹澤山頂は草原で、一等三角點が有りまして、塔ヶ岳よりは廣いです。

頂上を蛭ヶ岳に向て下ると、丹澤乘越とでも云ひたい樣な凹い所が有ります、右すれば丹澤部落に至り、左すれば路は無いが、鍋割の方へ行かれさうです、右へ下る、三町で水が得られます。

私達は遺憾ながら、此所までゝ引返しましたが、丁度蛭ヶ岳から縱走せられました、會員の戸澤君と藤島君に丹澤の上で遇ひ、色々と御話を承りましたが、御話によると、

蛭ヶ岳へ登るには、玄倉川の方からは、玄倉川が、熊木澤と、鍋割澤とに分岐する所……二萬分一圖の玄倉村地の玄の字の上方にて合流する左を熊木澤右を鍋割澤と稱へ猶ほ上流にて一支流を分岐し蓚杉澤と云ふ……に製材所が有り、其所へ泊て貰て發足し、熊木澤についてソリ道を行く事三十分澤へ下りて溯り、左の澤左の澤と登ると、急傾斜に成て、蛭ヶ岳から一千四百四十九米の地點を繼ぐ尾根へ出て、蛭ヶ岳の頂上になるのだ相です、時間は二時間半位、製材所の宛名は

神奈川縣足柄上郡寄村
丸共製材製炭商會方　山本琴三郎

其所には小屋が二十五六軒有て、事務所なれば、十人位は泊れる相です。

蛭ヶ岳は丹澤山に向て、急傾斜をして居て、眺望宜しく、丹澤山頂は草原の平かと見えるのみだ相です。

丹澤山附近の笹は塔ヶ岳と丹澤山との間が最もひどいので、丹澤山を北へ越すと、ずつと低くなり不動の峯……一六〇四米……蛭ヶ岳もそんなにひどく無い相です。

で此山塊を登て見るには、

塔ヶ岳のみなれば、曾屋及松田玄倉各地より登て何れの各地へ降るも、日歸りにて十分。

大倉方面から登つたら、下山は菩提へ下りるのが面白いでしょう、下り口は大倉へ下りる口の一寸左に在ります。

塔ヶ岳から丹澤山へかけて登るにしても、曾屋方面から冬を除いたら十分出來ます。

早發して急行すれば蛭ヶ岳へも十分、丹澤山頂から蛭ヶ岳への往復は四時間位。

蛭ヶ岳が目的なら、第十一年第三號にある通り。そして最も愉快なのは、熊木澤から登つて蛭ヶ岳不動峯丹澤山塔ヶ岳と一氣に縱走し去るのが一番でしょう。

玄倉川の水源地方は、今より十年程前から段々と人が入り込で、諸士平に一軒の小屋も、今は川の兩岸に人家が建ち、道や橋も修繕されました。

さて熊木澤小屋に到るには、二道有て、松田驛から、寄村（ヤドリギ）を通て行き、又山北驛から玄倉村を經て行くのと有ります、往年玄倉から峠を越えて、魅する樣に美しい玄倉川を溯行した時の美しさは忘られません、何れも東京から一日の日程。

蛭ヶ岳から塔ヶ岳まで縱走して來て、再び熊木澤へ戻てから、寄村を通て松田驛へ出るも、亦大倉へ下り、曾屋へ出て、二の宮驛へ出るも、早發して急行すれば一日の日程としてそんなに難い事は無いでしょう、五六七八の月ならば十分です。

更に面白からうと思はれるのは、冬の日、藁靴はいて、積雪の上を登たら嘸かしと思ひます。

秩父についで都に近く此盤居して居る數座の山は、一二泊で危險なく登れる手頃なものだらうと思ひます。

地圖は陸地測量部

五萬分一圖、上野原　松田惣領

二萬分一圖、松田惣領　塔ヶ岳　蛭ヶ岳　中川村等（きた生）

仙丈岳より塩見まで

大正六年七月中旬、慶應義塾山岳會第九隊として左の旅程を實行せり。

第一日　西山温泉發—廣河内澤—大門澤落合泊。
第二日　大門澤發—農鳥—農鳥間岳の鞍部泊。
第三日　鞍部發—間岳—北岳—間岳—三國岳附近泊。
第四日　三國岳—横川岳—荒倉岳—仙丈岳—三國岳泊。
第五日　三國岳—安部荒倉—伊奈荒倉附近泊。
第六日　伊奈荒倉—塩見岳—蝙蝠岳—櫻島泊。
第七日　櫻島發—新蛇ヌケ—惡澤頂上附近泊。
第八日　惡澤岳—魚無河内岳—赤石岳—廣河原泊。
第九日　廣河原發—小澁温泉—釜澤—大河原泊

七月十八日。六時十分案内中村宗平を伴ひ、農鳥間岳の鞍部を立つて間岳に向ひ、人夫三人は後發せしむ、七時間岳頂上、十時北岳の絶巓、一時廿分間岳へ歸着。後發の人夫と合し、二時十分いよ〳〵間岳より西に伸び野呂川と田代川との分水嶺をなす三國岳(假にかく稱しておく)山稜へ行く、三一九〇米突の高度より急に低下して、僅に瘤の

樣に三國岳を起すこの岩稜は、思つた程嶮しくもなく、岩が孰れも硬いので、容易に三時三國岳の甲駿信の國境に立つた。

三國岳の頂に立つて見ると、間岳から急に低下して來て僅に其の餘勢をこゝに留めてゐる山稜は、蝙蝠の兩翼の樣に更に一段と低下し、北に走つては再び三〇三二米突の仙丈を起し、南に走つては更に三〇四六米突の塩見を起して、甲信駿の國境を劃してゐる。この尾根は今年の樣に雪の多い年でさへ全く殘雪の影さへ留めてゐない、而して仙丈近くと三國塩見岳近くとには、偃松が黑く盛り上つてゐるが、其他の大部分は全く針葉樹の深い密林である。

導く者も導かれる者も全然知らないこの國境の尾根には、既に午後の霧が亂れ始めたので、時間は早いが三國岳下野呂川寄りの大雪田の下に野營地を選定した。

仙丈まで（七月十九日）

天幕其他を其處に留め、宗平親子を伴ひて午前六時仙丈へ向ふ、北へ〳〵と三國岳よりの一筋の

脊梁線を走ると、倭い偃松は次第に深くなつて、三國岳頂上より約小一時間も來ると、太い岳樺の古木が並木の樣に五六本立ち列んでる邊から、偃松は太く深く脊梁に迫つて、足の踏み場もなくなつて居る。其の上偃松の際まで左右から白檜や唐檜の針葉樹が迫つて來てゐて、一旦偃松の間に消た切明は、意外にもこの尾根を左にからむで、白檜の密林中へ深く通つて行く。

これから約五時間、仙丈近くの偃松帶に登りつめる迄は、全く晝尙暗い針葉樹の密林を、只一條の切明けを目標に進んで行くので、吾々は尾根を走つてゐるのか、山腹を絡むで居るのか分らない。進むにつれて林は深く苔は厚く、羊齒類の下草はベットリと一面に繁つて來るので、最始の內は輕く跡づけられてゐた逕らしい影も消えて、漸く深林へ來たといふ感じが深くなつて來る。

七時頃切明けを一つの瘤起へ上つて行くと、風當りの强　せいか倒れ木や枯木が多くなつて、切明けが大分怪しくなつてゐる。妙だと思つて立ち續く木立の間から透して見ると、我々は大橫川の谿へ走りかけてゐることが分つて、再び根氣よく倒木や下草の間に切明けの跡を搜し求めた。（コノ瘤起は橫川岳三國岳間の標高二五七一の地點。）

橫川岳近くなると樹枝は一層蓊鬱として、青い苔は岩といはず朽木といはずベットリと蒸して何處を見ても自然のまゝの姿で、未だ人間の息の穢を餘り知らない寂寥境である。橫川岳へ喘ぎ着たのが八時卅分。こゝから荒倉岳までは中々厄介な所で、針葉樹はこの邊り最も密になり、從つて枯木朽木累々として多く、橫に倒れてるものには青苔が一抔にしかみ付いて、それを踏みくだく時の陰氣な響は、晝尙暗い木立の奧へ山彥するので、寂寥の氣は妙に胸に込み上げて來る。

加之、この間には羊齒や竹が氣隨氣まゝにのさばりかへつてゐて、六七年以前に作られた切明けの跡は其の下にかくされて居るので、これを搜すのも容易でない。殊にこの尾根には無名の瘤起が幾つもあつて、信州側へ皆な尾根を派出して居るので、我々が一斧一鉞の跡をも見逃すまいとしてさへ、大橫川の谿へ走りかけたことは一度や二

度ではなかつたが、幸に晴朗な日の午前中であつたので、立ち續く木立の間から僅に前途の尾根を目標ににらむことが出來たので、大過なきを得たのである。若し霧や雲でもかゝれば餘程注意しないと信州側の尾根へ迷ひ込み易い。

九時五十五分荒倉岳着、頂上に荒廢と寂寥とに包まれて一の完全な三角測量櫓を發見した時は、何となく懷かしく思はれた。

此處を出發して十時大岩石の磊々として露出してゐる尾根へ出た、森林からぬけ出た吾々の前には、厖大なる仙丈の全容が眉に迫つてゐる遠く西には天龍の峽を隔てゝ、伊那の平原が展開してゐる。時間は少し早いが辨當を濟して、總ての荷をこゝに留めて、十時卅分いよ〳〵偃松帶にかゝる。偃松の太い幹はのざはり放題、六七年も前に作られたといふ切明けは、其の下にかくされてゐるが、こゝまで來ると展望がきくのでヤブ潜りを右によけ左によけて、仙丈の頂上目がけて攀ぢ登つた時は午後一時卅分、既にこの三〇三二米突の絶巓には、四方から霧が强く吹き上げて來た。

眺望もなく時間もないので、早匆として二時歸路に就いた。四時荒倉岳。五時横川岳。

偃松の打擲や枯木倒木の呵責に苦しめられた一行は、意外の里程に一層疲勞を覺えて、脚の運びは鈍り勝ちとなつた、森林中の夕闇は足下から濃く迫つて來る。森林を漸く出盡して偃松の尾根へ這ひ上ると、密林の暗に慣れた眼には、猶朧氣ながら切明が分るので、やつと幽囚から逃れ得た樣な氣がした。夫から赤く焚火の飛び散る火花を目標に、偃松の尾根を滑り下りて、天幕へ歸つたのは午後八時であつた。

仙丈と三國岳とのこの尾根は、思つたより與し易いものであつた、奥秩父のあの深林に馴れた者には億刼がる程のものでもなく感ぜられた。

塩見まで

七月廿日。今日はいよ〳〵蝙蝠の左の翼をたどる日である。午前七時四十分二日の思出多い野營地を去つて、八時十分三國岳頂上に立つ。大井八十八谿を踏んまへて疊み重る山々の上に、遙に南の方碧の空を劃してゐる赤石山脈の大嶺は、其の

盟主赤石を始めとして、惡澤塩見等南アルプスの重鎭が、其の峯々の皺や山稜の窪に消え殘る白雪の幾條を輝してゐる。その强勁の山塊の輪郭は、水成岩の山貌に始めて味はるゝ壯美である、その深谷を埋める濃い紫鉛の谷々の影は、永遠の暗に蹲る千古の原生林の森林美の反映である。

八時四十五分頂上を去つて、一度尾根を信駿國境へと踏み出すと、斷崖は斷崖に續き、如何なる難塲をか現出しかねまじき岩組なのに逡巡する人夫を勵まして、先づ吾々が瀨踏してみると、この磊々累々たる嶮しい岩稜は僅の間で、これを通り過ぎると山の脊は横に伸び廣まつて、なだらかな圓みのある姿となつて、四五百米突も低下して安部荒倉の尾根へ取り着いて行く。この凹地の大横川面は激しいガレが深く陷込んでゐるが、大井川面は極めて緩漫な勾配を作して、岳樺や偃松の間に麗はしい御花畑を打ち開いてゐる、この青々した草原の茂みの内に吾々は破れた小舍跡を見出し、且清冽な清水の流れを發見した、實に絶好の野營地である。

三國岳の頂上から約一時間、故に仙丈から塩見へ縱走する者には、早朝仙丈を立てばこの小舍まで相當一日程である、我々はこの小舍塲を仙塩の小舍塲と呼んでゐる。

滑り易い草原を横切つて安部荒倉の尾根へとかかると、山櫻の花は美くしく矮い枝に咲き誇つてゐる。山又山谷又谷のこの奥山では、今が春の盛である。十一時殘雪を沸して晝食をなす。これで見ても昨日の緊張した氣分に引かへ、今日の弛緩の氣持をかくすことが出來ない。

この塩見への尾根は、深い偃松の叢をなびかせて、遠く塩見まで走つてゐるが、切明の跡は主として東側の緩斜面に其の微かな跡を留めてゐる。大井川面の尾根近くに並行して、雪濠らしい地形の小規模なのを幾つも列べいて、斜面には滑かな草を延べ、岳樺其間を綴つて居る、その丸味を帶びた景致は、昨日の尖つた景に馴れた目には、非常に柔かに映つた。今日とて依然國境の微かな切明けを捜しながら進むのであるが、今日の切明は道を求める爲めのでなく、勞を省く爲めの切明け

であつた。十二時卅分安部荒倉の三角點を偃松の間に見出した。それから暫くの間尾根の嶮しい岩角傳ひも止んで、午後二時卅五分に二六六七米突の頭を左にからむで、同五十分大きなガレの頭に出た。休んで居ると妙に冷々する、又雨でも來るらしいので、急いで出掛げると切明は北へ廻つて、白檜唐檜の大密林中へ走つて行く、この林を通りぬけた頃、例の通り激しい雷鳴が來たので、伊那荒倉の麓の草原に泊ることにして、荷を解き出すと大滴の雨が一點二點と、山も林も薄絹をかついだ樣に茫と打ち煙り出した。四時十分である。

七月二十一日の朝は、乾き切つた太陽が天幕にさしてゐた。七時卅分發。何處で切明を見失つたか滑な草原の岳樺の林へ迷ひ込んだ一行は、執拗な猛烈な偃松の逆茂木に沮まれて、伊那荒倉へ出られないので、ガレを一つ越えて麓を巡ると、ここに思ひがけなく五色原が展開して居つた。

あの荒川の物凄いガレを背景として、滑かな綠の丘、丘を繞る御花畑の美。この柔い景色の後には塩見の赭顏が三つ頭を並べて吾々を威嚇して居る。九時塩見の頂上目がけて、岩石の崩壞し易い間を縫ひつゝ、ひた上りに攀ぢて塩見の前山へ九時四十五分、直ちに背嚢を抛り出して十時頂上へ、更に三角點へ十時五分這ひ上つた。

脚下には本谷三伏から西河内岳への國境山脈が走るのを望んだまゝ、食糧や人夫の都合でこれを放棄して、櫻島へ下らなければならぬのを殘念に思つた。十一時頂上を去つて、人夫は北俣を下り、吾々は蝙蝠岳に向ふ。(十二時) 途中襲雨に逢つて一時四十分蝙蝠岳へ。直ちに北俣と廣作澤との間の白檜栂の密林の尾根を下つて、五時大井川の櫻島に着した。

七月廿二日。午前八時天幕を卷いて出發、約五分程下りて新蛇ヌケを登り、二時五十分西小石の三角點に着き、四時惡澤岳頂上附近の雪田の傍へ野營した。大井川の谷底へ下つても惡澤岳の最高峯に登つても、吾々を惱すものはあの偃松の無慈悲な打擲でもなければ、肌を破る削岩の薄情でもない、それはあの夥しい大小無數の蠅の群であつた、吾々の山の晩餐の樂しさは、どれ程これが爲

めに減せられたか分らない。

七月廿三日。「開門忽怪山爲海、萬壑雲濤露一峯」の連日見なれた景致も、今日を限りと思ふと、何となくこの雲のわざも惜しまるゝ氣がした。六時四十分頂上に達し、西より北にかけて遙に惠那山、白山、木曾駒、御岳、乘鞍から槍穗高を始めとして、北アルプスの雪峯を、北面西俣を隔てゝ塩見蝙蝠仙丈を、其右脊に甲斐駒及間岳農鳥を、東方には富岳の秀峯を雪表に望むことが出來た。七時五十分惡澤頂上を辭し、九時魚無河内、二十分にして西河内岳に、十一時卅分大聖寺平に下り、早速弁當飯を掻込んで赤石に向ふ途中、本岳の下で横濱の平沼大三郎氏の田代方面から來られたに逢つた。

午後一時卅分頂上を極め、逕を荒川と井戸澤との間にとつて、五時十分小澁川の廣河原に着いた。

廿四日午前七時廿五分廣河原を發し、廿五回の徒渉をやつて、十一時十分小澁温泉へ着いた。釜澤に宗良親王の昔を思ひ、上藏を經て三時四十分大河原市塲吉田屋へ着いた。(中條)

一行は仁木庄右衛門、野村壹是、中條常七。案内者中村宗平以下人夫六人、但間岳より二人惡澤岳より二人返す。(中條)

吾邦最初の登山鐵道

本邦最初にして只一なる登山鐵道、生駒鋼索鐵道は、昨大正七年八月より開業されたり、運轉距離僅僅一哩弱に過ぎざれど、本邦に於ける最初の登山鐵道として吾人の看過を許さゞるものなり、本鐵道は鋼索に由り、客車を山上に引き上ぐるものにして、其設備の大要は左記同鐵道主任技師大戸武之氏の開業當初の講演筆記に由つて知るを得べく、塲所は攝河大平原の東方に聳立せる生駒山脈を貫きて、大阪奈良間を走る大阪軌道の電車が彼の生駒の長隧道を通過し「いこま」停車塲に止る、其所より約半町餘りの點より生駒の聖天樣として名高き、生駒山上の寶山寺下に達するものにして、毎月一日十六日の緣日には少くも一萬多い時は三四萬の參詣者あり、信者は主として大阪附近の者

多く、相場師、俳優、藝妓、茶屋、料理店、藝人の如く、主として盛り場の者なり。從つて此聖天樣の繁盛なることは意想外にして、關東の穴守稻荷に比すべきものなり、登山鐵道の開業前は約十六七町の坂路を徒步又は駕にて上下したるものにして、鐵道の開通後は愈々登山者多く沿道の繁榮は目ざましきものなり、奈良より夜間遙に生駒山腹に當り蜒々光蛇の見ゆるは此舊登山路に點せる電燈の光りなり、大正元年資本金十四萬圓を以て計畫され同四年十月起工式を擧げ、工學士大戸武之氏（大阪軌道主任技師）工事を監督し豫定の工事を進行したれど戰亂の影響を蒙り種々の困難を經て昨大正七年八月廿七日竣工と共に營業認可を得廿九日より開業するに至れり、乘車賃金片道十錢往復十五錢毎日午前六時より午後九時四十八分迄一時間五回の割合にて運轉しつゝあり、乘り心地は決して惡るからず、登山者には極めて便利なりと云ふべし、一車五十六名の定員にして、毎十二分に運轉しつゝあれど斯の如き少數にては中々に登山者の全部を收容し得可くもあらず、絕えず甚しき混雜をなせり。

小田原電氣鐵道の箱根登山線は日ならず開業さるべしと聞けり、本邦第二の登山鐵道にして其距離其他生駒索道とは比すべくもなき工事なれど、吾人は本邦最初の登山鐵道として此生駒索道の愈繁盛ならん事を祈りて止ず、會員木本光三郎氏は本鐵道の重要關係者として種々の開發に努力されたるは山岳會關係者として又妙なりと云ふべし。（大正八、一、た、た、）

生駒鋼索鐵道設備一般　主任技師大戸武之氏談

生駒鋼索鐵道は本邦最初の登山鐵道でありまして大阪軌道生駒トンネルの東口なる生駒停留場に隣れる鳥居前を起點として生駒山腹海拔一千一百尺の寶山寺に達する約一哩の間に鐵道を布設して輕便鐵道法に則り一般運輸の業を營むのであります。

車輛進行の速度は一時間約五哩でありまして山上迄僅かに七分間斗りで到着する事が出來ます其の鐵道線路は固より登山鐵道の事ですから頗る急

勾配であります、從つて之に使用する車輛も亦特種の構造を有し此の傾斜に適應して作られたる傾きたる車體でありますそれで車室内の床は幾多の階段となり各階段毎に四組の腰掛を備えて乘車人員が五十六人となつて居ります。

車輛の運轉は社名の示しておる如く鋼索條に依るのでありますが其の運行の原理は頗る簡明であります即山上の終點に於きまして大阪軌道より供給を受くる七十五馬力の電動力を以て捲揚機械を運轉致します捲揚機械には直徑十二呎の大なる二個の溝車を備へ此れに丈夫なる鋼鐵製の綱を卷き付け此綱に恰も井戸釣瓶の樣に其兩端に各一臺の車輛を懸吊致します車輛は此の綱により機械の運轉に伴ひて鐵道上を牽かれつゝ一上一下するのでありますそして兩車輛は線路の中央部に於て行違ひます故に降下する車輛の重量は常に上昇するものを引上ぐる力として働きますからつまり此不足の力丈けが電動力によりて補はるゝ事となるのであります。

それから此鐵道線路の勾配は下の方が十二分の一中央部が九分の一、上の方が四、四分の一と成つて居ります此の樣に上になる程急になつて居ると云ふ事は車輛運轉の上から申しまして誠に理想的であります之は車輛を懸吊して居る處の鋼索條が上昇する車輛の方に於ては其の進行と共に漸次短くなり其重量が減じて行くに下降する方では之に反比例して漸次長くなりて其の重量が增して來ますから其の速力は增大する事になります併し線路の勾配が上になる程急である爲めに相殺されて此の速力漸進の缺點が無くなり之を一定に保つ事が出來るのであります。

ある此の種の登山鐵道では此の樣な速力の漸進を防ぐ爲めに車輛に大きなタンクを備えて下降する前に水を一杯入れて車の進行と共に少しづゝ之を放出する仕掛になつたものもあります一體此の登山鐵道では色々の方式がありまして普通の軌條の他に別に中間に摩擦力を補ふ第三軌條を布設して之を特別に裝置したる車で兩面から挾みつゝ運行するものや別に齒狀をなしたる軌條を布設して車輛には之に適合する齒車を裝置して兩者の嚙合

せによりて運行するものや或は本鐵道の如く鋼索條に牽かれて運行するものなど種々がありますが兎も角此の登山鐵道は我國では初めて甚だ珍らしき事であります、併し西洋では其の數もかなり澤山ありまして且つ三十餘年の古き歴史をさへ持つておるのがあります殊に瑞西は御承知の如く世界の公園として常に諸外國より夥しき觀光客を迎へて居るので其面積は僅かに我が九州程の國であるに現今では已に登山鐵道の數が六十に垂んとしております此の内半數以上は當社に採用しておる樣な方式に依つて居ります我が國も又世界の公園であつて隨分見るべき處も多く著名の山岳又少からざる事でありますから是非共今後此樣な登山鐵道は大に發達させ度いものであります。

さて此鋼索鐵道は普通の電車や汽車と違ひまして車輛の運轉が車輛自身の力に依つて成さるゝのでなく前述の如く山上の捲揚機械によつて動かさるゝのでありますから其の運轉手に車の進行しつつある位置が常に何にかの方法で了解されておる方が都合がよい此の爲めに車輛位置表示器と云ふものが設備されて居りますこれは長さ六尺巾三尺斗りの額に此鐵道幷に其兩側の地形其他必要なる狀態を詳しく書いた地圖があつて上り下りの車輛の位置を示す示針が其縮尺と同じ割合の速力で車の進行に連れて其の地圖の上を辿つて實際に運行しておると同樣な有樣を目の當り表示する樣になつて居りますそして車輛が兩終點に近づき機械の運轉を停めねばならぬ時が來ると電鈴が鳴つて停車の合圖が自動的に行はれます若し運轉手が過つて車輛を其停車位置を超えて進行せしめた樣な場合には線路の兩終點に設けられたる自働車輛停止器が作用して速かに其の運轉を停止せしむる安全裝置が出來て居ります。

次に車を停止せしめ又は其速力を緩める爲めに必要なる制動の裝置は手動に依るもの壓搾空氣に依るもの及電氣によるもの〻三通を備へておりまして其の何れにも依る事が出來ますが平素は重に電氣制動器を使用する事に致して居ります又運轉中殊に一方の車が最急勾配を上りつゝある時に急に停電などに逢つた場合には餘程敏速に制動機を

使用しないと車が逆行を始むる恐れがあります此の様な時の安全裝置としては或る作用により直に壓搾空氣を働かせて自動的に機械の運轉を停めしむる様に出來て居ります。

それから車輛は前述の如く一條の鋼索に牽かれつゝ上り下りに運行するのでありますから之には殊に英國ラッチエンドバッチエロル會社特製の最優等品を使用し猶其上に車輛には此の鋼索條切斷の場合に於ける特別の保安裝置を備えて居ります即各車輛の下部には大きな丁度釘拔の様な鐵の齒があつて常に軌鐵を兩面から挾みて相對したる位置に裝置してある若し萬々一にも此の鋼索が切斷した様な場合があつたならば直に車輛内に貯藏せる壓搾空氣の力に依つて立どころに此の釘拔の齒が自働的に確りと軌鐵に嚙み付いて挺子でも棒でもビクとも動かぬ仕掛になつて居ります此の自働制動機の外に猶豫備として車輛乘務員によつて作用せしめらるゝ空氣制動機がありまして何れも確實に同様の目的に添ふ様に出來て居りますから假令此の命の綱が途中からブッツリと切れた所で車輛はあの急坂を奔馬の様に突つ走る様な事は決してありませぬから少しも心配は無いのであります。

又何か事故の爲めに途中停車の必要が起つた場合には乘務員は其車内から停車信號を捲揚場に送りますとそこでは受信器が働いて赤色の電灯がつき電鈴が激しく鳴り響いて運轉手に停車の處置を取らせます。

若も事故切迫して寸時も猶豫のならぬ様な事が突發した場合には車内にある危害停車器を動かすと前と同様に捲揚場の受信器に赤色電灯が點せられ電鈴鳴動し同時に捲揚電動機の幹線が遮斷せられて自動空氣制動機が動作し車輛はすぐ様停車する様に出來て居ります。

總て此等の信號は鐵道線路の上空に架つて居る普通の電車軌道で見らるゝ如きトロリー線により導かれるのでありまして車輛の屋根には又普通の電車の様にトロリボールが取付られこれから車内の送信器、危害停車器等に接續されて居ります此信號用の電線は夜分之を利用して車内に電灯を點じます又別に蓄電池による豫備灯をも備へて居り

ますそれからまだ車内には電話器が備へてありまして途中で停車した場合に捲揚場なり又は停留場なりへ適宜通話が出來る樣になつて居りますからこれにより此上もなき安心と便利とを得る事が出來るのであります。

其他設備萬端は充分に行届いておりますから實に愉快に樂々と好い乘心地で僅かの間に山上の人となる事が出來ます。其他詳細なる事柄に到つては餘りに專門的に走りますから先づ此位の所で切ります。

それから序に一寸申置きたいのはこれ迄よく新聞で見受けますと『生駒索道』と書いてあるのが例でありましたが當社のは索道ではありませぬ鐵道であります索道と云ふのは車輛又は吊り籠樣のものが鋼索條を道にして之に傳はつて運行するつまり綱渡りをするのでありますが鋼索鐵道の方は前述の如く普通の鐵道上を運行するので只勾配の關係から車輛が鋼索に牽かれて行く丈けであります

索道の方は已に我が國でも所々に事業を營んでおります尤も悉く荷物の運搬を目的と致しておるもの計りでありますこれも西洋では極く急勾配の所に專ら登山の目的に旅客輸送に使つておる所がありますが其の一つは瑞西にありますが複線式の鋼索を軌道の代りとして鋼索鐵道と同樣の方法で十六人乘の車輛を上下に運轉せしむる樣に出來て居ります。こんなのは日本で始めても中々お客が乘つて呉れ無いかも知れません餘談に渉りましたが先づこれで終ります。（終）

山ばなし

穗高嶽

穗高の岳に就いては、第五年の紀念號以來、鵜殿正雄氏が熱心に研究調査されて、その御報告が數回掲載され、また同氏から屢々御手紙や、誌上で御教示を辱ぶしたが、一々御確答する程の材料もなかつたので、別に御返事も申上ずに缺禮して居た、十年二號に私が「富岳は臺灣の南湖大山よりも高し」を書いた中に、「穗高の三山もまた三山とするを妥當とすべし」と記したので、十一卷の

一號で同氏から御叱りを蒙つたが、若しさうでないとすれば云々の御記事もあつたから、何か便の折りに私の愚見を陳べる意で其儘にして居た、穗高の三山と記したのは、全く私の誤謬であるからこゝに訂正をする、當時は私は穗高に登つた事もなく、また深く其事に注意して居た譯でもなかつたから、隨つて鵜殿氏の御說も充分に記憶して居なかつた、たゞ野呂氏の臺灣に厚くて、本州に薄いのが不平であつたから、私の雜記帳に記してあつた、二千四百米突以上の山岳名から拔いて、野呂氏の一萬尺以上七座說に對して、十三座位はあると陳べたのである、雜記帳に拔いた根據が五萬分一圖であつたので、その山岳名の記されたものを一座と見た譯で、說明も地圖に三山が記名されて居たから、三山と見たと云ふ意味であつたが、書き方が拙づかつたのである、併し五萬分一圖があんなに亂暴とは想像しなかつた、十一卷一號編輯の席上で、梅澤君から鵜殿氏の御寄稿を見せられた時に、鹿を追ふの獵師は山を見ずで、主題にばつかり捉はれて書いたから、行つて見ない穗高の研究にまで、留意せなかつたと笑つた事があつた、それから二千九百米突以下の山數も、多少の取捨はしたが大體は五萬分一圖に記名されたものを一座と見た次第で、全部が獨立せしむべきでもなからうし、他に多くの補入も必要であらうと思ふ、私も五萬分一圖に滿足せぬ點もあるが、これを基礎として考究するより外に道は無いと思ふ、以後もこの方針で見當違への事を書くかも知れないから、十二分に御叱正を願ひ度い、日本の山岳で一千米突以上のものを、勿論眼病の私の事であるから、見落しもあらうが、五萬分一圖から拔き書きして、九州・中國・近畿まで終つて、中央大山系（日本アルプスと云ふと大町桂月氏や、新興國の主筆で私の知人である、井口越南氏に叱られるから斯く記す）に着手しやうと考へたが、眼が痛んだのと私の手元に地圖が揃つて居ないので、二千四百米突以上だけを記入した頃であつたから、十年第二號に鳥渡認めて見たのであつた、其後はすつかり放擲して居たが、今春必要があつたので、二千米突以上のものを增補して、誌上に發表することにしたが、

梅澤君から陸地測量部の成果表と對照して戴いて掲載する事にしてある、私も一昨年の夏に穗高の中の三峯に登つて見て、甚だ僭越ではあつたが、私の憶斷で命名して見た、その折りは上高地に遊んで居て、便に穗高や燒岳と登つて見る事にして居たが、寫眞を撮影したり案內記など書く氣もなかつたので、五萬分一圖と紀念號に載つた鵜殿氏の地圖を携帶したに過ぎなかつた、行つて見ると上高地が餘り俗化したので可厭になつて、燒岳の登攀を見合せて歸國した、今一度行つて見て、鵜殿氏の御意見も伺つてから、愚見を陳べる筈であつたが、後段に記した原稿が無い所から本號に掲げる事にした。

八年二號の鵜殿氏の御說では、國境の山塊を西穗高岳と名づけて、それを區別して北から北穗高岳・涸澤岳（又は涸澤の頭）・奧穗高岳・白出澤頭・南穗高岳として、上高地に突出して居る山塊を東穗高岳と稱して、それを區別して北から屏風岩連峯・明神岳・宮川ノ頭・池尻と名づけ、之を總稱して穗高山または穗高岳と呼ぶと云ふのである、總稱して穗高山または穗高嶽と呼ぶ事は大賛成であるが、穗高を東西に分つだけならば未だしもであるが、西穗高岳の一連に南北を冠するのは面白くないと想ふ、同じやうな程度の高さとか大さとかで無いと、東西南北と呼ぶのは妙でないやうである、私は自分の通過した順に自分の考へを談つて見る。

槍ヶ岳から山稜を大略南方に進んで行くと、槍と穗高の分嶺地點がある、案內の庄吉はオホギレトと呼んで居た、こゝから出る水が、東して信濃方面に流るゝものが、横尾谷であつて、梓川に入るし、西して飛驒方面に流るゝものが澤で、高原川に合流するやうである、此處から登つて行くと、穗高の最北の一峯、鵜殿氏の所謂、北穗高岳に達する、此峯は横尾谷岳とか、澤岳とか呼ぶべきであらうが、何だか感じが惡い、北穗高岳と名づけると、鵜殿氏の所謂、東西の穗高と權衡がとれないやうである、そこで私はオホギレトの南に聳えて居て、その距離も槍ヶ岳よりは餘程近いから、それを採つて山名に冠して、大截地岳と命

名した、土よりも地が雄大に想はれたから、土字を避けたのである。

次は鵜殿氏の所謂、涸澤岳で空谷ノ石小屋の上に、兀立して居て、その中の北の一小峯が、鎗とか劍とか云ふべき形式をなして居る、此山は空谷（水の無い谷の意ならん）の上にあるから、空谷岳と呼ぶべきであらうが、空の字が頗る高山に關係が深いやうではあるが、その實は餘り調和しないやうに考へらるゝ、涸澤岳も大山岳に名づける好稱呼でもないやうである、乃ち唐谷岳と名づけた、その時には私は唐にカラ即ち空の義があるものと信じて居たからであつた、それは二十四五年前に莊子の講釋を聽いた時に、是求馬於唐肆也と云ふ句の說明の時に、馬をカラの市に求むるなり、ツマり無い市に求めるのであると聽かされたのを、うろ覺えにして居たからであつて、同じカラなら空よりも涸よりも唐が可いと思つたからである、いま此稿を草するに當つて、安永版の康熙字典を繙いて見たが空の義がない、念の爲めに莊字翼の外篇の由子方の註を讀んで見ると、郭註に「人の生は馬の肆を過ぐるが如きのみ、恒に須臾も駐まるなし」、呂註に「唐肆は馬の閲する所、而して馬の居る所にあらざるなり」、循本に「唐肆は固より馬を鬻ぐの處、而して豈に常に馬あらんや、詩に云ふ、中唐甓あり、注、中唐は庭中の路たり、蓋し馬を賣るの肆、庭中に路ありて、以て馬の出入に便するなり」云々とあるから、これにも空の義がない、文字を無茶に讀むことを百姓讀み（私も其仲間）と云ふから、私の聽いた講義は百姓講義と云ふのであらう、折角この名を得て喜んで居た私も、根底が壞れてはものにならないが、他に適當の名も考へ出せぬので、音通と云ふ事もあるし假字と云ふ事もあるなどゝ附會けたが、和訓の方も一應は調べて見る意で、博文館の唐熙字典（三島中洲先生と石川鴻齋氏と訂正邦訓せられし由、石川氏の序文に見ゆ）を閲すると、オホイナリ・オホイナルコトバ・カラ・モロコシ・ネナシカツラとある、漢字が當てゝ無いので、カラは空の義か支那を指すのか不明であるが、モロコシ（唐土）と云ふのがあるから、空といふ和訓があるものと

吾が田へ水を引いて、唐谷岳と決定して置く、猶ほ唐字に空と云ふ和訓の出所を御承知の御方は御教示を願ひたい。

鵜殿氏の所謂、奥穂高岳は、私も異議がないから、その儘に頂戴して置く、此山が槍ヶ岳と同じ位の高さであると云ふ事も、同氏の御説に少しの不滿がない。

鵜殿氏の所謂、南穂高岳は、五萬分一圖に、前穂高岳とあつて、頗る異様に感じて居た、鵜殿氏の所謂、明神岳を前穂高と云ふなら、解せぬ譯でもないが、どう云ふ事で斯様に記載されたかと疑ふて居たが、人夫に聞くと飛驒の人が、此峯を前穂高と呼ぶさうであるから、陸地測量部の吏員が、飛驒の稱呼に據つたものと想ふた、私は信濃人の稱呼を採つて、鵜殿氏の所謂、白出澤頭と南穂高岳を一括して、岳川岳と呼ぶことにした、上高地のやうな平地もあるし、登路も信濃が多いやうであるし、鵜殿氏の所謂、西穂高岳が全然、信濃にあつて、地籍も信濃に高い部分が多いから、信濃を表口と見るのが妥當と考へるからである。

最後に鵜殿氏の所謂、明神岳は、往古から穂高見命を祀つたと云ふ、穂高神社があつて、明神岳と呼ばれて居るから、別に新名を選ぶ必要が無いと思ふ、私は鵜殿氏の所謂、東穂高岳の全部を明神岳と呼びたいのである、空谷ノ石小屋から此峯を仰ぐと、尾根が東北に向ふて、段々に低下して居る、鵜殿氏の所謂、屏風岩連峯がそれであるが、私は連峯と云ふ文字は吉野のやうな所に用ひたい、餘り短距離の處は牛刀の傾があるまいか、庄吉は其形が御幣のやうであるから、御幣岳とも云ふと說いたが、さう思ふて見れば、御幣の半面の輪廓に似て居ぬ事もない樣である、併し高島章貞の穂高嶽記にある「極目之を望めば、危削峙立して白幣に似たり」から拔いたらしい、日本名勝地誌にある「靈岳雲を凌ぎて屹立すること白幣の如く、群山其麓に綿亘す」などの形容詞からの訛傳であるか、實際に御幣岳と呼んであるのかは不明である、序に云ふが、私が此峯に登つた時に、明神社の前に新らしい名刺が置いてあつて、鉛筆で婦人にして此山に登りし者は云々と記してあつ

て、兩三の姓名を載せてあつた、私は岳川を降る時に、藝妓（清水屋にて傳聞）が、よくもこんな險峻の處を登つたものだと、つく〳〵敬服して居た、清水屋へ還へつてから聞いて見ると、藝妓は燒岳の半途で戻つたさうで、明神岳に登つたのは、その一行の一部ださうである、藝妓を連れて上高地へ行くのが、よいか惡いかと云ふ樣なことは、不風流で俗物である私には、論ずる資格が無いから申さぬ事として、何も登りもせぬ人の名を、神前に供へる用もあるまいと思ふ、宿では大阪の新聞記者さんだと云ふたが、まさか新聞記者ともあらうものが、そんな事をする道理がない、多分宿で聞き違へか、または去る人が新聞記者の名を騙つたのであらう。

私が穗高に向ふ前日の夕刻に、清水屋の浴槽に浸つて居ると、官吏とか新聞記者とか云ふ風に見える、二三人が這入つて來た、その一人が、浴室の柱に書いてある、上高地の標高を見て、これは正確だ、僕の晴雨計と同じである、槍ヶ岳は、世人がみんな三千百米突以上だと云ふが、惜いかな三千米究はないと、頻に槍ヶ岳の氣焰を吐いて居た、私は晴雨計を讀むことを知らぬ人だと思つて、可笑しくなつたが、同時に私が前年、或人が携帶して居て、打ち毀した晴雨計を、何も知らぬで槍ヶ岳の附近を持ち廻つて、それを加減して雜誌に發表したことを思ひ出して、赤面もし苦笑もした。

咄が可なり脫線したが、序の便に今少々書き續ける、東京の或る銀行の重役の若夫婦が、私が穗高へ登つた前年に、槍ヶ岳に登られたさうである、これは婦人の槍ヶ岳に登られた最初ださうであつて、私もその婦人が槍ヶ岳の絕巓に居られた寫眞を、去る婦人雜誌で拜見したことがある、その婦人の一行を案內した人夫が、私の連れてゐる人夫等であつたので、その婦人が赤澤ノ石小屋から上は、人夫に腰を押されて絕頂まで行かれた事を問はず談りに聞いた、が弱い婦人が腰を押されたとて、大の鬚男が、山道としては殆んど平坦地とも云ふべき、高野山の不動坂で、十八九の娘連に腰を押させるから見ると、ずつと見上げたものであるから、何も惡口を云ふのではない、寧その意氣

を稱賛する、私が鳥渡申したいのは、今の女學校出の婦人たちは、とかく慎み（嗜のこと女の用意を云ふ）が少なく無考へのやうである、學校で敎へられたと云ふ、女禮式や茶ノ湯を見て居ると、どうせ一生懸命で習つたのでも無く、敎へられたのでもないから、形や手先きは我慢が出來るが、足の運びが物にならない、まるで體操式である、女の姿は腰から下にあるものと聞いて居るが、姿なんかどうでも可いとして、その根本たる精神を鼓吹してほしいのである、日本の女は、日本の女らしく敎育して戴きたいと希望する次第である、何も體操が惡いと云ふので無いから、大早計に誤解せぬやうに願ひたい、學校でそれ等の缺點があつたらば、家庭で之を補ふやうにもして貰ひたい、一言にして云へば、斯樣の場合に斯樣の事をして、女の嗜みの無い女だと、笑はるゝ事があるまいかと云ふ事を、前以て考慮してから着手してほしい、維新の當時、會津籠城の折に、彈丸雨飛の中に奮鬪して居た婦人連は、雪隱で敵彈に殪れぬやうにと注意して居たさうである、これ等が女の嗜みの一部分である、槍ヶ岳先登の御婦人に就いて、隨分卑猥な咄しを聽かされたが、多分御本人は其時は苦しいので勿論の事、今以て御氣が附かぬのであらう、無駄咄しのやうではあるが、後の女流登山家の參考にもならうかとの、老婆心から記して見たのである、實際婦人の登山服裝は女の嗜みといふ點から見て大に考究の要があらう、上高地へ戻ると河野齡藏氏と同宿したから、女學生を登山させらるゝ時の服裝を質問したら、袴の裾を括るやうにして置くとの事であつた。

要するに穗高の岳は、北より數へて、大截地岳・唐谷岳・奥穗高岳・岳川岳（以上は信飛の國界）・明神岳（信濃）と名づけて、五岳を總稱して穗高嶽と呼びたい考へである、幸に大方の是正を仰ぎ度い。

白河内岳

白峰連嶺の中の、農鳥山の南方に峙立する一座に、私が白河内岳と記したことがある、これは甲斐の一部の人が白河内の岳と呼んで居るし、案内の人夫からも、白河内の川が出る岳と聞いたから、

さう記して置いたが、五萬分一圖を見ると、廣河内の川が此山から出て居て、白河内は三角點のある二七六七の山から出て居るから、此の三角點のある山を白河内岳と名づけて、從前に呼んだ白河内を改めて廣河内岳と改稱すべきであらうか、それとも鍛冶屋をカジヤと誤謬の儘で通用して居るやうに、白河内岳と呼ぶべきであらうか、此も大方の是正を仰ぎたいのである。

北越の山岳

滿更に關係の無い譯でも無いやうであるから、太陽暦年表のことを少々書いて前叙とする、私は土百姓であつて、家業に精勵すれば隨分多忙の身であるが、遊んでばつかり居るので、内心では頗る耻ぢ入つて居るが、矢張り遊び續けて居る、單に遊ぶと云ふと花柳の巷にでも居るやうに聞こえるが、さうではないのである、大好物の酒やヘボ碁も、成るべく客を避けて遠ざかるやうにして居る、遊ぶのも面白くはあるが、餘んまり樂なものでない、何をして遊んで居るかと云へば字を書いて居るのである、それにしては馬鹿に惡筆だと笑ふ人もあるかも知れぬが、私は習字をして居るのではない、私が學者であるならば、大著述とか大編纂とか云ふべきであらうが、土百姓であるから字を書いて居ると云ふのが適當して居ると思ふ、假りに之を編纂と名づけるが、刊行して見た所で、物價騰貴の今日に、高い代價を拂つて買て見る程の物好きも無からうし、また引き受けて呉れる書店も無からうが、そこが鈍物の私の事だから、一向に先きが見えぬので、これを賣つて山岳會の基本金を作るなんかと力んで居る、私をよく知らぬ人達は、私が何か書くと云ふと、直きに山か川の名でも列記するのだと想つて居らるゝやうであるが、いくら私が愚悉でも、忠臣藏の夜討の合言葉じやあるまいし、さう〳〵山や川やとばつかりも云つて居られるもので無い、何を書く氣かと問はるれば、曰く太陽暦年表、我邦も太陽暦になつてから半世紀に近くなつて居るが、その間に年表の出版されたものが十や廿はあるであらうが、寡聞の私は未だ太陽暦の年表の梓に上つたと云ふ事を知らない、小鹿島氏の日本災異志は、太陰暦の災

異日を太陽暦に換算してあるが、可なり誤算が多いやうである、私は太陽・太陰兩暦を對照する必要があつて、推古天皇の十一年から明治六年までを換算して見る意で、大正三年二月に上京して銀座の伊東屋に注文して、千四百年ばかりの太陽暦月日を印刷製本さした、三月二十日に帳簿が出來た、二十五日に歸國して留守中の事務を見て、二十九日から帳簿に太陰暦の月日を記入することに着手した、私は三正綜覽を所持して居ないので、內務省編纂の太陽太陰兩暦對照表と、國史大年表とに據つて記入したが、四月一日に至つて、對照表に誤謬のある事を發見して中止した、それから小川操氏から文化五年以後の古暦を借用して、その不足の所を算木を作つて、月の大小と干支を記入したものを組合せて誤謬を訂正したり、大日本史料の出版せられたものや、續史愚抄などに據つて追次に記入して居た、當時は楠木正成傳を書いて居たので、主として夫れに必要な部分と、それ以下の分を記入（干支七曜を除いて月の大小と日だけ記した）して中止して居た、五年の三月に上京して眼の治療をして居る時に、數年來搜索して居た三正綜覽が手に這入つた、さうして大正三年以來、晝夜とも私を苦慮煩悶せしめて居た或る事件が、それに引き續いて解決された、その翌朝即ち二十四日に、太陽暦年表を編纂して見る考へが起つた、四月一日に其年の中に脫稿する豫定で、後醍醐天皇から着手した、十一日まで思ふ存分に勉勵したが、十二日になると右眼が痛み出した、十三日から時間を減じで眼の痛まぬやうと心懸けたが、進行が遲々として焦慮に耐へない、二十七日から目安を作つて妹に渡して、帳簿に太陰暦の某日を限つて干支と七曜を記入させる事にした、私は自分でせぬと氣に入らぬのであるが、七曜と干支を記した定木を作つて、一々調査する意で妹に一任したのである、妹が約六百時間で悉皆の干支と七曜を記し終つた、私も百年餘り脫稿して見たが、今少々大部のものにして若干なりとも、山岳會の基本金を積み立てやうと企てた、六年の五月に妹の記入した帳簿を調査して、三正綜覽の正安二年から正平十四年迄の約六十年間に、七曜日の大部

分は誤謬があることを發見した、その年に寛政諸家譜が刊行せられたので、其逝去日を悉皆太陽暦に換算して見たいと云ふ、好奇心が湧き出したのでその準備に忙殺されて、原稿は只今でも源頼朝が擧兵までしか出來て居ない、併し大正九年には是非とも刊行に着手する意である、本月(九月)初旬に私の竹馬の友である某醫學博士に薦められて、太陽暦年表から拔き書きして、太陽暦略表と名づけて、三百頁の一小冊子となして出版して、大方の御敎示を得てから年表を訂正刊行する事にして、目下は略表に全力を傾盡してゐるのである、これは引き受ける書店さへあれば、明春正月に印刷に着手したいと思ふて居る。

斯樣に多忙の私の事であるから、年表の脫稿までは山岳の原稿の免除を得て居たのであるが、原稿がいつも不足で雜誌が遲れてばつかり居るので、已むを得ずに長々しい冗文を認めて責任を果す事とした、每度申す事だが會員諸彦及び世の同好者の、陸續御寄稿あらんことを懇願するのである、年表の咄しなんか見せられぬだけでも、どの位御仕合せだか知れません。

本年は越後と上野・信濃の山地を旅行して、牛ヶ岳(一、九六一、六)・卷機山(約一、九六〇)・割引山(一、九三〇、九)に登つて、清水峠を踰えて上野に出で、白根の湯釜を觀て、澁峠を過ぎて歸國したが、寫眞が皆んな駄目なので此案内は、來年再登山をしてから揭載する事にした、そこで何も材料が無いから、同村の高橋俊三氏に依頼してスケッチを頂戴したから、それに幾分の說明を附して本誌の餘白を埋める事とした。

私の邸内(新潟縣三島郡深才村字深澤)から見える山岳は、前列を右から數へて、金倉山(五八一、四)・大峯山(鞍掛山とも本城とも云ふ、五六六、四)・南蠻山(五四五)などで、中列が、猿倉岳(六七二)・桝形山(七一八、三)・鋸山(七六四、九)・高津屋山(三七〇)などで、後列が、朝日岳(一、八一九、六)・牛ヶ岳・八海山(一、七七五)中ノ岳(二、〇八五、二)・駒ヶ岳(二、〇〇二、七)・小倉山(一、三七八)・守門岳(一、五二七、六)・粟ヶ岳(一、二九二、七)・白山(一、

刈羽郡千谷澤村の一丘上より八石山を望む

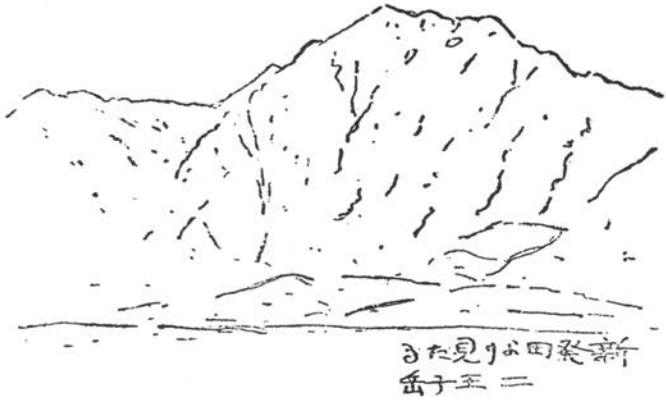
○一〇、四）などであるが、四五町を距てた澁海橋まで行けば、飯豐の最高峰である、大日岳（二、一二八）が見える、併しこれは晩秋か冬の快晴日で無いと、容易に仰望する事が出來ないのである、其他に北越の靈峰である、彌彦山や刈羽の黑姫山の圓形を認めることが出來る。

漸く本題目に入つてスケッチの說明は黑姫山から始める、東京または京都から越後に下つて、汽車が米山の隧道を出でゝ柏崎驛に着くと、右（新潟に向つて）の車窓にある一座が此山である、十五年ばかり前の普通の地圖では、此山を千米突以上としてあつて、米山より高いのだと私は思つて居た、鵜川と磧石川の中間に蟠居してゐて、二千九百三十五尺（八八九、五）の標高であつて、私が山岳志に載せた時よりも十八尺許、高くなつて居る、岡野町から登ると一里程であつて、頗る容易であつて、頂上に神社があると聞いて居る。

八石山（はちこくやま）　黑姫山の北方にある山で、三角形をなした二個の低山である、標高千七百六尺（五一七）、山岳志の時よりは四十三尺ほど高くなつてゐる、北條驛（きたでら）から下車して、屏風瀑布を看て登れば、一里許りで容易に行くことが出來るさうである、昔し此山に大豆の大木が生じて、結實が八石あつたと云ふ傳說がある、これは實際にあつた事と見えて、北條の何とか云ふ寺院の山門の柱は、この豆樹を用ひて作つたものださうだ、他に類の無いものと考へるから、見學の爲めに御覽になるが善からうと思ふ、私も二十年前に此地を通行して、山門を一覽した事もあつたが、當時は若氣の謬りで、坊主は嘘言ばつかり云つて居るものだ位に嘲笑して、よくも研究する意もなかつたが、欅に肖て居るものと思つてゐた。

◎雜錄　山ばなし

汽車が塚山の隧道を出て澁海川を渡つて塚山驛に着くと、四方が狹まつて展望も無くなつてしまう、併し塚山驛を出でゝ一小隧道を過ぐると、所謂越後平野になるので、眼界が次第に開展して來る、來迎寺驛の風光は殆んど私の村の澁海橋と同樣である、新津驛で村上行きに乘替へて下越の山岳を瞥見する。



二王子岳（にのわうじだけ）　北蒲原郡の名山で、新發田驛の東南に聳えて居る、田貝と云ふ處から四里許で頂上に達する、山上に二王子社が祭つてあつて、路も頗る容易ださうである、山岳志を書いた時には標高が不明であつたが、四千六百八十九尺（一、四二一）である、毎年可なりの登攀する信者があるさうである。

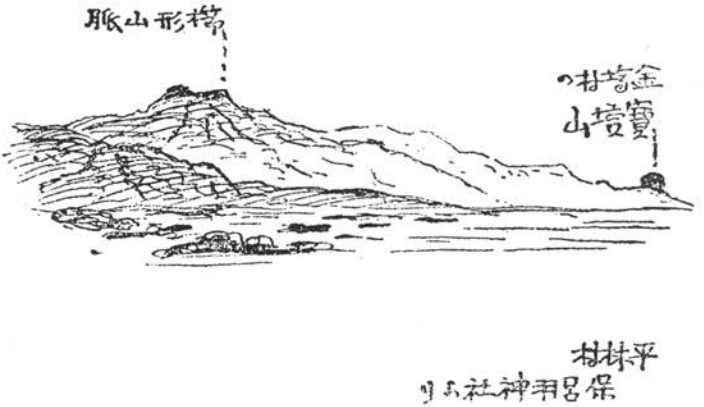
五頭山（ごづさん）　水原驛から坦道を行くこと二里程で、出湯温泉に達する、それからまた二里程

も登ると頂上である、新發田の女學校の生徒さんが登る位だから、險阻などであるべき筈が無い、此山も山岳志を書く時には標高が不明であつたが、三千十一尺（九一二、五）である、蒲原平野に面して居るから眺望は濶大であらうと想ふ。

寶塔山　一名、願文山、金塚驛の東方にある一小丘であつて、標高が八百二十八尺（二五一）ある、登路は極めて容易であつて、頂上の神樣を紙に押して來て、それで疣を摩擦すると、全癒すると稱せられて居る。

櫛形山　中條驛から關澤を過て、容易に登ることが出來る、十年前に登つた事があるが、友人と酒を飲んでから行つて、山上でまた大いに飲んだので、何も記憶に存して居ないが佳景のやうであつた、標高が千八百七十四尺（五六八）であつて、山岳誌の時より三十七尺低くなつたのである。

鳥坂山　平木田驛の東南に聳えて居て、櫛形山彙の最北の一座である、標高が千四百四十八尺（四三八、八）ある、登路は地圖には無いが、こんな小丘であるから登れぬ事はあるまいと思ふ。



要害山　坂町驛と岩松驛の間にあつて、荒川の東方に兀立して居る、標高が九百二十八尺（二八一）で、平林から登られさうである。

飯豐山　日本有數の大山岳でもあり、名山でもある、山頂の廣濶な事、殘雪の潔白な事など、越後山岳の特色を遺憾なく發揮して居て、且つ飯豐川（加治川の上流）の雪溪の美觀は本邦無比と推稱されて居る、五萬分一圖に據ると、頂

上の神社の附近は岩代の飛地となつて居るが、縣界が神社の北から絶頂の下に廻つて居るから、その地籍は新潟縣に屬して居るが、東蒲原が會津領であつた關係から、頂上の神社が一ノ木村となつて居るのであらう、會津方面からは、毎年二百十日前後に可なりの登山者があつて、臨時の宿所も出來る位であるから頗る容易であるが、越後方面からは殆んど登攀者が無いと云ふも可なりで、風景の好い代りに惡絶險絶を極めて居るさうである。第三年第三號に大平晟氏の紀行が載つて居るから、飯豐川の登攀を企圖せらるゝ人は參照せらるゝが可い、會津方面の劍ヶ峰と呼ぶ鐵鎖のある峰の下に、大仕掛な氷河の痕跡とも云ふべき所がある、有名な白馬岳や島々のものとは比較にならない、絶巓の眺望は雄渾偉大であつて、日本全國中稀に見る所である、越後の大平野とそれに蜿蜒としてゐる諸大川・日本海・佐渡島・鳥海山・朝日岳・地藏岳・吾妻山・磐梯山・白山粟ヶ岳・守門岳・彌彦山彙などが、歴々として指點することが出來る、さうしてその最も壯嚴秀麗なのは、金字形をなして居る西ヶ岳の背面に、尖端が鋭く天を突いて居る大日岳と、西ヶ岳から羽・越の國界を北走して居る山岳が、瑩々として居る數十條の殘雪を有して居て、更に約七十五里の遠距離である富士山を仰ぐことが出來る、これが富士山の見える最北のものではあるまいか、西では吉野群峯の山上ヶ岳が、富士山を見る極度だと聞いたが、その距離も大差がないやうである、

私は富岳の秀峰と、阿蘇の噴煙と、飯豐の殘雪とを以て、本邦の三偉觀と考へて居る、飯豐は中央大山脈地に比すると、約千米突を下つて居るから、高山植物の豐富なことは、到底匹敵することが出來ないが、彼の地で不足であるミヤマウスユキサウは、木曾駒のもの〳〵やうに貧弱ではない、杁差山は飯豐の一峰だと地誌提要に書いてあるが、五萬分一圖には記名がしてない、多分國界の二、〇二四、八とある三角點がそれであらう、飯豐山の標高は六千九百四十七尺（二、一〇五、一）であつて、山岳誌の時より七百四十二尺を拔いて居る。

臥牛山　村上驛から坦道を東すること二十町許りであつて、舊村上藩主の居城である、頂上の城趾に神社がある、昔し此城の誇りとして居たのは、敵が見えてから戰鬪準備をして差支ないと云ふ事であつた、それ位であるから眺望は佳絶である、標高が四百四十六尺（一三五）である。

光兎山　村上驛から東南に進んで、桃川峠を越えて荒川流域に下つて、荒川の支流の女川に添ふて登るのである、頂上に神社がある、標高が三千百八十九尺（九六六、三）であつて、山岳誌の時より三百四十九尺低くなつた譯である。

鷲ヶ巣山　村上驛から三面川（鮭の豐富なるを以て聞ゆ、近年は大に減少せり）を遡つて四里ばかり行つて、岩崩と云ふ所から三里ばかり登ると頂上である、前岳と奥ノ岳と二峰をなして居るから、二子山とも呼ばれ、また越ノ富士とも云ふ者がある、頂上に神社があつて、登路も可なりの險阻であると聞いた、標高が三千六百八尺（一、〇九三、三）で、山岳誌の時より四百四尺を減じた。

西朝日岳　元來この朝日岳は羽前にあつて、大

千谷澤村より黑姬山を望む

朝日（最高）・小朝日ともに羽前から登路がある、大朝日の尾根が西北に延びて、越後の國界に來て一座をなして居るのが、西朝日岳であつて、以東ヶ岳とも呼れば て居る、通路は不明であるが、三面村から登られやうと想ふ、標高が五千九百八十五尺（一、八一三、七）であつて、大朝日岳よりは約百八十尺低くて、小朝日岳よりは五百二十尺ほど高いので、

神納村小出より望む

スケッチに見えてある朝日岳は此山を指したのである。

佐渡は一小島國であつて、最高の金北山が纔かに三千八百七十一尺に過ぎないが、夫れでも舊日本八十五州で金北山以下の山岳を有する國が二十九ある、渡島・常陸・下總・上總・安房・三河・尾張・志摩・伊賀・能登・若狹・山城・河内・和泉・攝津・播磨・周防・長門・丹波・丹後・隱岐・淡路・讃岐・筑前・薩摩・壹岐・對馬・琉球がそれである。

最後に山岳會の會員諸賢、並びに讀者の人々に御願ひを致します、私は只今は年表の筆記に夢中になつて居りますが、年表を畢り次第に日本山嶽誌の增補訂正に着手致します、その材料ともなるべき登山紀行、または

傳說、寫眞、スケッチ等の御寄贈が願ひ度いのでありますが、紀行などゝ云ふと御手數になりますから、何山は某所から幾時間で登れて、途中に何がある位で充分であります、それから高山大岳よりも寧低山を希望致します、何でも可いから成るべく多く御寄贈を御願い致します。(高頭式こと義明謹識)

登山案内者（二）

會員及び同好諸君の雇傭ありし、登山案内者、人夫等につきて其性情、登山の上手下手强弱熟路賃金及び登山案内者人夫としての感想等詳報を賜りたし、適當にして必要の事項は此欄に錄して後人の參考に資したく一は彼等の進歩改善を促すの資としたし、昨今登山案内者の拂底賃金の暴騰は隨分怪しげなる所謂「かけだし」の案内者を生ずるに至れり、善良なる案内者を賞揚し、不良なる彼等を驅逐するは吾人の勉めざるべからざる所なり、本欄は「登山案内者手帖」を交附するの前提として本誌前號より設けたり識者の一考を得たし。

本欄掲載に就ては匿名にても可なりと雖も、本會へは必ず住所姓名を詳報されたし、後の調査の資材を得たきを以て。

◎大町登山案内者組合

本年夏は昨年に比し一層登山者の計畫も大きく成り人數も仲々當方としては賑はしく此分にては年を追ふて案内者の弗底も甚だしく相成事と其のみ心掛に候、本年等も大分無理を致し候事とてある一部の人には不愉快なる印象を與へし事と悔居候。

案内者の養成など申しても御承知の如く案内範圍の廣き當地にては仲々思ふ樣には參らぬ事にて態々の需用者側からの理想的注文に應ずるは至難の業に候去る八月廿四日本年度の山仕舞ひの慰勞の意を以て第三回の集會を催し候が會するもの十二名(重なる缺席者五名有之候)が現在の當組合員にて此數にて七八月の多數の登山組の案内を爲す

事故遺繰算段に頭を苦ます事閉口の極に御座候。

尙組合に加入せざる者は臨時傭入人夫として總數凡七十名位の募集は出來候。

荷擔人夫はその志望者ぼつ〳〵出來る模樣にて明年あたりは何等かの方法を以て他村より召集すべき考へに御座候。

案内者の案内能力を記す前へ從來の記錄より大體の各方面登山徑路を申上れば、

（第一）針木を越し立山劔岳を極め越中に至る横斷。

（第二）更に小黑部を降り三日市に出で、或は大黑を經て大町に歸るもの。

（第三）針木、大黑間縱走、或は針木白馬間縱走。

（第四）針木、烏帽子間縱走。

（第五）烏帽子、槍上高地。

（第六）槍、穗高間縱走。

（第七）藥師岳方面。

此外に鹿島川を溯るもの、高瀨入湯股水股より各山稜に達するもの等の如く登路に多少の變化はあるも大體の徑路を右の如きものとせば。

○大西又吉（五十四才）（大町）○傳刀林藏（四十一才）（大町）○勝野玉作（四十三才）（大町）○黑岩直吉（三十三才）（大町）○佐藤靜馬（三十八才）（大町）

以上五名は何れの方面の案内も可能と存候但大西又吉は未だ八峯通過の經驗無く黑岩、佐藤は槍穗高間も經驗無きも皆大町に於ける一流として何れの方面と雖も不能に非ずして未能なるのみと存候。

又吉の經驗豐富なると林藏の沈着と玉作の精悍なると、直吉の勇氣と靜馬の徹頭徹尾忠實にして剛力なるとは各自の特徵に候。

次に準一流として

○松澤由藏（三十三才）（大町）第一、第二、第三、第四、第五、第七に可能にて其無邪氣と元氣は雇傭者に快感を與ふべしと想像致候。

次に吉澤永次郎（四十才）（大町）第一、第二、第五、第七に可能○松田茂一（四十才）（大町）第一、第二、第三、第五に可能○北澤儀一（三十九才）（大町）第一、第二、第五に可能○北澤清志（二十六才）（大町）第一、第二、第三、第四、第五に可能○神社榮太郎

(三十七才)(大町)第一、第二、第五、第六、第七に可能○西澤淺一(三十九才)(大町)第一、第二、第五に可能○福島今朝吉(四十四才)(平村)第一、第二、第五、第七に可能○西澤彰(三十二才)(平村)第一、第二、第四、第五、第七に可能○石原嘉市(四十四才)(大町)第一、第二、第五、第七に可能○松島武久(三十一才)(大町)第一、第二、第四、第五、第六に可能○下原仲次(四十才)(大町)第一、第二、第五に可能○鎌倉澄治(三十四才)(大町)第一、第二、第五に可能。

以上の中永次郎、茂一、儀一、清志、榮太郎、宮坂義衛(三十一才)(大町)第一、第二、第五、第六、第七に可能。

淺一、今朝吉、彰は先づ二流と可申候、他は尙數年の練磨を要し候、此外に○伊藤菊十(五十五才)(大町)は獵夫育ちとして數十年山に經驗有之候も近來引込勝ちにて張出の格に候。

以上の如き亂雜なる記し方にて申上候へども多くは未だ要求通りに行く迄は仲々の事と存じ居候登山者側からの各自に對する注文、批評を賜らば將來の指針とも可相成と存候。

御要求の回答としては小生の此手紙はそれに順應せざること遠きものと存じ候へども御手數乍らよろしき樣御書拔願上候。

先頃集會の節明年度よりは組合員のみならず譬へ一日たりとも登山人夫として傭はれたる全員より其稼日數に應じて一日一錢宛を出金せしめ小屋開き小屋仕舞ひ其他の場合の費途に當つるの可否提議され候。

尙賃金の事に候が從來立山方面の案內者は大抵室堂より別れ歸り二日の賃金を要求致居候も往々芦峅五百石まで客を送る場合或は五百石より汽車にて直江津廻りにて歸るもの等まち〳〵にて其場合は今迄日傭と汽車賃の支拂を受け居候へども其可否如何一般諸彥より御意見承はり度ものに候。

上高地よりは二日の賃金を仰ぎ其中にて松本大町間、又は一日市場大町間の汽車賃を自辨し居候。

昨年は六月二十日を期し山開きの集會を催す豫定にて其際協議し各方面縱走日程を一定致度或る場合に客の意志によりて二日の行程を一日に了り

たる場合にも賃金は一定致度ものと存居候小生は大町を出發として大町案内者を傭はれ各方面の旅行經驗者より露骨なる感想批評を仰ぎ度而して可及丈登山者の爲に忠實ならん事を心懸居候。

（大町　百瀬愼太郎氏報）

◈甲斐柳澤

鳳凰山、駒ヶ岳より、此の兩山間の縱走を初めとして、仙丈方面乃至は白峯山脈の縱走の出發點として、近來甲斐柳澤が登山家の間に注目さるゝに至れるが、同地は未だ登山のセンターとならざるが爲めに、萬事不行屆勝ちなると同時に、他地方の惡感化を受けず、又一部の登山家の間に行はるゝ金錢の浪費物品の濫與等の忌むべき惡習に染まらざるを以て、今後の登山家の注意次第にて、赤石山系北部の登山出發點として大に發展すべき有望なる地なりとす。

柳澤にて野呂川、田代川源流方面への案内として其の任に堪え得る者は、同地の獵夫水石孫太郎父子あるのみなれども、鳳凰山、駒ヶ岳方面ならば他にも其の地理を暗んずる者なきにあらず。又單に人夫として使用するの目的を以て雇傭する場合には、七八貫目の荷物を負ひて山野の跋涉に適する者あり。唯後來各自注意すべきは、此の地の人夫は從來登山家に尾して深山溪谷に入り、數日の間天幕生活を送るに馴れたる者少く、從て野營地の選定、天幕の張り方等につき大に訓練を要す可し。

柳澤は日野春停車場より約二里、大武川に沿へる小村にして、郵便局なく、旅舍は雜貨商を兼業とせる小池淺吉只一戸あるのみ。上等一泊六十錢内外なれども、其の設備、待遇に比すれば甚しく不廉なり。宿泊者は必ず副食物として罐詰等の用意なければ假令粗食を意とせざる者も、同家にて給せらるゝ惡食には堪え得ずして、登山出發前已に胃腸を害するの恐あり。其の他米鹽、莫蓙等を購入すること容易なれども、其の價決して廉と言ふ可からず。只山間の土民甚しく質朴なるは愛す可し。

予等は大正七年七月下旬より八月上旬に亘り、

水石島吉、牛田義次、横内逸平の三名を人夫として具し、白峯山脈を南走して白河内に到り、田代川の源流を渉り、アヒダレ澤を上りて塩見岳と蝙蝠岳とをつなぐ山稜に達し、伊那荒倉、安倍荒倉、横川岳、荒倉岳を經て仙丈に登り、池ノ平に下り、北澤を溯りて仙水峠より駒ヶ岳を經て柳澤に出でたれば、右三名の何れかは此の方面に伴ふを得可きも、案内者として絶對の信頼を置き得可きや否や疑なき能はず。島吉の兄弟なる春吉、林八の兩名は案内者としての技倆十分なるが如く、又水石平吉なる人物も駒ヶ岳、大武川、早川尾根附近の地理に通ずるが如く、而も甚だ愉快なる老人なり。

柳澤の人夫日當は從來一定せず、米價勞銀の高低によりて左右さるゝも、大約一日一圓二三十錢にして、加之糧食は勿論、莫蓙、草鞋、或は烟草等を登山客より支給されたる例ありといふ。予等は信州諸地に見るが如き人夫の嗜好品に至るまで雇客をして支辨せしむるが如き、不快なる弊風の入ることを未前に防がんが爲めに、後來の人夫は登山客より三食以外何物の支給をも受けしめざることゝ定め、日當は米價高直なる本夏の如きは一日一圓四十錢を、他日米價下落するか又は勞銀の標準低下するに於てはそれ以下を以て需に應ず可きを誓はしめ、前記小池淺吉には後來の登山客の爲め十分の便宜を計り、上記の料金を以て人夫の周旋をなさしむることゝしたれば、後來柳澤を根據地とせらるゝ登山者は、無垢の山民を損ひて信州諸地又は甲州西山溫泉に於けるが如く、多額の料金を强請し又は過分の糧食を購はしめて之を下山後着服するが如き弊風を生せざらむ樣留意されんことを希望す。尙白峯、赤石山脈方面の登山を計畫して、春吉又は林八の如き一流の案内者を要する場合には、他の登山客の不便を顧みて、右兩名を同時に拉し去ることを爲さずして、人夫として他の適當なる者を伴はれんことを希望す。又案内者人夫等を豫約さるゝ場合には、右小池淺吉を介して申込まるれば、他と重複等を避け得られて、相互に好都合ならんと信ず。

前記柳澤の旅舍小池淺吉にして後來一向改善の兆なく、又萬一案内人夫周旋の勞を吝むが如きこ

とあらば、柳澤より約半里西方なる横手の旅舍日野屋を以て根據地と定むるも可なる可し。(武田久吉氏報)

◆白馬岳の人夫

丸山岩司　丸山龜吉　高橋宗吉
丸山善治　丸山德次　丸山市三郎
丸山利雄　丸山保雄　大谷豐吉

外十數名あり右の內

一、大黑岳へ縱走人夫　右前部
二、鹿島槍へ縱走人夫
丸山善治　丸山德次　丸山市三郎
丸山利雄
三、祖母谷より立山劍岳方面の案內人夫
丸山善次　丸山市三郎　丸山利雄
大谷豐吉
四、蓮華溫泉を經て絲魚川方面案內人夫殆と全部
五、高山植物の所在名稱を知悉せるもの
丸山利雄　丸山德次　丸山岩司
丸山龜吉　高橋宗吉　(河野齡藏氏報)

◆南アルプスの案內者

瀧浪富士太郎。

年齡　三十四歲(?)
住所　靜岡縣安倍郡井川村字田代。
職業　時計並雜貨商。
熟路
(A)山稜、山岳——赤石山脈南半を主とす。
大無間山、イザルヶ岳、ガッチ河內岳惡澤岳間山稜、惡澤岳尾根(奧西河內千枚澤間)、塩見岳、白峯間ノ岳及農鳥山。
(B)溪谷——大井川谷一圓。
大井川本流、西俣、中俣、東俣(間ノ岳水源迄)、奧西河內、上河內、仁田河內、信濃俣、明神谷、東河內等。

附記、荷負ひは專門ならざるを以て其負擔力は山人としては普通以下(出發日に於て約七貫を限度とするものゝ如し)なるも動作敏活、體は頑健といふに非れども案內として十分也。加之相當正確に地形圖を讀み得、山岳に關す

るものに趣味を有し且理解あり、よく談じよく笑ひ其性心を隱す事なし。先づ以て良案内者と言はんか。賃金は一日一圓五十錢（大正七年八月）。食糧は元より雇主の負擔也。

（大正七年九月十五日　沼　井　生）

山岳彙報（二）

△藏王山凍死事件につき

御申越の儀拜承早速新聞社に問合せ候處何れも實切漸く本日分一葉入手御送申上候小生も新聞記事に注意いたし候も何れも要領を得不申つまり事情は不明に歸し申候一體刈田岳は我々登山仲間より云へば至つて平凡なる山にて高は六千尺内外道路よく通り危險と可申箇所も殆なし（道なき所には危險の處もあるならんも）足駄がけにても踏破し得べしと存候然るに午前十一時頃殆頂に達せし同勢が凍死者を出すなど信ぜられざる事實に候小生の想像にては落伍、頂よりの下り道の不明、吹雪の三と捜索隊の不着とが今回の大事件を來し候ものと存候此山には信州駒ヶ岳位の急峻なる所さへ殆んど見當り不申候多分落伍者は教員二名生徒六名途中より引返して落伍者を迎へに行きし五島といふ生徒と合せて九名つまり九名のものは頂上にて降路不明の爲（或は一行中病人等生ぜし爲）迎へのものを待ち居る中吹雪は益々強くなり凍死せしものと存候。

又捜索隊の方にては平凡なる山丈にマサカ頂上に居ると思はず（頂ヨリ一里位）ワサ小屋まで登り尋れあぐみて引返せしらしくも解釋され申候ソレト考へらるゝは何れも頂より以下を捜索して居たらしく頂を通りしものは第一回に發見せず翌々日偶然に發見せしといふによりても考へられ候然し確實なる事は死者其人が復活せざる限り分明になり申間敷今日になりては各々自己に都合よき樣解釋又は辯解いたし居る樣にていつになりても眞相は分り申間敷候只不都合なるは局外者の攻擊にて或は暴擧とか、時節外の登山とか、落伍者を生ぜしは不都合など自己に關係なしとて瀕りに當事者を攻擊するとにて只さへ登山の氣風の少き奥羽方面に大打擊を與ふるの結果に至るは殘念至極と存候遭難の狀況は國民新聞や東京朝日など（仙臺に支局又は出張所あり）にて御覽に相成候はゞ分明と存候尙事情分明致候はゞ怠らず御報可申上候亂文御宥恕祈上候匆々。

大正七年十月末日仙臺にて　　飯柴永吉

雜報

藏王山の慘事

◇藏王山の濃霧に二中の教諭と生徒九名今尙生死不明　宮城縣立第二中學校生徒百四十三名は山中教諭外三職員の引率にて二十二日仙臺市を出發し同夜青根温泉に一泊し翌二十三日藏王山の峻を蹈破して南村山郡高湯温泉に向ふ途中濃霧の爲に道を失し五年生二名四年生五名並に附添教諭二名行衛不明となり一隊は辛ふじて午後五時堀田村に辿り着き此の旨を村民へ訴へたる爲め大騒ぎとなり駐在巡査は勿論青年團員軍人會員等總出にて徹宵搜索に從事したるも發見せず依りて二十四日早朝より前記搜索隊の外上の山警察署長以下總出にて搜査に從事したるも未だ不明なるを以て尙人員を增加して搜索に從事中なり。（廿四日午後一時半山形特置員發）

山形よりの電話を携へ第二中學校に渡邊校長を訪ひたる處同氏は衷心憂懼に堪へざるものゝ如く兩眼をしばたゝきながら修學旅行の計畫並に午後二時半までに得たる情報を縷述したり曰く今次の修學旅行隊は第四、五學年全部百五十四名にして附添教諭は山中卯之助、筒井千吾、須田秋之進の三氏並に中島大尉にして豫め藏王山の峻阻を跋涉するを以て全員を四小隊に編成し各教諭之れが小隊長の任につき且つ小隊を四分隊に分ちて身體强健なる上級生を分隊長に充て且つ各生徒に暗號を附する等萬全の策を講じ携帶品旅嵶等亦之に準じ左記日程の下に二十二日午前五時學校を出發したり。

◎二十二日　學校出發大河原を經て青根温泉一泊
◎二十三日　青根出發藏王山を越て山形縣南村山郡高湯温泉一泊
◎二十四日　高湯出發金井驛を經て山形着更に漆山天童を經て津山温泉着一泊
◎二十五日　津山出發關山峠を越えて作並着一泊
◎二十六日　作並出發歸校解散

旅程第一日には豫定の如く午後三時青根温泉に到着し佐藤旅館に投宿の上更に諸種の準備を整へ握り飯の外萬一の用意として餅を分配し翌廿三日は午前六時青根を後にして藏王山の峻に向へりこの報告に接したれば學校にても無事高湯温泉へ到着したるものならんと安心し居たる同夜十二時高湯より發したる電報を接受したる處計らざりき左記教諭並に生徒は藏王山中に行衛不明となり百方搜索したるも未だ判明せずとあり。

▲教諭　山中卯之助、筒井千吾▲五年生　五島德一郎、高平勇治

▲四年生　小岩井清、武原義雄、池田勘五郎、安積寅雄、高橋定一。寂耳に水と驚きたる殘留職員は直に協議を凝して取敢ず高湯へ電話を通ぜんとしたるも不通なる爲め更に警察電話を利用し青根の佐藤旅館に問合せたる處旅行隊を案内したる者は藏王山（熊の嶽）の頂上に到り更に山形縣方面へ下る處まで案内の役をつとめ一行無事なるのみならず前途は下り坂にて道路も比較的安易なる模樣なるを以て青根に引き返したるものなるが天候蟲り勝にて時に隆雨ありたれども險惡と稱すべき程にあらざりきとの返答を得たり一方予は高湯なる一行に對し電文にて極力捜索すべしと通じおき應援として渡邊助七、廣田和の二教諭を急派したり以上の如く遭難の狀況は目下の處判然せざるも或は平素强健ならざる筒井教諭の發病せしため山中教諭外七名の生徒が山中に殘留して看護中なるにはあらずや又山中教諭も一種の持病ありとの事なれば同じく身體に異狀を呈し一行と立別れたるにあらずやと想像さるるも何分遠隔の地とて只憂慮して後報を俟ち居るのみなり云々と尙旅行隊は中島大尉引率の下に豫定の如く山形方面へ出發し遭難者の捜索地には須田教諭殘留して上の山警察署長の指揮にかゝる大捜索と共に行動しつゝありと尙ほ第二中學校よりは昨日本縣警察部に對して右一行の捜索方を願ひ出でたりと。

◇大風雪の藏王山九名は生存の見込無し　二十三日午後より急變したる藏王山一帶の天候は濃霧より雨に、雨より霰と變じ果ては吹雪となりて風神雪伯全山を包みたれば其の凄慘譬へんに物なく南村山郡堀田村より遭難教諭學生の捜索の爲めに登山したる青年團員並に軍人分會員の一隊は携へたる炬火の焰もやゝもすれば吹雪の爲めに吹き消されて其の用を成すに至らざる爲め遂に効を奏せず引返したるが二十四日も早朝より堀田村の外山麓なる中川村、東澤村の三村より各三十名乃至四十名の捜索隊を出し岩村上の山警察署長之が總指揮官として登山したるも吹雪は依然として横暴の威を逞ふし充分なる活動をなすことを得ず殊に夜に入りては寒風凛烈として到底露營を許さゞるものありたれば空しく引返し更に二十五日早朝岩村署長は人夫六十名の外獵犬を引き伴れ高湯を發して山中にわけ入りたるも積雪既に四尺に達し吹雪は依然として烈しく殆ど咫尺を辨ぜざることゝて歩行意の如くならず山嶺まで三里餘の行程は約十時間を費さざれば到達することを得ず斯る現況にては目下の所遭難者の生存は全く絶望なるべし一方二十四日中島大尉の引率したる旅行隊は山形を經て同夜天童に一泊したるが二十四日朝仙臺より急行したる二教諭の中廣田和氏が同隊と天童にて相會し二十五日一行を引率して關山峠を越えて作並に向ひ中島大尉は引き返して山形より高湯へ到着し須田教諭並に急派の渡邊教諭と相共力して捜索に從事し居るも只今までは一名をも發見するに至らず。（廿五日午後一時山形特置員發）

◇豪雨が風雪に一行は骨まで凍つた　第二中學校修學旅行隊の藏王山越えの道案内者として青根温泉より雇はれ二十三日午後二時頃熊野嶽の絶頂を越え山形縣境にて一行に立ち分れたる海谷運七（三一）は藏王山跋渉當時に於ける遭難前の狀況に就き左の如く語る、二十三日午前七時修學旅行隊は青根温泉の佐藤旅館前に整列して旅裝の點檢並に人員配屬等を區處した、其の時私（海谷）は附添教員に向つて本日の天候險惡らしければ斷然中止する

か或は案内者二人を雇ふて一隊の前後に附する方宜しかるべしと申出でたのであつたが左樣な心配は無用である、案内者も其方一人にて充分なりとの事で遂其のまゝに青根を出發したのだが曇つた空からは雨がポツ〳〵と降つて來た、それから山路に踏み入つた頃には雨が雪と變り遂には風さへ立て恐るべき吹雪となつて來た、青根を距る三里程の俗稱三途の川について休憩をしたが、その時携へ來つた餅を食て元氣を皷舞しながら歩を進め大黑山の寓手にかゝつた頃は吹雪は一變して豪雨となつたので職員も生徒も襯衣までズブ濡れと云ふ悲慘な姿になつたので握飯を喫して愈熊野嶽の絶頂を目がけて上り初めたが雨は再び雪となり從つて冷氣は淞々と骨に徹して一行の元氣は頓と衰へた、一隊は互に勵まし合つて頂上の刈田嶽神社の園に着して此處に集團を作り肩にかけてゐた外套を着用したけれども肌まで濡た身體には何等の効もなく何れもガタ〳〵と戰慄してゐる茲に於て附添教員は携帶の食糧品を取つて暖をとれと命じたやうであつたが三途の川や大黑山で食べ盡したものと見えて餘してゐる者は殆どなかつたやうであつた然も吹雪はます〳〵猛威を加へて一寸先きも見分けがつかぬ程になつて來た一行は再び行軍を起し互ひに連絡をとつて熊野嶽の頂上を下つて鷲小屋に達したのは何でも午後二時頃であつたらうが夫れまでには一行中一名の故障者もなく吹雪に惱まされ冷雨に苦しめられたけれども苦痛を唱へるものも不平をもらすやうなものもなかつたやうに思はれた此鷲小屋下れば指石のある處で別に案内の要も無いと云ふのでお暇を願ふことにした處が何と云ふ教員か最後に附いて居た方から賃金二圓を貰ひうけての時同教員から歸途が困難だらうから此の握り飯でも持つて行けと云はれたけれど別段心配もないからとて辭退したまゝ元來し山路を辿つて青根に着いたのが五時頃であつた最も歸る途すがら一人の生徒らしいものにも遇はなかつた處を見れば鷲小屋までに異變のあつたことゝは思はれぬ最後について居た教員も言葉から動作の模樣では軍人らしかつたから多分中島先生であつたかも知れません云々

◇風雪を衝いて捜索　昨日午後二時十分高湯發本縣立第二中學校に着せし電文に依れば藏王山遭難者捜索隊一行は風雪を犯して熊野嶽に向ひしも風雪益甚だしく詮方なく鷲小屋より引返したる由なるが其後岩村上の山警察署長の率ゆる捜索隊の一行は勇敢にも此の大風雪を衝いて鷲小屋より奥深く進み熊野嶽及藏王山の險を冒して捜査に努力しつゝあり。

◇馬の背で遲れた　修學旅行隊に加はり一行に先立ち四年生敎名天童より汽車に乘じ昨夜八時五十五分歸仙したるが其の一名四年生飯塚義雄君曰く刈田嶽から高湯へ向ふ途中恰度馬の背あたりから非常な霰で時折霙まじりの雨さへ降つてモウ一寸先も見えないのです、で一行は殆ど攝まる樣にして辿り〳〵辛うじて熊野嶽までは一緒に來た樣ですが其邊から山中先生と三四人の生徒が遲れ勝ちで何でも病人も出た樣ですし怪我人も出た樣でそれで筒井先生と三四人の生徒が熊野嶽で此の遲れた人達を待つたのです勿論其邊も霧が深くて能くは分りませんでした熊ヶ嶽を下りて高湯へはだら〳〵坂で其途中で案内者は歸つて仕舞ひますし私共は山中先生や筒井先生も無論直に後から來た事と思つて高湯へ着いたのですが却々歸つて來ないので大騒ぎになり土地の人々を頼ん

で捜索隊を出したのですが氣懸りになるので更に食物を持たして第二回の捜索隊を出しました其の内に漸々日は暮れて來る山の方は益々荒模樣になつて來るので先生方を始め私共も愈心配になつて來ましたするとそこへ第一回の捜索隊に續いて二回の捜索隊も風が強くて提灯を消され迚も山へ登れないと云つて空しく引返して來ましたので時を移さず第三回の捜索隊を出したのですがこれも亦間もなく空しく引返して參つたので私共も殆ど途方に暮れて了つたのです其夜は眠る處の騒ぎではありませんでしたが如何とも致し方が無いので雲に鎖された藏王山に心を殘し先生や友の身を案じつゝ中島先生に率れられて高湯を出發したのですが後には須田先生が殘つて種々捜査の手を盡して居られました私共數名は天童で一行に分れ先發歸仙しましたが後の生徒は豫定の通り作並を經て明日(廿六日)午後歸る筈です……無事であつて呉れゝばいいですが。

◇藏王山は晴れたり　二十五日夜風雪を侵してワサ小屋附近に於て露營をなしたる岩村上の山警察署長並に渡邊部長の指揮する捜索二隊は二十六日の天明を待ち前日に引續きて千間澤硫黄澤及び地藏嶽より熊野嶽方面と夫れ〴〵捜査の部署を定め居れる處流石に荒れ狂ひたる風神雪伯も夜明前平靜に歸したるを以て一同勇氣を振ひ起し本日こそ遭難者の行衛を確めんものと白雪皚々たる山頂溪谷を隈なく捜索に從事したるが地藏嶽並に藏王山方面の石室を捜査し居たる一隊は熊野嶽の絶頂に達し雪に鎖されたる石室に駈け付け若や生存し在らんかと一縷の望みを持ちて檢め見たるに無慘にも山中教諭、筒井教諭は五年生高平雄治、四年生池田勘五郎外一名(姓名不詳)と相擁して凍死し居たるを以て捜索隊は今更の如く仰天しつゝも直に人口呼吸其の他の應急手當を施したれど元より時日を經過したることなれば其の効なく止むを得ず死體運搬の手筈を定むると共に未發見の學生四名を極力捜査中なれども石室附近には見當らざる模樣なり。(午後二時四十分山形特置員發)

◇遭難日は　二十三日より廿五日にかけての寒冷につき石の卷測候所の調査に依るに二十四日朝七百七十ミリの高氣壓は蒙古地方に存在し一方樺太東方海上にて七百四十二ミリ支那香港附近にて七百五十二ミリを示し氣壓は傾度急峻となり北西の寒風吹き來り從つて一般に氣温の急降を示し刻々に寒威募りて稀有の冷氣を現したり同所の計量にては二十三日の平均温度攝氏一一、七度にして平年に比して〇、三度低く廿四日は同六、六度に下りて平年比五、七度下り最低氣温は午後十一時に於て同三、一度となり尚時を追ふて低下し廿五日午前六時に至りては同二、二度となるに至れり同日午前五時より降り出したる雨は同五十分に至りて霰を交へ遂に初雪となるに至れり本年の降雪は昨年に比し二十三日平年に比して二十六日の早期にて同測候所開設即ち明治二十年以來始めての現象なりと。(石卷特置員電話)

◇先づ山中氏の屍體　二十六日天氣晴朗にしてまた寒からず眞に小春日和なり二十五日の大吹雪に空しく引返せる捜索隊は今日こそ目的を達せんと勇み立ち高湯地方民より成る三十名の一隊は午前八時熊野嶽附近を捜索すべく出發したり昨二十五日より山中御清水を根據として二三日間捜索を繼續せんとの計畫を樹て食

◎雜報　藏王山の慘事

糧等萬端の準備をなしたる南村山郡堀田村中川村二ヶ村の青年團員並に消防隊より成る百餘名の一隊は上ノ山警察署長指揮の下に仙人澤全部に亘り大捜索を開始したり斯くて正午十二時に至るも未だ發見の情報なかりしが午後一時半頃前記高湯を出發したる一隊より高湯山形館に本陣を置きたる捜索指揮長河合山形縣警察部保安課長の許に急報達したり右に依れば熊野嶽絶頂の石室内に於て山中教諭の死体を發見し引續き同處一圓の積雪を拂ひのけて他八名を捜索中なりし處同二時に至りて更に筒井教諭外生徒四名の死體を雪中より堀り出したり此の報道到着と同時に高湯へ着せる稗方宮城縣教育課長渡邊二中校長の兩氏には既に高湯に來着中の小林保安課長と共に善後策につき奔走中なり。(廿六日午後二時富田特派員發)

◇噫何たる悲慘　遭難者の死體發見の急報に接したるより高湯山形館内の捜索隊本部より一行に加りたる二中教諭須田秋之進氏は堀田村村醫を始め死体運搬の任に當るべき人夫數名と共に熊野嶽なる現場に向ひ午後三時出發せるが遭難地は高湯を去る三里餘にして絶頂の寶山御室にして其處より一里餘を下れば鷲地小屋なる助け小屋あり此の小屋より更に下れば拂ひ釜と呼ぶ小屋あり遭難者の一行が鷲地小屋まで下り得たりとせば斯る悲慘の恨事を惹き起さざりしならんと地方民一般に唱へ居れり現場なる熊野山嶺は約六千尺の高峯なれば降雪も朔風に吹飛ばされて堆積するに至らず僅に五寸内外に過ぎず御室は石にて高さ三尺ばかりの四角形に積み上げたるものなるがその中に兩教諭外三名の死體ありて二教諭共に石垣に寄り添ひ山中氏は二人の生徒を左右に抱き寄せ

筒井氏も亦一名の生徒を胸に抱き寄せ各々手を握り合ひて無慘の凍死を遂げたる光景には捜索隊の人々何れも涙を揮はざるなく獸獸の聲暫しは止まざりき五名を發見したる捜索隊は殘れる四名も必ず附近に倒れあるべき見込にて極力探査に從事したる結果御室を東方一町餘の箇所に四名の生徒何れも千辛萬苦の果て力盡きて餓えと寒さの爲めに果敢なき最後を遂げたるもの〻如く或る者は足被跣の儘にて草鞋を腰に下げたるまゝなるあり或る者は雪中に打臥したるまゝ絶命したるものある等斷末魔の苦悶の有樣思ひ見るも紅涙の潸然たるを禁じ得ず殊に捜索隊員をして暗涙に咽ばしめたるは遭難生徒の一人五島德一郎君の實父德治氏は二十五日高湯に到着し直に捜索隊に加はり居たるが山頂に於て死體を發見するや一人々に抱き付きて號泣するなど慘また慘の極みなり又同日より高湯に滯在して一子の安否を氣遣ひ居たる高平雄治君の實父も急報に接して記者等の一行と共に現場に向ふ途上雪路を辿りつゝ時折りさめ〴〵と泣き悲しみ足の歩みも捗らざる處午後五時の夕陽は默然たる死の山影を照す光景到底筆文の盡す所にあらず、死体九箇は各人夫の背に負はれ暗の雪路を午後五時高湯に運搬さる右の情況を各遺族に通報し一先づ高湯に於て追弔會を執行すべき豫定なり。(廿六日午後四時五十七分高湯にて富田特派員發)

◇蠟の如き九つの骸　午後五時頃より三つ二つと捜索隊員の背に負はれて高湯唯法寺に運ばれたる屍體は蠟て九つとなりたるが何れも弧に包まれ雪に塗れ居れる狀況るも慘鼻の極みにて客殿に三人宛仰向けて並べられ老僧の聲幽かなる讀經の程に板の如く凍れる外套上着等を脱がせたるが九名共蠟の如く蒼白化せる

顔を五分心洋燈の薄暗く照す樣眞に鬼氣迫るの感あり安積君の殿父も見えはふり落ちる涙を呑み込みつゝ死せる子の顔に掛りある雪など打ち拂ふ此場の光景は慘の慘古山寺に陽は落ちて呼べど歸らぬ九つの幽魂無限の恨みを呑んで熊野山麓に横はれり當地方民の献身的活動は以て他郷の範となすに足る。(廿六日午後三時十分高湯にて富田特派員發)

◇九死に一生を得て二中登山隊昨日歸る登山隊の歸還談　痛ましき遭難者を生めるに中藏王山踏破隊一行は遭難以後本校より派遣せられたる廣田教諭引卒の元に昨朝作並を發し日沒近く落合橋に到着せるが二恩師と七學友とを失へる一隊百四十餘名の顔は甚く沈痛の色を深ほせ居れりと途中には子の安否を氣遣ひて親々の出迎へたるも一入感を深からしめたり一行を率ゐたる廣田教諭は語る怎うも申し譯の無い事になりました私は登山隊に加はつたので無いから詳細に申し上げ兼ねるが生徒一同の述懷を聞けば全く登山隊一行は變轉極まり無き藏王山の風雨雪に惱められたのです殊に其日は濃霧に遭遇したので斯かる悲慘な遭遇者を出した事であらうが僕等の何よりも知りたかつた事は遭難者が何處で行衛不明になつたかです、然し濃霧の爲前途を遮られて居つたといふ事ですから確然たる事は解らんですが遭難者の内の五島德一郎は山形縣堺のワサ小屋から運れた人々の援護に赴いた事は慥で其時側に居た坂元義夫に携帶せる餅を與へて行つたとの事ですが高平雄治丈は刈田嶽の絶頂を越へて馬の背に入る頃より皆暮所在が解らなかつたさうです又四年の安積虎雄と高橋定一は刈田嶽で大部弱つたが馬の背は越したらうとの事である夫から武原、小岩井池田の三名は生徒中一番遲れ三人一緒に肩掛けをして來たのを見たといふ生徒があるから是又馬の背丈けは越たらうとのことなるが三名中の小岩井は刈田嶽神社の前で足に出たマメを潰し繃帶して居つたのを見たといふから一行は大部弱つて居つたらしいです、山中教諭は始終夫れに附添ふた相ですから慥一番の殿を承り此の三名の生徒と一所でしたらう次ぎに鷲小屋から引返して來た五島德一郎は熊野嶽の絶頂を超して程なく筒井教諭に遭過し其處で筒井教諭を介抱して登つて來たのを見たといふ生徒がありましたから筒井教諭と五島は一所でせうそうすると遭難の場所も馬の背を過ぐる所から熊野嶽の絶頂に到る内だと思ふのですが今に至る迄發見されないとすると若しか專ら公評たる仙人澤にでも蹈み迷つたのでせうか。

◇晩秋悲し柩還る夜　熊野嶽の絶頂にて大吹雪に遭ひ、無慘の凍死を遂げた山中、筒井兩教諭と、五島、小岩井、池田、武原、安積、高平、高橋の七生徒の遺骸は、山麓の古寺で入棺式を營み秋雨只降る中を高湯を發し、午後三時廿五分上の山より靈柩車に安置、福島を經て昨夜十時五十分仙臺驛に到着した、吹雪凄ぶ熊野山上、師弟相抱きて非業の死を待ちし當時の光景に想到すれば、今更の如く悲嘆の新たなるを感ぜずに居られない。筒井教諭を殿として遭難者九名の遺骸全部を高湯唯法寺に收容し終れるは二十六日午後九時過ぎなり茲に於て上ノ山警察署長岩村顯吉氏は堀田村醫と共に死體の檢按をなし終つて白布を敷きつめたる敷蓆上に安置して懇篤なる回向を捧げたり此の席には遠く朝鮮に在住して駈けつけ兼ねたる小岩井清君の家族を除き他八名の遭難者遺

◎雜報　藏王山の慘事

族何れも着座して悲嘆の涙に暮れ居ることゝて堂中寂として咳の聲一つだになし渡邊二中校長は燒香の後遺族に對して懇切なる挨拶をなし稗方教育課長及び島田氏も頻りに慰藉する處あり次いで入棺式を執行して全く終了を告げしは夜半二時過ぎなり列席者一同は九つの新らしき柩を前にして通夜をつとめ二十七日午前五時一先づ旅宿山形館へ引上げたり本日は朝來冷雨降りしきりて遠山の影は霞に包まれて見え分かず、やがて小雪と變じ寒威また加はりて然して午前中に假葬儀を營みて各遺族に屍體を引渡す豫定なるが山中教諭のみは東京より急行したる令兄之を引取りて同地へ搬送の都合なるより高湯出發はやゝ遲るべきも他八名の遺骸は今二十七日午後三時二十四分發の上り列車にて福島經由にて仙臺に護送の豫定なり尚ほ小林保安課長渡邊校長稗方理事官等の一行は後仕末を完了したる上二十八日歸仙の途につくべし遺骸輸送に關しては鐵道にて多大の同情を寄せ特に屍体輸送車を提供して便宜を與ふることに決したり。（廿七日午前九時高湯にて富田特派員）昨日に變る今日の天候夜來の雨頻りに降りしきれば深山は又も雪なるべし早朝より唯法寺に集合したる遺族父兄等は涙の中に回向を遂げ柩搬送の準備を整へ午前十時を合圖に一箇の柩に十名宛の人夫を附し四人にて之を舁ぎ上げ各遺族これに附き添ひて唯法寺を立出で遺恨千載に盡きぬ熊野山麓に降り注ぐ冷雨に濡れつゝ九箇の新しき柩を相連れて上ノ山驛に向け出發したり連日風雪と闘ひながら捜索の任に當り大活動をなしたる上ノ山警察署長岩村顯吉氏は數名の巡査を從へて棺側に附き從ひたるは衆目を惹けり斯くて上ノ山驛着後は午後三時二十四分發の上り列車に搭載し福島驛經由の上午後十時五十分仙臺驛着の豫定に決定したり尚山中教諭の遺骸は東京在住の令兄方へ搬送の都合により他柩に後れて高湯を出發する筈なりしも凝議の結果變更して同時に發程することとなれり小林保安課長の一行は高湯に殘りて後仕末をなし多分明二十八日歸仙すべし。（廿七日午前十一時高湯にて富田特派員發）

高湯を出發せる九つの柩は午後二時五十分上の山驛に到着せるが南村山郡長上の山町長を初め有志が多數出迎ひ消防組も停車場に詰め居りて雨に濡れたる柩を丁寧にふきとり一同弔意を表し無事三時廿五分發の汽車に積込みたるが一貨車に四つ別貨車に五つ積みたり發車十分前同驛まで仙臺より出迎へたる山中教諭夫人は悲みの餘り卒倒せるも同地梅津醫師の介抱にて蘇生し事なく同列車にて出發せり。（廿七日午後七時三十分高湯にて富田特派員發）

◇香煙縷々告別式　十一時半仙臺驛廣場を出發せる遭難者の靈柩は遺族職員生徒に擁せられて沿道に堵をなす十萬市民の哀悼の涙と嗚咽の音に送迎されつゝ靜寂に打返れる夜の町を名掛町に出で西に向ひて進み芭蕉の辻より右折して國分町二日町を過ぎ北六番丁に左折して十二時半二中東校門より入る、噫登山の朝勇みて出でし母校の門も一夕藏王の冤に罹ほれて哀れや白衣の柩となりて歸る、人生の悲慘何ぞ是に過ぐるものかある、柩を擁せる學友過ぐる日の悲慘事を追懷して涙潸然として下るを見る、蘯て來賓一般會葬者は一先づ休憩室に入る、其間靈柩は遺族其他の手に依りて祭場に遷され南面せる上壇には山中、筒井兩教諭の靈柩を其下に小岩井、池田、武原、五島、高平、安積、高橋等七生徒の遺骸を安置せるが祭壇は總て白布を以て蔽はれ更に靈柩の四周は

黒白の幔幕を以て張繞らされ香煙纏々として立昇る狀無限の哀愁を湛へたり、午前一時靈柩の安置、生花、供物、燈明等供へ了るや僧侶遺族來賓一般會葬者等肅々として入場參列し夫々着席すれば導師福定無外師を先頭とせる在仙佛教各宗協會の僧侶二十氏靜々と祭壇に進み『觀音經』の讀經の音もいと悲しく場内に響きて場に充滿せる、參列者皆涙を揮はざるなく獻歎の聲暫しは止まざりき次で福定無外師恭しく靈前に進みて香語

青雲志氣凌藏山　雪沒全身行路難
別拓涅槃無爲道　寃過生死一支關

露

塵一番　大活現生

を述ぶれば牧師梶原氏は基督教會を代表して訣別の辭を、西本（校長代理）教頭の告別の辭ありたるが泣くが如く悲しむが如き告別の辭には思はずハンカチーフを顏に當たる者多かりき、次ぎに濱田本縣知事及山田仙臺市長の弔辭朗讀等あり燒香に遷りたるがいとも打凋れたる遺族は涙を涸らしたる兩眼に靈前を見据へて去り難き有樣は他の見る眼も哀れなりき、斯くて職員總代廣田和氏、生徒總代高橋德太郎君、濱田本縣知事、山田仙臺市長、同愛會總代千葉五郎氏、在校生父兄總代坂元藏之允氏、來賓總代等次々に起ちて懇なる燒香をなし校長代理西本教頭の挨拶にて甚く哀愁の色を留めし告別式を終りたるが時將に二時を過ぎ三更の弦月は雲間に影を沒して更に凄慘の氣色あり永久に歸らぬ九つの英靈今何處にか徨ふ、校門を出づる會葬者の眼には何れも玉の雫を宿し居れり、嬲て仙臺市居住者たる筒井教諭小岩井、武原、池田、安積、高橋等五君の靈柩は告別式後遺族親戚知己に擁せられて自宅に遷されたるが山中教諭及び五島、高平の二生徒の靈柩は其儘安置せられ學校にて通夜をなして本日夫々郷里に遷さるゝ筈なり。（廿八日午前三時記）

◇絶頂まで達せずに　捜索に從事したる岩村警部、渡邊部長其の他の談に依れば熊野嶽絶頂の御室内に在りし山中教諭は高平雄治、池田勘五郎の二生徒を左右に抱きしめ、筒井教諭は五島德一郎を胸部に擁し生徒は何れも教師の手を固く握りたるまゝ絶命しあり五名の頭上には一枚の板を石垣に覆ひあるより察すれば馬の脊の嶮を辛ふじて渉り得たる師弟五人は互に相倚り相助けて御室内に到達せしめて一片の板にても吹雪を防ぎて天明を待たんとしたるものならん石室より東方へ約百間を距てゝ小岩井、武原、安積、高橋の四生徒は何れも頭部を東にして雪中に打倒れ居りたる狀況より察すれば刈田嶽を發して馬の脊越をなす中に足部の疼痛、身體の疲勞等のため漸次後方に殘されたる四生徒は前記五名の師弟連と前後して熊野嶽の頂上に達したるも未だ石室に達せざるに先だち心身困憊して歩行の勇なき折柄猛然として襲來せる大吹雪の爲めに打ち倒され其のまゝ苦悶百轉して絶命したるものならんか、されば現場の光景眞に慘鼻の極を致し先行捜索隊員の發見の聲をきゝて駈け付けたる全員は齊しく師弟情誼の麗しき犧牲に風雪と苦闘して遂に力盡きたる殉難者に夫れ〴〵憐憫の情を禁じ得ざるものありき。（山形特置員發）

捜索に從事したる地方人の談に依れば九名は藏王山（刈田嶽）を過ぎて熊野嶽に向はんとする馬の脊に於て一行に立ち遲れ向ふべ

き方途を失したるにより先づ熊野嶽の頂上なる寶山御室に、避難せるものらし御室内にては二本の木を柱となし室内に在りたる板片などを拾ひ集めて屋根としたる形跡あり雪中に凍死したる四名の生徒は道を求むべく山頂を彼方此方と彷徨ひ居る中に刻々と襲ひ來れる寒氣の爲めに精根全く盡きて御室に到り兼ね其の場に到れたるものゝ如し現場の氣温は死體發見の二十六日の午後晴天の節に於ても攝氏零下二度を示せる程なれば遭難當時なる夕刻然も吹雪に咫尺を辨ぜざる折なれば寒氣の酷烈は蓋し想像に難からず又死體を檢案したる堀田村醫は何れも死後二日を經過すと診定したることなれば廿四日朝までは生存し居れるものと推測せらる二十五日捜索の爲め仙臺より高湯に急行し中川村長野に赴き同地の捜索隊に加はりて二十六日死體發見の現場に到りたる渡邊(助七)教諭が生徒の死骸に抱きつき『年々の旅行に加はるのを今年に限つて一緒にしなかつたのは殘念だお前方に食べさせやうとて澤山のキャラメルを持つて來たのに此の有樣とは何事だ』などゝ生ける人にもの云ふが如くかき口説きながら號泣するさま師弟の情誼ここそと思はれ居並びたる捜索隊員一同は共に涙をすゝるのみなりき其の他凄絶の慘話數多なれば詳細は後報に讓る。(二十七日午後二時二十分高湯に富田特派發)

◇遭難原因　遭難者の捜索並に死體の收容は茲に一段落を告げたるも殘されたる大問題は依然として解決せられず即ち遭難の原因及び其の時期なるが捜索に從事したる地方民又は死體發見者等の談に依れば次ぎの如き遺憾ありしと(廿七日午後三時高湯にて富田特派員發)

一、高山踏破の時期に對する知識の乏しかりしこと
二、人員數に對する案内者の不足なりしこと
三、山中に於ける人員點呼に粗漏ありしこと
四、二十三日午後四時頃高湯に先着せるものが地方民に九名の殘留者あることを告ぐるに當り餘りに簡單に過ぎたる爲め捜索上に手遲れを來たしたること

◇努力した積り　二中登山隊を率ゐ始終一隊の先頭を承はり藏王山を踏破せる中島大尉は一昨夜遭難者の靈柩と共に歸校せるが一行の行動を詳に知るべく小田原車通の宅に訪へば下の如く語る

『登山隊一行は豫て計畫せる四小隊組織に編成し更に各小隊を四分隊に分ち身體强健なる上級生を分隊長に充て一小隊に一名の教員附添ひ午前六時半青根を出發したる者なるが宿でも案内者も此日は大丈夫越せるといつて少しも危險な天候である事は言はなかつた、其處で案内者が附添教員に言つたと謂ふ登山中止説案内者增員説も全然無根の話である偖て青根から出發し一隊は山道を辿り辿りて谿谷を過ぎ急峻な山道を登りなどして一時間半の行程を持續し八時頃刈田嶽神社の社務所の前で第一回の休憩をし此時の天候は雨は降つて來るかも知れないと案内者の話であつたが案内者は更に幾度も風が無いから神樣からお授けになつた日だと言つて少しも危險の警告はしなかつた、それで登山を續行して緩やかな山道を辿り饗の河原に差懸る所(峨々温泉に別れて行く道路の附近)迄約一時間行程を進行して第二回の休憩をなしたるが其時は遭難せる小岩井、武原の二生徒が足を損じて居つたのを認めた、そして武原は第二回の休憩した所の少し前で休み度いと言ふたが

實は空腹を訴ふる意味で言つたものだから少し時間には早いとは思つたが其處で豫て携帶して居た餅一ヶを一同に食はせた蟲て其處を發足して饗の河原の直ぐ手前から雨はポツ〳〵降つて來たが案内者が何とも警告しないので勿論危險有らうとは思はずダラダラ山坂を登つて行つたのであるが其路は皆石を重れてある所謂饗の河原の中間であるから石の間を縫ひ〳〵進行し一時間行程を持續した頃草鞋脱ぎ場で第三回の休憩をした未だ小雨は止まない且此處から頂上に行に隨つて濃霧が間斷なく襲ふといふ事であるからよく一隊の聯絡に關し注意を與へ尙段々寒さを覺えるので隨意に外套を着くる事を命じたが人員點呼は各休憩所で以上三回迄行つたのであるが異狀は爲かつた、そして此處迄は雨さへ降られば平地と同樣で少しも苦るしいことは無かつたと思ふし案内人も無理だといふことは少しも言はないので又も登山を續行したが三途の川を越してから段々山路は急傾斜になつたが途中刈田嶽の絶頂三途の川の中間、右側が斷崖になつてる所を越し掛つた頃先頭の進行を中止し後尾の段々詰めて來るのを待つて居つたそして草鞋を穿き換へる者は穿き換へさせたが其頃から霙交りの雪が降つて來た、休憩時約廿分一隊が四列縱隊位に詰つて來た頃又前進して先頭が刈田嶽の絶頂に達した時は十一時であつた其處で第四回の休憩と點呼とを行ひ晝食を攝らせたが別段人員には異狀は無かつた然し晝食時は大部寒くなつて來た爲生徒は多分慄えて居つた又大部疲れて居つた樣子である、暫らくして其處を發足し刈田嶽を下つたのであるが僅下ると馬の脊がズーと平道（多少波狀を呈してゐるが）になつてゐて歩きよくなつてる夫でも止まつては歩き歩きて止まりして徐行し、更に熊野嶽に差懸つてからは十歩行つては休み〳〵して登つたのであるが中腹過ぐる頃今一息で絶頂になる頃生徒は絶頂を早く越したいといふ氣分になつたと見え急に先になることを欲したが私はそれを制止した其時は筒井氏も私の二間許り後に居て隊伍の整頓に努めた又五島は先頭と筒井氏の中間に居て私に太い杖を與れたそうして十歩行つては止るゝなといふ歩き方をして絶頂に達したのは十二時少し前であるが風が強いので集合は危險であつた爲私は暫く下を眺めた丈で進行を續けた熊野嶽の絶頂は濃霧が間斷なく襲ふてゐたので適當な休憩する場所を探し乍ら緩徐な行進を續けて居たがとう〳〵ワサ小屋迄來た其處で案内人は『此處から高湯道に入るのだからこれさへ行けば間違ひはない』と言つて須田敎諭から案内料を貰ふ爲に其處に待つてゐたが一隊はワサ小屋少し先で十五分許り休憩したが其處では人員點呼は行らない何故となれば風が強いし道は一列に漸く並べる丈の小徑であるからである且つワサ小屋から下る所は極道が惡く生れて始めて遭遇したほどであるそして尙も行進を續けてる中に稍後方に居た須田敎諭が私の所に駈て來て後方に一部の生徒が殘つたと言ふから夫れでは人員點呼を行ると附添敎諭二名と生徒七名が居らぬことを發見した、時に午後二時頃であつた、其處で須田敎諭に善後策を相談したのであるが熊野嶽の絶頂迄戻らうとすれば二時間も費るから縱し午後四時頃絶頂に引返すとしてもそれから更に高湯道を辿ればワサ小屋附近で陽が暮るゝ譯になる、そうすると全體が動けなくなるから高湯に到着した上で更に山の事情に明るい者を迎へに出すことにして行進を續け午後四時

◎雜報　藏王山の慘事

十分先頭が高湯の宿屋に着き約十五分で繼つたのであるが一方私が更に人員點呼をする須田君が宿の主人に交渉して迎ひの人を繰出したのであるが時に四時半高湯の天空はさして危險の色を留めてゐなかつたそして私も須田君も暫くして歸つてくるものと許思つて居つたが數時間を經過しても歸つて來ぬので第二回の迎へ人を差立てる事を計畫してゐた、俄然夜の八時頃第一回の迎人は空しく引返して來た防寒具の準備がなかつたし烈風で提灯の火が吹き消されるといふ始末で迚も登れないと言つて引返して來たこの報告を聞いて私は途方に暮れて仕舞ひ午後九時半頃更に第二回の迎へ人に焚火をする材料を携帶せしめ登山させたがそれも効を奏せず其後も萬全の方策を講じた積りであつた、斯く悲慘なる遭難者を出すのであつたならば私丈もワサ小屋から引返すのであつた筒井君は怎んなにか僕の來るのを待つて居つた事であらうと言つて顏を打伏して暗涙に咽んで居た。

◇眼を睜いて死す　二十六日の空は珍らしく晴れた、宮城縣側の捜索隊三百餘名が早朝大黑に到着してから三方に手を分けて捜索することにした、田村警部補の一隊は本道から御峰道から遠刈田消防組は中間新道から乾組頭の一隊は御澤道路から進んで刈田嶽に落ち合ふ計畫で大黑を出發した、岩を分け雪を掘つて三道を限無く捜索して三隊が刈田嶽に合せんとした時山形縣の捜索隊が屍體全部を發見したといふ急報に接した刈田山頂から熊野嶽に到る間の馬の背は直徑二十町、道程は一里許りある、一面は砂礫地で强雨の場合は砂飛び石飛んで危險極まる難所である、一行は發見の急報に接して熊野嶽へ飛んで行つた、熊野嶽には石の御室が二つある、一つは山頂の東で、約一丁西の方にも一つある、東の御室は柴田郡に屬して、熊野嶽神社の御堂である先年社祠は燒失して今は僅かに石垣のみ三四尺の高さに殘つて居る三間四方位で東南北の三方口、刈田嶽から熊野嶽を通つて高湯へ行くには是非通らねばならぬところである遭難者の死體を發見したのは山形縣捜索隊堀田村岡崎喜六で廿六日午前十一時東の御室であつた山中先生は池田勘五郎と高平雄治の二生徒を兩手に抱き西側の石垣に東面し、筒井先生は五島德一郎と抱き合ふて其傍に倒れて居た室の石垣には破れた僅許りの屋根が殘つて居る、それに更に破れ板を覆ふて吹雪を防がんとした、先生も生徒も兩眼を睜らき、上服から襦衣まで皆板のやうに凍つて居た、西の御室には安積、小岩井、高橋、武原の四生徒が互ひに抱き合ふて其の上に雪深く積つて居た、後に屍體を檢めて見ると、五島の新しい足袋の爪先が破れ指の爪先の負傷して居る處から見ると、何んなに御室を探すに苦心したかと想像される、御室の直ぐ四五間の處に高湯へ行く道があるのだから、地理さへ知つて居たならば屋根をかける丈けの時間があつたのだから難を免れることが出來たであらうに。

◇九つの靈を慰むべく熊野山頂に記念碑建設　這回魔の籠る藏王山に果敢なき最後を遂げたる筒井、山中兩教諭及五島、高平、小岩井、池田、武原、高橋、安積の英靈を慰むべく今般坂元藏之允、千葉五郎、岩本信太郎の三氏發起となり昨日午後二時より第二中學校内に會合を催したるが參會者頗る多く左の五項の計畫を企圖せるが實行方法左の如し

第一項　遭難死沒者の英靈を弔はんがため本校内に於て盛なる

招魂祭を擧行する事（學校主催とする事並に同窓會父兄會援助の事）

第二項　遭難者の遺族に對しても出來得る限りの慰藉を行事（職員遺族の教育資金の如きもの）

第三項　學校に寫眞と記念品とを存置し永久に今日を記念し校風の發揚を期し遭難者の死を有意義ならしむると共に壯烈顯著なりし行動の如き我校從來の美風としてこれを永久に傳ふべき事

第四項　遭難地へ記念碑建設の事

第五項　毎年十月二十三日を期し特に死者のために追悼して弔意を表せしむる事

右の各項を滿場一致にて可決し坂元議長より左記五氏を實行委員指名者に擧げたり

小野平一郎、海藤靜夫、黑澤英俊、星廉平、小泉策郎

依つて指名委員は協議の結果實行委員として父兄會代表者八名、同窓會代表者七名を擧ぐる事とし即ち左記諸氏を指名せり

坂元藏之允、岩本新太郎、小野平一郎、小泉策郎、伊澤平左衛門、林代次郎、宮崎魁、海藤靜夫（以上父兄會）

千葉五郎、八木精一、鈴木立春、針生久助、星廉平、小泉侃、黑澤英俊（以上同窓會）

右に就き發起人たる坂元藏之允氏は語る『遭難地たる熊野嶽の絶頂に一大記念碑を建設するは余の最も全力を傾倒したき所なるが一面に於ては右計畫が如何に英靈を慰むるに足るかを思はしむべし就ては稻井石の如き風化の憂ひなき石材を以て建設したき希望なるが尙來夏建設を了らば其處に大追悼會を催して永久に歸らぬ九つの精靈を慰めたしと思ふ』云々

◇軍隊でもせぬ暴擧　豫備陸軍歩兵中佐伊藤徹太郎氏は二中遭難事件を本紙にて知るや直に藏王山に向けて出發し親しく現場に就いて觀察調査を遂げ來れるが其談に曰く

今回の事變が起つたに就ては、少くとも行軍の計畫と實施に欠陷あつたと思はれたので、將來修學旅行や登山といふ事の爲めに其事の經過や原因を究め置くの有益なる事を感じ、現場に赴き實地調査を遂げた次第であるが、先づ遠刈田に於いて一行が登山の前日同所に休憩し賽食を喫べた折に湯を飲ませず水を給したといふのを聞いて抑も既に行軍の計畫上注意の周到ならざりし一端を窺ひ知る事が出來た、一行は青根に泊り翌廿三日登山したのであるが古來藏王山は新曆の九月廿八日には刈田嶽神社の御神体を山から下し之を以て山止めとする慣習になつて居る、即ち山止め後約一ケ月を經て登山するのであるから其處に何等か危險の伴ふ事を豫め考へて置かればならぬ、然るに青根出發に際し食物の如き僅か小さな握り飯一個と餅片二個を給與したのみで夫も賽の河原で腰掛けて喫べた形跡があつた、案内者の談に依ると何でも先生が食へと云つた時には既に一同握り飯を持つて居なかつた相だ、元來行軍の計畫としては其日の行程の二分の一以上行つて晝食する樣に出發時刻を定むべきだが賽の河原では高湯迄の行程に對し三分の一も進んでゐない、殊に人家絶えた險路を突破せんとするに晝食を取るべき場所の決定といふ事は全行程の上に至大の影響あるを午後食物が欠乏したといふのは行軍計畫の大失敗といはれば

ならぬ、次に遠刈田でも青根でも地方人はこの天候ではと山登りの危險を語り思ひ止まるべきを勸告したが高湯へ既に通知もしてあるからと殆ど無理强ひに出發したと兩地の人は皆語つて居たが事實なれば問題で何でも當日は山に馴た柴刈までが急いで下山した程なさうである、それに案内者が百五十人に對し一人とは何たる事だ、夏時天候順調の時道者が登山するにも五十人に一人といふのが普通なさうだ、尤も四人請求したが揃はなかつたとかとも云ふが开麼らその案内者を無理にも高湯まで連れて行けば可い費用の關係もあらうが之も手落だ、落伍者が生じてからの處置に就ては一般の雛形があるから當然の事で蹉り落伍者が生じたといふのが既に行軍計畫の失態を意味する、吹雪に遭ひ生徒等の小倉服が肌に凍付く樣になつても携へた外套の使用を命じなかつたのも行軍休養上の大缺點だ、その他五島といふ生徒を一人歸した事や途中何等の設備が無かつた事等も確に手落で軍隊でも行らぬ樣な亂暴な行軍を行つて居る、要するに是等の事は教育者なるものが常に餘り偏狹で何事にも多數の智識を借りる事を忌み自己萬能で事を處するから起ることで、充分山の事情や準備のことに就いて經驗者や學者の意見を聞き研究の上周到な用意をしたなら怎麽間違ひが起る筈はないと信ずる、あゝした行軍をしたら兵隊でも殺すだらう。

◇中島大尉の責任は重大なり

仙臺憲兵分隊長　安田又吉氏談

今回の二中登山隊遭難の大悲慘事は第一は引率高級者中島大尉に第二は生徒に第三は父兄に各責任がある、引率者中島大尉の行動は多年軍隊生活に鍛へられた者の所爲とは迚も思はれぬ程に愚劣なものであゝ雖嶮の場所を跋涉するに隊伍を四分五分して各指揮者の殆ど任意行動を採らしめたなどは沙汰の限りである、予も步兵隊に在任中新月の夜南越の險峻野坂嶽（標高九五〇米突）の急坂而も濃密林の道路なき間を一名の將校以下二百名の兵を引率して越えた實際經驗がある、其の時は一名の事故者があれば必ず全隊を停止して之れを確かめ事故を排除するまでは斷じて進まなかつた、且人員を調査點呼する爲め約五分毎に行進間先登から番號を後尾に傳へ後尾の將校は亦後尾から逆に番號を先登に傳へ以て絶對確實を期したのである、由來『誤られ易き計畫は必ず誤る』の原則は動かすべからざるものである、今次の登山隊指揮者は果して自己の最善を盡したか否か自ら問ふ所あらば自ら解することが出來やう、事故者を跡に殘して自分は下山し入湯一盞を傾くるなどは正氣の沙汰とは思はれぬ、何故に直に死を決して捜査に全力を致さなかつたか、計畫は元より零ではあるが斯くせば以て罪の一部を償ふことが出來得やうといふものだ、斯くの如き利己的無爲無策の暴行は今更論ずるも價値なしとは思ふが將來の警めの爲め敢て一言して高級指揮者の反省を望む者である、第二の責任として學生に望みたい事は固より軍隊とはその制裁からいふても異つて居るが、それだけ兵卒等よりは一般に有識者であるから苟くも隊伍を爲す時にはモ少し行動を慎んで貰ひたい事である、即ち一步の連絡を失したるは一步の誤を生じ五分間の距離を失したるは五分間の誤りを生じたものである第三の責任として各父兄は何故に大切な子供を託して出發させる際に學校當局に向つて如何な

る方法計畫の下に旅行を實施するかを確めなかつたかといふ點である、軍人に於ける父兄と生徒に於ける父兄とは其の責任が異つて居る、今次の旅行の此の悲慘事を見るにつけ各父兄にも『誤られ易き依託は必ず誤る』の原則を忘れないやうにして居て貰ひたいことである。

◇捜索の眞相　泣けど叫べど今は歸らぬ九名の遭難者が盡きぬ恨を熊野山嶺に殘したる本月廿三日の二中登山隊一行の行動に關しては既に關係者の各方面より種々に發表されたる如しと雖も最も肝心なる落伍者救援の經過と捜索隊活動の狀況とが未だ眞相に觸れて居ない爲めに九名の慘死を以て唯之を不思議と觀じ不運とのみ解釋する向きすらあるに至つては斯くの如き大慘事を目するに餘りに輕々に過ぎ到底將來の誡しめたり又た他の警めとなすに足らざるやの觀あるに依り茲に親しく記者の實際に就きて探査せる所を發表すべし、二中登山隊一行が刈田熊野の峻嶺を踏破し山形縣南村山郡堀田村大字高湯の旅館山形館齋藤助右衛門方に到着すべき豫定時間は廿三日午後三時半頃なりし由前以て山形館宛に通知ありたるものにて山形館方にては當日同時刻頃に番頭を出迎へに出だしたるも一行見えず午後四時頃に至り冷雨降りしきる中を漸く一行が山形館方に到着せるものにて其の時は教諭須田秋之進中島豐二郎兩氏外四十三名が隊伍を整へて到着せるものにあらず三々伍々なりし事は旅館主始め番頭其の他の語る所に依りて明白なるが館前に於て點呼を終り各同館内の人となりたるものにて其際須田教諭は館主齋藤助右衛門に向い『殘つた生徒が其の邊を來るかも知れぬから迎べに行つて呉れ……』といふ簡單な頼み館主は其の言に依りよもや九名が高湯より二里餘の山嶺に於て霧と濃霧に生死の苦闘をなし居るとも思はれず『其邊を來るから！』といふ簡單なる頼みを附近の岡崎喜作堀傳次郎といふ二者を頼み握り飯だけは用意させて迎へに出だせるものなることは館主助右衛門氏の記者になせる直話なり然るに迎へに出でたる前記の二名は午後九時半頃に至りて寒氣に慄ひつゝ歸り來たり『寒氣が激しいのと人數が足らぬので甚歴しても駄目だ……拔川の上のニタ（地方名稱）まで行つたが見當らぬ』と語れるに依り更に村民大沼圓三大沼甚作岡崎大助岡崎喜六の四名を頼み茲に始めて迎へ人にあらで捜索從事の準備を整へ高湯を出發せるは午後十一時過ぎなりしなり最初迎へに出でたる岡崎喜作氏の記者に語れる所に依れば『其の邊を來るかも知れぬといふことだからモ少しモ少しと思つて登つて行つても却々生徒さん達の姿が見えぬ、拔川の上まで行つた頃は吹雪が激しく到庭歩行も出來ぬ樣な目に遭つたので小屋に歸つて寒氣を防ぐ爲め古草鞋を燃やして暖を取らうとしてもこれさへ及ばず三四時間も待つて居たが生徒さんは來ないし寒氣が刻々に迫つて來るので別に大準備を整へて出直さねばならぬと思ひ一生懸命に下山した譯です』と又前記の第二回四名の捜索隊出發の際に於ける警察への交渉如何といふに先着せる須田教諭等の言にてはワザ小屋までは來たのだからと……極めて簡單なる話なれば高湯駐在所詰巡査富樫岩治氏も左程大事に考へ居らざりし樣子なり然るに始めて捜索の形となりて午後十一時頃高湯を出發せる前記四名の人々が翌二十四日夜半二時を過ぎても歸り來らず三時に至るも猶ほ下山せぬところより山形館主は氣を揉み出し近

◎雜報　藏王山の慘事

所の人を起し高湯區長岡崎久作氏に斯くと告げ茲に村民十二名を集め食糧防寒服裝等十分なる用意をなし前記四名の食糧まで携帶し高湯を出發せるは廿四日の午前七時頃なり高湯部落東南端小學校前を過ぎ現場に至る登坂口まで進みし頃前記の大沼圓三氏外三名が坂を下り來るに出會し樣子を聞けば『吾々四名はワサ小屋の上まで行つたが寒氣と積雪で死ぬ目に遭つて來た……そんな服裝では到庭駄目だから一層確乎した仕度をして出直せ』といふ話に十二名は其の場より引き返し更に嚴重なる用意を整へたる上に出發せるものにて此の時に至り九名の遭難者は熊野山までは登山隊一行と共に進み來たりたるが其後が不明なりといふ前の話と全然異れる報道が二中教諭の口よりとして傳へらるゝに至りしものゝ如し廿四日は高温附近さへ冷雨頻りにて北風寒く吹きたれば山巓の大吹雪なりしといふまでもなく十二名の搜索隊すら三派に別れ非常なる苦闘を續けたる後高湯に狀況を報ずる爲め歸るべき手筈になり居たる齋藤駒吉庄子市次郎外三名の五人組も激風の爲め歸へられず横道に乘り積雪尺餘を踏み分けつ新關温泉より三十丁餘上りたる峨々温泉に廿四日の夕刻漸く辿り着き又一方伊藤重次郎齋藤松治岡崎嘉六の三名一組は青根に下り他四名一組は中川村長野に下りたる有樣なる事は直接其の衝に當りたる人々の記者に語れる所なり一方警察當局の活動狀況知何といふに廿三日當夜は前記の始末にて過ぎ翌廿四日午前七時三十分頃上の山警察署の召集に應じて驅け附けたる高湯駐在所巡査富樫岩治氏の報告に依り一大事として上の山警察署の大活動となりたるものゝ如く以上の經過に就き事件勃發以來搜索に努力せる高湯小學校田口三郎氏及び警察官等首め地方民は等しく廿三日當日の搜索の手薄なりしを殘念がり居れると同時に何故に高湯滯在中の教諭及び指揮者が落伍者搜索に加はるの親切なる態度に出でざりしかを非難し居れり。

（特派員富田慶重）（七、一〇、二五—廿一、河北新聞摘記）

會報

第十二回大會豫告

來る五月四日東京市赤坂區溜池町三會堂に於て開催の豫定なり、本年は特に山岳地圖の展覽會開催すべく、尙ほ講演は主として地圖に關したる學說實際の講演を乞ふ筈にて目下交渉中に屬せり、講演題目及び講演者等は決定の上會員各位に御通知すべく、特に新舊和漢洋に係らず地圖及び右に關聯せる圖書等御秘藏の諸氏の出陳あらん事を希望して止ず。

午　前　十　時　山岳地圖展覽會開場
午後五時三十分　講　演　會　開　始

會場は外濠線電車葵橋停留所より靈南坂方面へ約一町の距離にあり、入場の諸君は相當服裝の上名刺御携帶を希望す。

會場には上草履の設備あれど靴又は草履を御便利とす。

第三回小集會

大正八年二月二日午後一時より所定の會場に於て近藤幹事司會者として開催左記講演ありたり。

立山の登路について　冠　松次郎氏
生駒綱索鐵道につき　高野　鷹藏氏
雁の腹すり　武田　久吉氏

席上新着外國雜誌圖書の展覽あり午後四時半散會せり、來會會員左記の如し。

冠松次郎、戸澤英一、酒井忠一、別宮貞俊、中山益太郎、若林祐次郎、磯貝藤太郎、堀龜雄、高畑棟材、木暮理太郎、大西喜作、織田信大、星野光之助、高野鷹藏、近藤藤吉、武田久吉、關口泰、石谷讓二、田中薫、矢田城太郎、井染道

夫、宮本璋、沼井鐵太郎、米澤竹三郎、中澤眞二、內山忠助、茨木猪之吉、鳥居忠博、玉井敬泉。

會員外來會者を加へて四十餘名を算したり。

第廿回有志晩餐會

大正八年一月廿六日午後六時より東京市外田端自笑軒に於て開催左記の來會者ありたり。

松本善次、岡埜德之助、星野光之助、松宮三郎、丸山晩霞、服部保、六鶴保、木村鑛吉、飯塚篤之助、冠松次郎、廣瀨光風、鈴木益三、高野鷹藏。

會員通信

△十月十二日（大正七年）夜九時四十分臺北發、臺中下車翌十三日埔里社に至り、十四日午前七時二十分同所發眉溪を經て十二時四十分霧社着、（眉溪迄臺車眉溪より霧社迄）十五日午前六時二十五分發濁水溪上流を下瞰しつゝ山の中腹を傳へる橫斷道路をゆく途中ホーゴー樓溫泉入浴、霧社より五里七千尺の邊アベマキの純林より松林に入り更に樅林となる、此邊能高（一一二〇〇）菁萊主、（一一二〇〇）千卓蕃（一〇八〇〇）の高峰を見る、午後五時能高駐在所着此日の里程八里八町、本日は菁萊主と能高の鞍部を越へ途中二泊十八日花蓮港着の豫定、中央山脈橫斷道路は警察の開墾、最急十五分一勾配道よく蕃害の虞なし、御來遊を待つ。

（臺灣南投廳能高駐在所海拔九千四百尺、關口泰）

△十月十六日午前六時十分能高駐在所を發し七時能高鞍部を越へしも此日雨花蓮港の海南投の平野を眺望することを得す、八時菁萊主南峯の麓池の端に達す南投花蓮港兩廳の界なり、之より一萬六百尺の邊を通り道漸く下る、霧に隱見する溪に樅の林相美し、十時四十分聯帶山（八、九〇〇尺）に達す。晝食、之より檜多し、一時十分朝日駐在所（七二五〇尺）に着泊、夜雷鳴大雨十七日天晴る、午前七時朝日を發し聯帶に戻り（三十四町）菁萊の眺を擅にす、菁萊溪をへだてゝ左より菁萊南峯の一角（一〇五〇〇尺）無名峯（一一〇七八尺）主山（一一六九五尺）北峯の一角（九二二四尺）を望み、東やゝ遠く太魯閣大山（一〇三六三尺）を望む、顧れば能高南峯（一一〇〇〇尺）樹間に見ゆ、景觀雄大なり、朝日に歸りしは十時、直に發し十一時菁萊溪を渉り再道は天長山に登る坂路急峻なり、一時より道下る、五時十分バトランに着泊。

十八日午前七時バトラン發、木瓜溪を下る、峽間眺多く景色よし、途赤壁の碧潭あり、十一時二十分銅門着、此處より臺車の便あり、初音に至り汽車にのり四時花蓮港に着す、之にて中央山脈橫斷の行終る。（花蓮港にて關口泰）

△日に秋らしう相なり申し候ところ貴殿には如何御消光遊ばされ候や御伺ひ申上げ候、山岳第十二年第二、三號九月五日落手御かげ樣にて故國の味ひにひたり申し候、在米ほゞ一ヶ年に及び紫の山の國戀しさ日に募り日本の消息狀態はなにより の樂しみに御座候、小生の寡聞北海道の山に接したるは今回をもつて始めとし少なからぬヒントを得申し候、いづれ熊の國アイヌの村なぞに旅情をなぐさめらるゝ日を期すべく候。

小生の學校に地質學の教授にてカアプ博士と云ふ非常なる日本好きな人あり、二十年程前ハアーバートにて川崎金二郎と云ふ人と同級なりし由にて種々話の折々山岳にて得たる日本の山岳地質寫眞なぞ話し聞かせしに、非常に喜こばれ毎回雜誌到着の節は一通り說明する事と相なり居り候。

當所は西部にアメリカ東海岸にて名高き Blue ridge. 有之候へども他ははてもなき森の平景今年の夏にはついぞ山の香に接し申さず候、ニューヨークには中々多數の山岳會員在留の樣子、山の話でも致したきものに候、小生は經濟學研究の爲め渡米致せしものに候へども、語學不充分の爲め日本人なき當大學にて尙一年は生活する心得に御座候。（大正七年九月八日　University of N. C. Chapel Hill, N. C, U. S. A. 內藤安城）

△英彥山（海拔三九五九）を福岡縣より大分縣に越え耶馬溪に參りました丁度紅葉時で景色がよろしくあります汽車の發車間際で亂筆失禮致しました。（大正七年十一月二日耶馬溪にて岸本七郎）

△昨日元旦を當地にて迎へ湖水見物と神社參詣に出かけ候山上は雪多く湖は大部分氷結し居り面白き氷の音樂を聞き候奧上州越後境連山の雪景實に見事に御座候仙ノ倉、萬太郎、谷川岳などゝ覺しき山々は孰れも凄じき銀白の光を見せ居り候又武尊山も雪非常に多く頂上のサース狀の火口(?)は面白く存じ候其他利根水源方面に多數の雪山を望み申候本日はこれより水澤觀音參詣に出かけるつもりに御座候。（大正八年一月二日伊香保にて辻本滿丸）

△昨日の暴風雨の後、今朝見れば西一帶の連山眞白に初雪の降り渡りてあるに驚かされ候、紅葉を帶べる蓮華の嶺に新らしき雪の色を仰ぎて流石にうれしき心地のせられ候。

（大正七年九月廿五日朝大町にて百瀨眞太郎）

△山より物申候、十月廿六日（大正七年）午後小諸に着致候廿七日は雨にて登山中止、廿八日愈淺間に發足致候天氣晴朗一點の雲なく廿五日、廿七日に降りし雪が前掛山に白くかゝりあたかも手まれくが如く相見え候。

蛇堀澤の底よりは常に八ヶ岳の全影を見かへりつゝミヅナラの落葉にわらぢの音なく湯平の氣象觀測所にたどりつき申候、こゝは大森博士直轄の地にて地震計をおき且氣象觀測のため長野測候所と共同の觀測をなされ居候、前掛山は積雪五寸既に堅くなりたるため足塲なく兎角雪との接觸面が時間に於てわらぢよりも寧ろ尻に多しと云ふ程度にて漸く西より北へとヘツリ申候、淺間の本峯に至ってはさすがに雪淡くラバー多く火口壁に輕く到着致候期待の外風なく溫暖、夏と異らずガイドもかゝる事は（今頃の時候としては）絕無と云つてよき位なりと申居候、周圍一とまはり半して前掛山の南より劍峯に出で前掛と牙山との間の凹地より觀測所にもどり一憩の後下山致候。

下り↑		上り↓
後 7,30 着	小諸驛前	前7,30 發
後 6,40	淺間山登山起點 標柱	
後 6,20	七尋石	↓
後 5,45 發 後 5,25 着	淺間館	前 9,30 着 前10,00 發
後 5,00	一ノ華表	前10,25
後 4,50	二ノ華表	前10,40
後 4,30 發 後 4,00 着	觀測所	前11,15 着 正午 發
後 2,30 發	頂上	後 1,30 着
↑ 頂上一周半		↓

淺間山麓にて　（中原繁之助）

△七月十四日より廿三日迄日置繁雄君と五色鉱から白馬に廻り申候案内は林藏に候、雪は至る所澤山に候ひき、平小屋の籠渡未無之人夫が引返へし相に見へし爲め苦肉の策を以て日置君が袋を背負つて杖を持つた儘先泳ぎ渡り、吾輩も續いて泳ぎ切つて綱を渡したる等大分茶目を演じ申候、大澤で雨の爲め三泊したので佐良峠迄一日で漕付けたと思ふと又三晩降られ申候、別山の炎天で時計を抛り出した儘水浴をやつてると非常な酷熱を受けた爲めか時計が止つてしまつたには閉口致候、二十一日別山から屋根傳ひに鉱の麓のザラに取付き二時間弱で山稜を登攀して頂上に到り長次郎谷を下降致候、當日天氣は無類の好天氣に候ひき、長逗留の爲め日程を急ぎ別山から鉱を上下して大ノヶ迄一日、次に祖母谷を經て唐松中腹迄一日、白馬三山を經て四屋迄一日、直に自働車で大町迄引上げ申候、雷鳥は屢見受け申候も常に霧に妨げられて昨年の如き寫眞は遂に獲られず遺憾に存候。（松本にて　伊藤英三郎）

星忠芳君逝く

強健の人が餘計罹ると云はれた惡性流行感冒の爲に會員星忠芳君は昨年十月大阪市に於て逝去せられた。君は平素極めて健康な元氣の良い人で、まだ三十四歳の前途多望なる壯年であつた。

星君は大阪市の人で、明治三十九年、大阪高等工業學校を卒校せられてから、直に工業試驗所（東京）に奉職せられ、二年許り私と共に仕事をせられた。それから母校に教鞭を執り、次でアスファルトの工場の技師となられ、最後には自身大阪市附近に於て防水布の工場を經營せられた。歐洲戰亂以後、我邦の化學工業は異常の發展を見た折柄であるから、君の事業も着々成功に向はれつゝあつた事と思ふ。山岳會員としての星君は餘り多數の登山を行はれた方でないが、私は君と共に紀念

すべき登山旅行を二回試みた。一度は明治四十年の夏で甲州鳳凰山、乘鞍岳及び槍ヶ岳に登つた。其頃は山の樣子がまだ良く分つて居なかつた爲、乘鞍では山上の小屋の附近まで登つて居ながら、それが見當らず降り頻る雨を油紙一枚被つて、防ぎつゝ不眠で徹夜した滑稽をやつた。槍ヶ岳でも畧同樣な目に逢つた。次は明治四十四年の七月で甲斐駒山脈の縱斷と仙丈岳に登つた。此時星君は鋸岳の第二最高峰に記錄ある最初の登山を行はれた。其詳細は本誌第六年第三號所載の同君の筆に成つた記文に述べられてある。

時日の餘裕があつたなら、君は其後とても必ず壯快なる登山を行はれたに違ひない。私としては古い旅行を語り合ふべき舊友を失つた。樂しき追憶に悲しむべき陰影の投げられたことを殘念に思ふ。

（辻本滿丸）

木本光三郎氏逝く

人の死は悲しいもの、ましてや知人朋友の死は淋しさの極である。

木本君の葬儀は去る二月廿三日春未だ堅き奈良の古都に遺兒の手に取り行はれた、木本君は年四十二、日露戰役に出征して陸軍大尉の肩書のある人であつた、體軀肥大、强健なのは自慢の一つであつた、山行きは餘りせずして終つたが、前年吉野群峰に同志を集めて登り、歸來「吉野群峰」なる一書を編して公にしたことは本誌にも載せた如くである。

氏は奈良の富豪であつた、氏の職は總ての公職に事業界に關係しないものはなかつた、從つて多忙なる事は山行きを決行する機會が少なかつたのであらう、年來共に山行きを約して果さず二月中旬より流行性感冒の侵す所となり、肺炎となり尿毒性を併發して遂に逝つたのである。

一時は全家庭親子下女迄八人の病者を數へ、遂に一子と一姉を失ひ最後に氏が倒れたのである、君の令閨令息は亦病の爲め君の死に會ひ得なかつたのである、人生の悲慘事である。

友人の死を思ふと哀れに悲しいものである。

（八、三、四、高野廉藏）

原稿蒐集所

本誌の爲め同好諸君より寄せらるゝ原稿は間々本會事務所宛送附せらるれど、成るべくは左記原稿蒐集所宛御發送ありたし。

東京市本郷區駒込蓬萊町三一　木暮理太郎

訂正

會務報告

大正八年二月二日　午後一時より東京保々近藤合名會社樓上に近藤幹事司會者として小集會開催。

同　二月七日　午後七時三十分より本會事務所に於て辻村幹事司會者として第三回外人會員の會合開催。（詳細本號英文欄にあり）

同　二月八日　午後二時より東京武田幹事邸に於て幹事會開催、左記事項につき協議せり。

一、規則改正の件。幹事改選の件。名譽會員推薦の件。

（出席者）武田、高頭、高野、梅澤、辻村。

同　三月一日　午後二時より東京武田幹事邸に於て幹事會開催、左記事項を協議す。

一、「山岳」第十三年三號編輯の件。規則改正に關する細目の件。第十二回大會の件。

（出席者）近藤、木暮、高野、高頭、武田、梅澤。

寄贈圖書

みづゑ　春鳥會

地質學雜誌	東京地質學會
帝國圖書館大正六年度年報摘要	帝國圖書館
三交會誌	三交會
史蹟名勝天然紀念物	史蹟名勝天然紀念物保存協會
歷史地理	歷史地理學會
東京教育博物館一覽	東京教育博物館
三角水準測量成果摘要第五卷、第六卷、第七卷	陸地測量部
信濃教育	河野齡藏
地學雜誌	東京地學協會
地質調査所報告	地質調査所
ツーリスト	Japan Tourist Bureau
藏王山嶺師弟の最後	飯柴永吉

（寄贈外國文圖書は英文欄に掲載せり）

校正者　木暮理太郎　高野鷹藏

本會規則拔萃

第二條　本會は山岳及び山岳に關する一切を研究するを以て目的とす

第三條　本會は第二條の主旨に基き毎年三回機關雜誌「山岳」を發行す又時宜により別に臨時又は定時の出版物を發刊することあるべし

第四條　本會は毎年一回大會を開く尚ほ本會役員に於て必要と認めたる時は臨時集會を開くことあるべし

第五條　本會は會長を戴かず幹事若干名を置き一切の會務を處理す

第九條　本會會員を分ちて正會員、特別會員及び名譽會員とす、正會員は本會の主旨に從ひ山岳の研究を爲し、特別會員は尚特に本會の事業を贊成し次條に定むる會費を納むるものとす、名譽會員は本會役員之を推薦す

第十條　正會員は會費年金貳圓とし特別會員は年金參圓以上となし、何れも前納するものとす

第十一條　本會々員たらんと欲する者は會員三名の紹介を以て住所姓名年齢及び會員の區別を詳記したる申込書を添へ事務所に送附すべし但し會員三名の紹介者中一名は必ず本會幹事たる事を要す

第十三條　入會許可の通知に接したる者は直に入會金貳圓及第十條所定の會費を拂ひ込まるべし

幹事

(編輯)	城數馬
(編輯)	木暮理太郎
(編輯)	小島久太
(圖書 Foreign secretary)	近藤茂吉
(編輯)	中村清太郎
(會計)	三枝守博
(庶務)	高野鷹藏
(編輯)	高頭仁兵衛
(編輯)	武田久吉
(記錄)	辻本滿丸
(編輯)	辻村伊助
(編輯)	梅澤親光
	山川默

大正八年四月十五日印刷
大正八年四月十七日發行

【定價九拾錢】

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島那深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話特長本局百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

ABSENT MEMBERS.

	Admitted.
Mr. Felix Dinsdale	June 1914
Mr. O. F. Mocock	Oct. 1917
Mr. W. A. Tomlinson	Nov. 1917

JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the Japanese part of this number are :—

Enasan in Autumn by N. Saionji.
The Scottish Highlands by I. A. Tsujimura.
Ascent of Tateyama from Eastern Side by M. Kamuri..
Ascent of Dainichidake by M. Kamuri.
Sōtomedake and Okudainichidake by M. Kamuri.
Alpine Plants Notes by H. Takeda.
List of the Guides in Omachi, Koshin Yanagisawa, and for the Shinomura and other Alps.
An Accident on the Zaodake.

THE ILLUSTRATIONS IN THE JAPANESE PART.

FACE PAGE.

(156)	The Lochnagar, looking toward the East.	phot. by.	I. A. Tsujimura.
(164)	The Cairn on the Lochnagar.	,,	,,
(172)	The Circus of the Lochnagar.	,,	,,
(180)	The Pool of Dee.	,,	,,
(188)	A Part of the Cairngorm Mountain.	,,	,,
(196)	Near the Callander Craig.	,,	,,
(204)	Ben Ledi, from Callander.	,,	,,

LIST OF THE CLUB MEMBERS.

(FOREIGN MEMBERS ONLY).

Honorary Member.	Elected.	
The Rev. Waletr Weston	March 1910	The Alpine Club, 23 Saville Row, London, W., England.

	Admitted.		
Mr. B. Abraham	July	1918	No. 149 Sanchome, Yamamotodori, Kobe.
Mr. F. W. Allcock	July	1912	Messrs. Strachan & Co., No. 71 Yamashitacho, Yokohama.
Mrs. G. E. Benham	June	1910	c/o Mrs. G. King, No. 1 King Road, Halstead, Essex, England.
Mr. Eric N. de Bunsen	Sept.	1913	The British Consulate, Yokohama.
Mr. H. Carew	May	1909	c/o Sale & Frazer, Ltd., Yagesucho, Kojimachiku, Tokyo.
Mr. William Cliff	Nov.	1918	No. 80 Kyomachi, Kobe.
Mr. H. E. Daunt, F.R.G.S.	Sept.	1915	The Vacuum Oil Co. 38-A Nakamachi, Kobe.
The Rev. W. H. Elwin	Jan.	1918	No. 7 Sasugayacho, Koishikawaku, Tokyo.
Mr. J. G. S. Gausden	Feb.	1918	The Vacuum Oil Co., Tokyo Kaijio Bldg. Eirakucho, Tokyo.
M. A. G. Hearn	July	1913	c/o Venus Life Ass. Co. 127 Szechien Road, Shanghai.
Mr. Jacob Hunziker	Jan.	1918	No. 39 Tomizakacho, Koishikawaku, Tokyo.
Mr. N. Libeaud	Nov.	1918	No. 46 Harimachi, Kobe.
The Rev. John F. L. Macrae	June	1916	Kiu Mazan, Keishodo, Chosen.
Mrs. N. M. Macrae	July	1913	" " " "
Mr. H. W. Malcolm	Nov.	1918	No. 26-B Naniwamachi, Kobe.
Mr. E. Mendelson	July	1906	The Crown Cork Co. No. 259 Yamasnitacho, Yokohama.
Mr. Herbert Middleton	Nov.	1918	The Office of Shanghai Nanking Railway, Shanghai, China.
Mr. George Moilliet	Nov.	1917	c/o Imperial Hotel, Tokyo.
Mr. Lionel Nuzum	Nov.	1918	No. 14 Mayemachi, Kobe.
Mr. Paul Nipkow	Nov.	1918	No. 174 Yamashitacho, Yokohama.
Dr. Paravicini	Sept.	1916	No. 64 Yamate, Yokohama.
Mr. O. Manchester Poole, F.R.G.S.	Nov.	1918	No. 60 Yamashitacho, Yokohama.
Mr. Martin Schellenberg	Feb.	1917	No. 174 Yamashitacho, Yokohama.
Mr. A. Schulthess	Nov.	1918	No. 246-A Yamashitacho, Yokohama.
Mr. F. N. Shea	Sept.	1915	The American Trading Co., No. 99 Kitamachi, Kobe.
Mr. H. Treichler	Nov.	1918	No. 90-A, Yamashitacho, Yokohama.
The Rt. Rev. Bishop Tucker	Feb.	1910	Shimotachiuri-agaru, Karasumarudori, Kyoto.
The Rev. W. H. M. Walton	Jan.	1918	No. 324 Hiratsukamachi, Hiroshima.
Mr. J. P. Warren	Nov.	1918	No. 82 Kyomachi, Kobe.
Mrs. Frances E. Weston	Oct.	1912	No. 79, Melbury Gardens, Wimbledon, London, S.W. 19, England.
Mr. Oswald White	July	1915	British Consulate, Kawaguchi, Osaka.

If you hear at any time of any member of the J.A.C. coming to England, be sure and let them know how pleased I should be to make their acquaintance.

CLUB PROCEEDINGS.

THE foreign members of the Club who are resident in Yokohama and Tokio having on several occasions been most hospitably entertained at lantern slide lectures, at the premises so kindly lent for Club purposes by Mr. Z. Takano a return entertainment was arranged on Sunday the 8th December which took the form of a walk to Kamakura and lunch at the Kamakura Hotel, where the Japanese members were entertained as the guests of the foreign members.

The start was made from Sakuragi-cho at 9 o'clock motor cars being taken down the Seki Valley to close to the Mine temple from where the walk over the hills to Kamakura was taken. The weather fortunately was perfect and the walk which was new to most of the Japanese members and also to at least three of the foreign members who have been resident in Yokohama for over 25 years, was enjoyed by all. Kamakura was reached at 12.40 o'clock and after lunch the members occupied themselves until train time looking over some very interesting Alpine Journals which had been brought along by Mr. Kondo.

During lunch it was proposed and decided to if possible hold monthly week end walks in the Hakone Mountains or other suitable places adjacent to Yokohama and Tokio and Messrs. Takano, Kondo, Gausden and Moilliet were appointed a committee to arrange for these.

Those present on Sunday's outing were:—Dr. Paravicini, Messrs. Moilliet, Schellenberg, Gausden, Smith, Averill, Treichler, Nipkow, Mendelson, Allcock and Poole; S. Kondo, T. Z. Takano, I. Tsujimura, C. Umezawa, T. Toriyama, E. Gah, S. Matsumiya and T. Rokuu.

The third meeting of the foreign members of the Club was held at the premises of the Club at No. 64 Honcho Shichome, Yokohama, on Friday February 7th, at 7.30 p.m. Mr. I. Tsujimura presiding.

Mr. O. M. Poole, F.R.G.S. read a Paper entitled "Rambles in Japan" which was illustrated by excellent photographic slides.

Dr. Paravicini gave a lecture on the subject of "First Medical Aid in Mountaineering," dealing in every possible emergency case in mountain climbing.

Mr. Tsujimura then proposed a vote of thanks to the speakers, which was carried out amid applause.

The next meeting will be held on Friday, June 6th, at the same premises at 8.00 p.m.

their own little triumphs. And we hope there will be many who will find in the book an incentive to try their hand for the first time. Mr. Weston has done good service in writing this book.—O.W.

NEWS FROM MEMBERS.

London, January 3rd, 1919.

MY first letter abroad this year shall be to your own goodself and on the subject which is of such special interest to me—namely The Japanese Alpine Club.

I send by this mail a copy of a most interesting book on "Mountaineering" in the 'Badminton' series, for the Library of the Nippon Sangaku Kwai.

It is the most authoritative volume written on the subject, and is the results of the efforts of most famous climbers and explorers in the Alps and other regions.

Please hand it to the officers of the Club with my compliments and best wishes for its prosperity and progress.

You will be interested to learn that I have just been elected a member of the Committee of the Alpine Club, an honour which I appreciate all the more because I feel it is partly in recognition of my travels in the Japanese Alps and of my share in assisting the formation of the J. A. C.

I also send you a note on the origin of the title of "The Japanese Alps" which I thought would more fittingly be printed in the pages of the 'Nippon Sangaku' than in a foreign book printed in England.

This explanation of the title may safely be regarded as authoritative, since it is the result of close investigation and enquiry on my own part in the company of the two earliest writers and travellers of distinction in the Japanese Alpine regions.

I hope shortly to send you the account of which I spoke in one of my letters dealing with the last climbs made by Mrs. Weston and myself on the Alps of Switzerland. Please use it as you think best, as to translation etc. in the Sangaku.

With kindest greetings to yourself and to all my J.A.C. friends,

I am, Yours sincerely,

WALTER WESTON.

P.S.—Since writing it I have finished the note on "The Japanese Alps" which I hope you will find interesting and useful for 'Sangaku.'

I have also sent off by an earlier mail the copy of "Mountaineering" in the Badminton series and hope it will arrive safely. Although it was published more than 20 years ago, it is still the best book of the kind in existence.

"almost maternal solicitude, retired to spend the night by the camp "fire with the two goriki (porters) from Shimajima." And straightway we are transported in memory to many similar nights that we have spent. No one can read this book, then, without a desire to throw aside everything and take to the hills.

The contents of the book may be divided into two parts—one dealing with points of general interest in connection with mountaineering in Japan, the legendary doings of the original Buddhist pioneers, annals of Fuji San, sport and miscellaneous matters, the other with Mr. Weston's actual climbing experiences. Though the general subjects are more or less familiar, Mr. Weston writes of them in a crisp manner with refreshing comments interspersed and while a keen lover of Japan he does not hesitate to sound a note of disapproval where it seems warranted. He refers, for instance, to a proneness to worship merely that which is suggestive of human efficiency and of the supremacy of material power. The author speaks throughout with affection of his guides and goriki. "There "is something in the open and communistic character of the daily life "of these people.....that tends to make them natural and consider-"ate, and that develops self-restraint, resourcefulness and patience."

To turn to Mr. Weston's account of his own mountaineering experiences, the tale is taken up again where it was left off twenty years ago in the "Japanese Alps." We are re-introduced to old favourites in a new guise. There are vivid accounts of new ascents of Oku Hodaka and of Yarigatake by its northern face. To quote from either is to do scant justice to the original as the passages can be fully appreciated only in their entirety. Mr. Weston has the art of writing vividly and picturesquely and as we read the picture unfolds before our eyes. "We had been climbing hard continuously "for nearly six hours; our clothes had long been soaked through "and through, fingers were numbed, and our persons chilled to the "very bone.....(quite in extenso p. 160 to p. 161).....and "then "he stood aside and invited me to step on to the shattered crag that "forms the summit of the finest granite peak in the whole of the "Japanese Alps."

Then again the author takes us once more to the giants of the Southern Alps—Ho-wo-zan, the scene of his most famous climb when he scaled the twin pillars at the top unaided, Shirane, Senjo and Komagatake—and the extreme northern peaks—Shirouma, Tateyama.....we should like to quote but space forbids. The names "are charmed. As Macaulay said in a different connection, "They "are words of enchantment. No sooner are they produced, than the "past is present and the distant near." Those who have had the fortune to climb in the Japanese Alps will feel a fresh lease of life in reading the pages of Mr. Weston's books, and will live over again

REVIEWS.

"THE PLAYGROUND OF THE FAR EAST."

THE numerous friends of the Rev. Walter Weston and the still wider circle of those who know him by repute and through the pages of his earlier book "The Japanese Alps" will welcome the appearance of another volume from his pen—"The Playground of the Far East."

We all owe a special debt to Mr. Weston. Though not the only foreigner to scale the peaks of the Japanese Alps in the days when they were all but unknown to the outside world, no one threw himself so whole-heartedly into the task not only of exploring their hidden beauties but of introducing them to the public as Mr. Weston. His keenness was instrumental in arousing Japanese and foreigners alike to a new world that lay at their doors. If some of the climbs that were so difficult in those days are fairly plain sailing now, we have to remember the debt we owe to the pioneers who first blazed the trail. Many obstacles, now happily removed, stood in the path of the venturesome climber—lack of guides, local superstition, ignorance of routes and, generally, want of facilities. Not that the spice of adventure, the lure of the unknown, have disappeared or are likely to disappear. The conquest of the outstanding giants Yari, Tateyama, Shirane and many another name dear to the heart of the climber in Japan has been but the opening of the door to a host of central peaks that are now being traversed in all directions year by year by the constantly growing band of climbers. It was the fore-runners, however, who gave us the key and among them the place of honour must be accorded to Mr. Weston.

"The Playground of the Far East" does not claim to be a Guide to the Japanese Alps. That has yet to be written. In the "Japanese Alps" the author first sought to attract attention to these splendid but unfamiliar scenes and the book before us represents "a further attempt to repeat the call." This object it will more than fulfil. Mr. Weston has the gift of a flowing style and he writes with an enthusiasm that carries the reader with him. After a perusal of these glowing pages, one feels tempted to use the words of the Roman poet in a new sense "Qui amavit bis hodie amet: qui nunquam amavit cras amabit." Read this little passage, "As night fell we pitched our camp and ate our supper by a cheer-"ful fire of pine-logs, while the clear crescent moon arose from "beyond Chogatake ("The Butterfly Peak") and touched with "silver radiance the spires and battlements of Hodaka, towering "imposingly behind us. When bedtime came, Seizo slung my "hammock between two tall pines, and after settling me in with

The Northern Cordilleran.	Vancouver, 1913.
The Summer Programme and Reports of the British Columbia Mountg. Club.	,, 1918.
The White Mountain National Forest.	Washington, 1917.
The Seacoast National Park.	,, 1917.
The Geologic Story of the Rocky Mountain.	,, 1917.
The National Park Colorado.	
The National Parks Portfolios and other reports and pamphlets, published by the Departments of the Interior National Park Service	,, 1917.
Guide Books of the Long Trail.	Burlington, 1917.
The Klahhane Annual.	Port Angeles, 1918.
The Mountaineer, Vol. 1 Nos. 1-4.	Seattle, 1907-8.
The Mountaineer, Vol. 8.	,, 1915.
,, ,, Vol. 10.	,, 1917.
The Year Book of the Prairie Club.	Chicago, 1917.
,, ,, ,, ,,	,, 1918.
The Bulletins ,, ,, Nos. 80 & 81.	,, 1918.
The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 15, No. 86.	Edinburgh, 1918.
Svenska Turistförenigens orsskrift.	Stockholm, 1918.
The Annual of the Mountain Club of South Africa, No. 21.	Cape Town, 1918.

THE FOLLOWING BOOKS HAVE BEEN PRESENTED TO THE CLUB LIBRARY:—

"INAKA" Vol. No. 9.	By H. E. Daunt, Esq.
Two Summers in the Ice Wilds of Karakoram.	By S. Kondo, Esq.
Italian Mountain Geography, Part I and II. C. S. Riche Preller, London, 1918.	By S. Kondo, Esq.
The Playground of the Far East, The Rev. Walter Weston, London, 1918.	By the Author.
Mountaineering, C. T. Dent, London, 1892.	By the Rev. Walter Weston.

Alps" in order to distinguish them from the ranges of Hida, Shinshu, etc. which I now, for the sake of clearness, called "The Northern Japanese Alps." These terms I used as the titles of the second and third papers which I read before the Royal Geographical Society and elsewhere, in 1905 and 1915 respectively.

I should like to point out that the variation of the name sometimes used by Japanese writers in English—"The Japan Alps"—is neither so euphonious nor so much in accordance with the usage of correct English.

In view of the kindly interest shown in my recently published second book on my travels in the fascinating Alpine regions of Japan, I should like to explain the origin of its title "The Playground of the Far East." Many years ago, the late Sir Leslie Stephen, a famous men of letters, and at one time President of the Alpine Club, published a delightful volume on his climbs in the Alps, under the name of "The Playground of Europe." When I was searching for a suitable title for my book dealing with my own later experiences of a similar kind, it seemed to me that I could not do better than adopt a term, originally used to describe the Alps of Switzerland, to designate the beautiful mountains of Japan, where so many of the active younger generation of educated Japanese are year by year finding so much helpful and invigorating recreation both for body and mind. There is no region which so deserves the title in the whole of eastern Asia, of "The Playground of the Far East" as that now familiar to us as "The Japanese Alps." I was greatly interested to hear that some time ago one of the most important Japanese steamship lines named its newly launched vessel "The Alps Maru."

CLUB LIBRARY.

THE FOLLOWING PUBLICATIONS AND BOOKS HAVE BEEN ADDED TO THE CLUB LIBRARY SINCE NOVEMBER 1918:—

Bulletins of the Associated Mountaineering Clubs of North America.	New York, 1917 and 1918.
Selected List of Books on Mountaineering.	,, ,, 1916.
Alpina Americana, Nos. 1 to 3.	,, ,,
The Canadian Alpine Journal, Vol. No. 9.	Banff, 1918.
Bulletins of the American Game Protective Association, Vol. 7, No. 3.	New York, 1918.

OF THE ORIGIN OF THE TERM "THE JAPANESE ALPS."

BY

THE REV. WALTER WESTON.

THE origin of the term "The Japanese Alps" has long been a subject of interest and enquiry among Japanese mountaineers.

I have had an opportunity recently, of personally discussing the question with two friends, Sir Ernest Satow, formerly British Minister in Tokyo, and Professor Gowland, formerly of the Imperial Japanese Mint in Osaka, who were the earliest European writers on the high mountain regions of Alpine Japan. I am therefore at last able to place on record the most authoritative information obtainable on the subject, for the benefit of the readers of the Sangaku and others who may be interested.

In the first edition of Murray's "Hand book for Japan" 1881, of which the principal editor was Sir (then Mr.) Ernest Satow, a short account was given by Prof. Gowland, of some of the higher peaks of the Hida-Shinshu range. In this it was suggested that this range "might perhaps be termed the Japanese Alps."

When I first pointed this out to Prof. Gowland recently, he said he did not recollect having originated the expression "Japanese Alps." But when I was visiting Sir Ernest Satow subsequently, and referred to the subject he stated that he felt quite sure the words were originally first so used by Professor Gowland.

In the 2nd Edition (1884) the term was also introduced (p. 117) in the description of the view from the summit of Fuji-san, as follows :—"The Japanese Alps, the great range that divides far-off Hida from Shinshu."

These mountain ranges, however, were seldom visited by European travellers, and for many years the title was never really used. After my own first expedition to them in 1891, (see "Mountaineering in the Japanese Alps") I began to write detailed accounts of my travels for the "Japan Mail" and other English newspapers in which I adopted the title. On my return to England in 1895, I used it in my lectures at the Alpine Club, the Royal Geographical Society, and many other similar learned institutions. The result was that the term, which seemed so suitable, now became generally accepted, and gradually established itself in use.

I came back to Japan a second time in 1902, with Mrs. Weston, and then began to explore in the mountains of Shinshu and Koshu, to which I gave the name "The Southern Japanese

marksman, and has an excellent knowledge of the Jonen range and knows Gaki and the Karasawa by heart. Of these three crack mountaineers Kamonji was the eldest, and they were all well acquainted with each other.

Whilst on the mountains he went slowly but steadily with little effort very seldom taking a rest as others are apt to do. Probably this superiority was a great deal due to his never smoking. Kamonji was a very expert rock climber, and only the previous day had taken a Japanese to the top of Mae Hodaka from the Myojin-ike. It is said of him :—" Given a stick there is no bad place where Kamonji cannot stand on." When the snows began to thaw he was always out with other men engaged on the work of shooting timber down the Adzusagawa, and other rivers. On these occasions he has been known to stand on sharp pointed rocks and boulders in the middle of the stream in order to shift logs blocking up the water-course, a performance which it is said other woodmen dare not do.

Kamonji must have been impervious to cold as he has been known to sleep without covering by the side of a camp fire when others were shivering. He was always very straightforward in his dealings, and his word was as good as his bond.

Early in August 1917 Kamonji took a party of climbers from Hodakayama to Yeboshidake coming out at Omachi. It is said that he contracted on this trip the illness from which he died at Shima-shima on Oct. 27th of that year. The doctors who attended him diagnosed his case as jaundice, and Dr. Saito of Matsumoto is reported to be of the opinion that Kamonji's trouble was brought about by the subsidence of the liver due to carrying heavy loads on his back for many years.

Kamonji was one of the old guard. Short in stature he possessed extraordinary physical powers. With a remarkably dogged and determined character he was absolutely in the very front rank of Japanese mountaineers, in fact a pioneer of pioneers who have developed the craft of mountaineering to the present pitch of excellence in which it finds itself at the present time. Good guides it has been truly said are born and not made. Kamonji had all the good qualities of a first class guide being staunch and true, courteous and good-tempered, with consideration for the feelings of others, and moreover very fertile in resource with a quickness of perception very highly developed. His keen love for the glorious peaks and Alpine valleys where he lived was extraordinary ; and his kindly face, with that friendly look in his honest eyes which there is no mistaking, will be missed for many a long day round Kamikochi Onsen.

---

hut. There were two large trays made of pieces of split bamboo one above the other hanging over the fire place, and there must have been something like fifty to sixty trout on them and all well smoked. The hut had no chimney and no windows, so the roof and the rafters presented a smoke-blackened appearance as if they had just been covered with a fresh coat of tar. In the side opposite the door were a couple of wooden bunks like you see in the forecastle of a boat. Hanging to wooden pegs round the walls were the old man's Browning repeating rifle, several pairs of snow shoes and some snow boots, a large collection of *waraji*, a couple of straw rain coats, some fishing nets and a trout spear. Kamonji's home in the mountains was certainly well worth going to see. We ate the trout *à la Americain* like corn off a cob, or in other words off the bamboo skewers, and most delicious they proved to be.

Kamonji's father was the second son of Arima Matashichi, and he himself was born at Aza Miyogahira, Azumi-mura, Nagano-ken. When he was twelve years of age he accompanied his father to Kamikochi, who worked as a cook for a camp of seven woodcutters, and he himself worked as a woodman till he was fourteen. From those early days he earned his living by hunting and fishing. At the age of 24 he was adopted into the family of Kamijo Magoshiro at Shimashima and was then known as Kamijo Kamonji. He then built his shooting box by the side of the Myojin-ike. It was about the year 1880 that he for the first time in his life became acquainted with foreigners and *Yedokko*. At that time no tracks over the Hida mountains were in existence, and Kamonji was the only guide in the vicinity of Hodakayama. If he had kept a game book it would have made interesting reading as many bears, wild boars, deer, and even monkeys fell to his gun. His sphere of activity as a professional mountain guide covered a very large area, including all the well-known peaks round Hodaka and Yari from Norikura and Kasadake in the west to the Tateyama range in the north. He also knew and was particularly familiar with the valleys traversed by the Kurobegawa, the Takasegawa and the Adzusagawa.

He figured as one of the three so-called *genro* or veteran guides of the Northern Japanese Alps, and as stated above was known as the Lord of Hotaka. The other two are Toyama Shinayemon, the Lord of the Kurobegawa, and Yokozawa Ruizo, the Lord of Nakabusa. The former earned his living as a professional fisherman on the Kurobegawa, and although he possessed a thorough knowledge of the mountains in the neighbourhood of Tateyama he has never been known to accept a fee for services rendered as a guide. Owing to his advanced age—about seventy—he retired from the mountains in 1915 and opened a small tea-house at Ode about 1 ri from Omachi on the way to the Harinoki-toge. The latter is a fine

lar force to the ascent of "Ogaki." I can strongly recommend the ascent of Ogaki, and feel that in this formidable mountain any climber will find a "foeman worthy of his steel."

A CRACK WITH KAMONJI.

BY

"BLUE DRAGON-FLY."

WITH Otenjo's "scalp" in a rucksack which we had taken *en passant* from Nakabusa Onsen. it was in the latter part of July 1916 when we walked into Kamikochi by the beautiful valley of the Adzusagawa. We had also climbed Ariake-san, the Shinshu Fuji, and Tsubakuro-dake, the Swallow Peak and the Blue Dragon-fly for one made no strenuous objections to a lie off and a laze for a couple of days at that famous mountain hot spring at the foot of Yakeyama. The *onsen* hotel was very full of students and seismologists, artists and missionaries, so we were more than lucky in finding accommodation. The weather which had been gloriously fine for over five days showed signs of a marked change, and rain was predicted. However, no matter what the weather is like, a real "goat" cannot stop in a *yadoya* all day long. He must have fresh air and exercise. So on the morning of the 23rd we set off to have a "crack" as the Scotch say with Kamonji, one of the finest guides in the Japanese mountaineering world, and known therein as the Lord of Hotaka. A couple of heavy showers fell, and after crossing the river from the path to the Tokugo Hut, the stream being knee deep, we found the old man on the Myojin-ike just poling into the landing place on a small raft. The Myojin-ike is one of the most beautiful meres in the world. Nestling at the foot of the steep pine-clad slopes of Mae Hodaka its sides are surrounded by rocks many of them covered with bright green moss and some with small pine trees growing out of cracks and crevices, reminding one very much of the famous scene—one of the *san-kei*—between Shiogama and Matsushima. The reflection of the surrounding scenery on the face of the lake itself is magnificent, and a painting of the *coup d'œil* would make a gorgeous subject for the drop-scene of a theatre. In spite of his 71 years Kamonji's hair was thick and black and with a chamois skin cape over his shoulders he certainly did not look a day older than 50. He gave us a warm welcome and invited us to his shooting box, a typical mountain châlet, close by, in which he made his home for about nine or ten months in the year. He had caught three fine trout—*yamame*—and after cleaning them, broiled them over the charcoal fire in the middle of the floor of the

of the rocks flanking the Nakabusatake. We endeavoured to avoid this bad place by making a detour through the woods, but found these impenetrable. We were, therefore, forced to scramble down about 50 feet of wet, slippery, perpendicular rock, with a roaring mass of water within a few feet of us on our left, and directly below us a deep pool into which the cascade fell. Upon arriving at the foot of this steep rock wall, a ledge of about 2 feet in width was all we had to stand on, and a single 40 feet pine trunk about 18 inches wide was the only means we had of crossing the pool into which the roaring waters fell with a deafening thunder. Along this swaying, slippery log, green with moss and lichen, we scrambled in inky darkness. We finally all safely negotiated this bad bit, after which better time was made. The steep rock wall nearly opposite the ravine leading to Tsubakuro also presented some considerable difficulty in traversing. Very gingerly we negotiated the frowning bluff, hanging by our hands, none of the ledges being more than two or three inches in width, and this in darkness that could almost be felt with the river, at this spot about 20 feet deep, rushing like a millrace, and the foaming waters gleaming white in the gloom as they dashed over hidden boulders. The welcome lights of the Onsen showed up soon afterwards, and at 10.15 p.m. we returned, tired but happy, having conquered the formidable "Demon" Peak, the double journey occupying 14 h. and 40 m., the last 3 hours' work being done after nightfall.

So far as the writer is aware, no foreigner has ever reached the summit of Gaki, and on the following day the fact that the "Demon" Peak had been conquered caused quite a sensation amongst the guests at the Onsen.

In my opinion the best way to climb Ogaki is to camp on the evening of the first day at the foot of the ravine in which the Nakabusagawa has its source, allow the whole of the following day for the climb, and either return to the camp on the evening of the same day or go straight into Nakabusa. As already mentioned, there is no water on the mountain itself. It is a very stiff climb to compass within the limits of one day, and not to be recommended in any circumstances. On account of the inpenetrability of the forests clothing the lower slopes of this peak, and furthermore on account of the dangerous nature of the ridges, spears and final summit, to hasten would be suicidal on the part of the mountaineer.

The difficulties of Gaki will be fully realised by the mountaineer when it is borne in mind that although 7 hrs. and 45 m. were occupied in the ascent, almost the same time, viz. 6 h. 55 m. was necessary in descending the mountain and returning to Nakabusa, the round trip, as already mentioned, occupied 14 hrs. and 40 m. The old climber's axiom "make haste slowly" applies with particu-

below us to the S. a good view was obtained of the ridge we had traversed, its perpendicular slopes and razor-back arête clothed at rare intervals with dwarf pines. The many spears jutting from the crest line formed a magnificent spectacle, especially as they were gilded by the rays of the setting sun. On such occasions as these one realises how puny is the human atom when compared with the mighty work of nature in her mountain fastnesses. A feeling of helplessness, almost of fear, seized me as I gazed upon the gaunt pinnacles and gloomy ravines of the "Demon" Peak. Brief indeed is the finite human span when one realizes that such titanic rock masses as Gaki have endured through untold ages to the present day, and to all appearances will for aeons yet to come rise in stately grandeur above the tiny humans in the plains below.

At 3.35 p.m. we commenced to descend, after having taken a few photos and securing a souvenir piece of rock from the summit. Good progress was made over the ridges, but the No. 1 coolie had a narrow escape when descending the big smooth slab of granite already referred to. Being the last man on the rope, he elected to try his luck without its aid. The remaining coolie and the F. G., who had descended first, were waiting below on a narrow protuberance of rock ready to haul the rope in after the No. 1 coolie had reached the spot on which we stood. Suddenly I saw him slip, and slide helplessly down the face of the rock, each instant gathering momentum. By a mighty effort he tnrew himself on the rope and succeeded in grasping it, but he was a very scared *inakamono* indeed when he landed at our feet. His hands were also badly chafed and bleeding owing to his having grabbed the rope when practically falling into space. A few feet more and he would have dropped like a stone off the ridge on to the jagged pinnacles hundreds of feet below.

The shades of night were now falling fast, and we accelerated our pace as much as possible consistent with safety, and at about 7 p.m. reached the top of the precipitous ravine in which rises the Nakabusagawa. No time was wasted, and we descended that savage glen at a breakneck pace, every moment risking sprained ankles and such minor injuries. We occupied 1½ hours in climbing this ravine, but descended to the river in 35 minutes—this in almost pitch black darkness.

Our troubles were, however, by no means over. It was by this time quite dark, the moon not having risen, and we had about 2 *ri* of terrible rough going to negotiate down the torrent-riven ravine of the Nakabusagawa before reaching the Onsen.

We unfortunately had neglected to bring lanterns, so progress was necessarily slow.

Some of the bad spots, awkward enough to negotiate in daylight, were positively wicked in tbe darkness, especially the descent

in reaching the summit, we should not be able to quit the perilous ridge before dark). I now understand why the guide had declared in such an offhand way that we could climb Gaki and reach the Onsen again in about 12 hours; his intention was to go as far as Kogaki only! From that point to the summit of Ogaki is about 1 ri, and proved to be the most difficult and dangerous scramble I have ever experienced amongst the mountains of Japan.

From Kogaki, after a careful descent to the ridge, steady progress was made, but two very awkward spears which blocked the way, and rose about 150 feet above the arête, had to be crossed. On our left hand a wall of rock frowned up, and on the right the small space upon which we stood fell away in a sheer precipice far in to the valley below. Ahead, and some 500 feet above the spot we stood, connected by a razor-back ridge about 400 feet below, rose the mighty peak of Ogaki, a truly inaccessible looking mass of rock, clothed here and there with stunted *haimatsu*, its summit broken into hundreds of weird and jagged crags and pinnacles, verily an impressive sight bathed in the golden rays of the afternoon sun. Hastily bolting a frugal tiffin, we with great care once more descended to the *haimatsu* line, slowly making the traverse to the foot of the main peak, clinging with our hands to the rock walls by means of the rough roots of the creeping pine while our feet were busily engaged in searching for crevices in the rock, and where there were none, we used the tangled roots as a sailor does the ratlines of his vessel. More than once the members of the party slipped, hanging by our hands for a brief space over the awesome abyss. This "piece de resistance" was at last conquered, and then followed a fierce climb up the final peak composed of smooth slabs of granite, worn slippery by the elements, and extremely steep—in fact this last lap of Gaki has a dash of the Dolomite in its composition. Slowly and steadily we progressed, having to cross one more ridge before reaching the highest point, but after a rough experience we stood on the summit of Ogaki at 3.20 p.m. 7 h. and 45 m. from Nakabusa Onsen, and 2 h. and 55 m. from Kogaki; the barometer gave a height of 9450 feet.

Awe inspiring was the view from the summit. Although to the N. W., and S. W., heavy banks of clouds obscured the more distant peaks, a fairly good view was obtained of the nearer mountains. To the N. towered the granite mass of Karasawadake—a giant of about 9000 feet. This peak is separated by a deep gorge from Gaki, the N. face of which falls precipitously into the valley of the Takasegawa beneath. Tsubakuro, to the S. W., showed up splendidly, and a fair view was obtained of Shimizudake, above which we could just make out the wooded crest of Ariakesan. Further to the E. appeared the smaller peaks of Marauosan and Amebikiyama. Directly

the N. shoulder of Shimidzudake, we slowly forced a way through the almost impenetrable forest, the *haimatsu* being of quite an abnormal growth, which necessitated our leaving the ridge at times and descending the steep mountain side. By dint of strenuous work on the part of the guides hacking a way through the undergrowth, and also by making such detours, we gradually approached the ridge of our peak.

Soon after eleven o'clock we reached the ridge of Gaki proper, and were favoured with a most impressive view ot the various forbidding and perpendicular spears which crown its knife-like arête. A thick mist now made its unwelcome appearance, and banks of clouds commenced to sweep over the mountain from E. to W. Pushing on, we encountered an extremely difficult piece of work in negotiating the ridge. We climbed over some of the spears, but others were so dangerous that to go over same would have taken much time, and necessitated an undue use of the rope. We therefore decided to traverse the more difficult of the crags. By clinging to the roots of the haimatsu while angling for footholds, we gradually worked our way along with a sheer drop of some 2000 feet directly beneath our feet. In this manner we overcame the difficulties presented by the worst of the spears, although even by adopting such methods we were obliged to have the rope out several times.

At 12.55 p.m. we reached the summit of a peak, height per barometer 9250 feet. This the guides stated to be the summit, and as a heavy mist continued to sweep over the ridge from the E., for a moment the writer believed them. However, as the spot on which we stood fell sharply away to the N., I enquired whether there was any way down should a climber wish to ascend Karasawadake. "*Iye*" (oh no), replied the guide, "*Sochira wa kenso no gake bakari de totemo ori raremasen,*" (There is nothing but a sheer precipice in that direction, and to descend is impossible.) Just as he spoke the mist cleared for a moment, and an alpine giant of forbidding appearance loomed grandly up in the near distance due N., a massive perpendicular wall of grey granite, its lower parts clothed sparsely with the ubiquitous *haimatsu*. I noticed the peak on which I stood was connected with the mountain so suddenly visible by a jagged ridge, but to reach this latter one had to descend an appalling drop of about 300 feet. "Isn't that the summit? I enquired. Then, in a hesitating voice, the guide replied: "*Ah, are wa Ogaki daga nobore so mo arimasen yo, nanishiro doko kara noborun da ka wakara nai domo kiken desu yo, sore ni hiashi mo mijikai kara noboru dake wa nobotte mo akarui uchi ni ano abunakashii yama wo koseruka doka wakari masen.*" (Oh, that is Ogaki, and quite impossible, as not only is it dangerous, but it is not known whether there is a way up to the top; besides the day is far gone and if we do succeed

a great pace. It was hard work scrambling round and over the huge boulders, often as large as a small Japanese house, and all the members of the party lost small portions of their epidermis through coming into too violent contact with the jagged edges of these huge rocky masses.

At times the high and perpendicular rock walls of the ravine closed in on the river, the waters of which thus contracted dashed through such gaps with a deafening volume of sound. We found it necessary to traverse these difficult places, it being quite impossible to negotiate the virgin forests flanking the stream, which would have entailed the loss of much valuable time. The torrent-riven gorge of the Nakabusa-gawa is of wonderful scenic beauty. Flanked by dense, and practically untrodden forests, the haunt of the bear, wild boar, fox, badger, etc., it is a fitting precursor to the wild crags of the "Demon" peak. About two miles from the hot spring there is situated a grand cascade, some sixty feet in height, and probably one hundred yards in width, the foaming waters of which gleamed snow white in the radiant sunlight. The rocky walls, slippery with moisture, we had perforce to climb, but everyone negotiated same in safety. Just beyond this spot we enjoyed a grand view of Tsubakuro, its crags and pinnacles jutting far above the lesser luminaries flanking the stream. Many of the deep rapids were spanned by flimsy bridges, these merely consisting of moss-grown pine trunks, rough hewn, and flung across the torrent. This entailed a good deal of "Blondin" work, and the F. G. was not above straddling across some of the more insecure bridges of this description. After ascending the river for about one and a half hours, the way subsequently lay over huge rock masses, and smooth boulders, until the actual watershed of he Nakabusa-gawa was reached, at the foot of a wild and precipitous gorge at 9 a.m. To ascend this a way had to be forced through matted and tangled undergrowth comprising bamboo grass, dwarf pine, hidden amongst which were huge moss-grown boulders, over which more than one of the party came a heavy cropper. Owing to the great height of the rank vegetation which was soaking wet in consequence of the heavy dew overnight, there was hardly a dry stitch on us. During the earlier part of the climb we had several steep rock ledges to surmount over which trickled tiny streams of water, but after we had reached a height of 7400 feet this rock work ceased as also did all signs of water.

At 10 a.m. we stood on the summit ridge which connects Tsubakurodake on the W. with Shimizudake on the E. A grand view was obtained to the N., the whole valley of the Takasegawa being spread out before us. Gossamer clouds floated in mid air above which jutted the summits of many a giant of the "Alps," but Gaki was invisible owing to the dense intervening forests. Skirting

Morning mists in the mountain valleys,
The first light of dawn on Yari

and the list could be carried much further, but to appreciate its range one must have an innate sense of "Inaka," and that of course, cannot be appraised. It is not worth moving from your easy chair for if it does not draw you—if your tastes are not as those of the Mountain Goats—it is worth crossing an ocean for if you desire it sufficiently.

GAKIDAKE.

The Mountain of the Hungry Demon.

BY

J. G. S. GAUSDEN, THE "FLYING GOAT." J. A. C.

DURING my holiday in the Japanese Alps in the month of August 1916 I visited Nakabusa Onsen, which hot spring is situated about 4 ri from Ariake-mura on the Shinano Tetsudo. Having succeeded in scaling Tsubakurodake, and hearing that Ariake-san was merely a simple scramble, I enquired of mine host as to whether there were other big peaks in the neighbourhood of Nakabusa which might be disposed of within the limits of one day. He stated that there was a tough proposition in the shape of a practically unknown peak situated some 5 ri N. of Nakabusa, and E. of Tsubakuro, known as "Gakidake" (The Demon Mountain). He furthermore guaranteed to procure a guide who knew the way to the ridge of this mountain, but was unable to inform me whether the person in question had succeeded in scaling the highest point. Later on I interviewed the proposed guide, an exceedingly hardy looking customer, and who, later on, proved himself to be a splendid fellow, as he accompanied me not only to Gaki, but also from Nakabusa over Otenjo and Jonendake to Kamikochi Onsen. He stated that he had climbed Gaki while out after *raicho*, and expressed himself as quite willing to make the trip. I therefore chose the best coolie from amongst the crowd I had engaged as porters from Ariake-mura to Nakabusa, and arranged to make a start at 7 a.m. on the 16th August.

It was a glorious morning with a sky of azure and "Old Sol" shining brilliantly. After leaving the Onsen, good progress up the valley of the Nakabusa-gawa was made, leaving the gorge leading to Tsubakuro on our left hand within about twenty minutes from the start.

For some distance a rude path had been hacked through the tangled woods on the banks of the river, but we were soon compelled to take to the bed of the stream which roared down the ravine at

more remote wilds the purposes of the new path have been well set. Arriving at the top of the way down to Nakabusa Onsen before noon, the hunter dropped his pack and we continued along the ridge to the fine granite peak of Tsubakuro-dake (9000 feet). We saw where the old track (there was then no path) led under the base of the topmost crags with a headlong slide of granite detritus to cross and it must have been a magnificent scramble round and up them to the final summit where the rocks are glistering white in the sunshine.

Returning to the dip we lunched and started swinging down the very steep zigzag path to Nakabusa Onsen, which we reached about 3.30, and were given an excellent room and the hot sulphur baths were very welcome. Here the water comes out of the rocks in about twenty places fully boiling, and the Onsen is an extensive range of rambling buildings with a special section for particular visitors. It is situated in a beautiful pine clad valley with the rocky mass of Ariake-san guarding it on one side and the slopes of Tsubakuro on the other.

Next morning a tramp down the valley with the foaming torrent below us and then across a delightful stretch of open moorland landed us at Ariakemura in time to take the noon train at Matsumoto, where the Professor had already arrived after successfully negotiating the Abotoge and the hot springs of Shirahone, and adding about half a dozen new specimens to his collection.

Next morning we caught the 7.00 a.m. train to Nagoya and arrived back in Kyoto at 9.00 p.m. eleven days from the start, out of which nine were in most perfect weather.

Talking with a Japanese climber the next day about the grandeur of the Japanese Alps, he told me that it was a curious fact that on all the highest and most characteristics peaks of the mountains which faced the Sea of Japan was to be found a similar form of little Shinto shrine with the same inscription thereon, which evidence proved had been placed there years before the present foundations of the Empire, showing that for some ancient race the ascent of the high hills and the establishing there of the signs of their faith was an aspiration which has continued throughout the centuries, and is still alive in the journeys of the pilgrim clubs of to-day.

No doubt those early peoples found in the wild natural beauty and impressive vastness of these mountain ranges the same illimitable sense of grandeur, which attracts the mountain lover to them to-day. They are a field of splendid endeavour in a region of unsurpassed natural beauty, which is as varied as it is grand.

In parlance one might name :—

The sun on the red pines near Shimashima,
The silver birches at Kamikochi,

pine scrub to the fire. The stars shone bright and clear and the storm had completely passed.

At 4.30 next morning we were up to cloudless sky and mounted the nearest summit to watch the first rays of the rising sun touch Yari. Slowly the pink flush of the dawn lit the horizon and in a changing sea of colour the first shafts of sunlight struck the Spear Peak in a blaze of purple, red and gold. Then as the day broke on the waking mountain world, we saw below us a sea of fleecy clouds stretching from horizon to horizon with the rising sun tinting its waves with rose and gold and above which all the most famous peaks of Central Japan rose in massive grandeur. To the south, Fujisan showed purple and white from its swelling base to the cone of the summit, eastward Asamayama was also in full view for two thirds of its height, the smoke from the crater rising in a cloudless sky. Around it were Kusatsu Shirane, the Nikko range behind in the far distance, Yatsugatake, Koshu Komagatake, Akaishi-san and the group near Fuji. Further round the Shinshu Komagatake, Norikura, a magnificent view of the full sweep of Ontake, the long ridge of Kasadake culminating in the rounded top of the end peak, the whole of the Hodaka-Yari range and all the mountains between Renge and Tateyama (magnificently streaked with snow), the whole against a perfect blue sky. Northward were the Nagano mountains and nearer to hand Yeboshi-dake, which Daunt and Gausden had tackled this summer—a beautiful peak.

It was the view of a lifetime, the whole air having been washed clear by the preceding day's storm. It took us a full three quarters of an hour to take in the splendid scene and we then descended and started to clean up after 36 hours in the hut. After a leisurely breakfast, we started along the ridge, the whole unclouded panorama of mountains being still around us, and it remained so until noon before the clouds lifted to the higher levels. Arriving at Otenjo, we made a detour of a quarter of an hour to the summit (9300 feet) and then dropped down the still good mountain path to the "Kiridoshi" break in the ridge, which aforetime presented a bit of hard hand and foot climbing, but which has now easy steps cut in the red rock. Steadily we tramped along the path in the clear mountain air. The way is simple now and a detour is made round all the rocks over which Daunt and Gausden found the way in their climbs of Tsubakuro and Otenjo described in Vol. V of "Inaka"—in fact the whole way from Kamikochi to Nakabusa, via the Otenjo ridge is a fine walk along a good mountain path. One views these innovations with a jealous regard for the majestic solitude of these grand mountains and a sincere wish that none but true mountain lovers will ever find their way thereon, but if the Otenjo ridge serves to spur these latter on to further explorations into the splendid and

authorities until we reached the main summit of the Otenjo ridge at about 8000 feet. On our left the Hodaka-Yari range was in full view, and the hunter pointed out to us the difficult route from the far side of Oku Hodaka along the precipitous cliffs to the impassable cleft and a descent on to the perpetual snow-fields and then up again to the Yari ridge, from whence the going is easier. He said the first part was a very difficult bit of climbing.

We reached the Ninomata hut about 3.30 p.m. coincident with the first signs of a stormy sky, which gradually worked itself up to mist and rain and the beginnings of a gale. There was a weird homeliness about the shelter of the primitive hut which had nothing in it besides bare boards and the hook for the kettle. The stone walls are however thick and strong and the wooden roof tight so that we felt quite happy around the cheerful wood fire waiting for the snow to melt in the kettle (there is no water on this ridge) while the wind howled and the rain lashed outside. We learnt afterwards there was a typhoon at Kobe on the night in question and we must have had the tail end of it. The hunter said that if the weather did not let up next day we had better not stir as the slopes were steep and we might be blown down. I was also curious to wait for the clear morning view which is the reward for climbing this ridge. The next day broke with no abatement in the storm, and a peep outside shewed a thick enveloping mist so there was nothing for it but to wait in the hut and hope for clearance on the morrow. The hunter and Kato were short of rice, so I brewed them an excellent soup from melted snow water, "steero" cubes and dried pea flour (petit pois) of which fortunately I had surplus supplies. Incidentally these cubes and dried soup packets with some veal and chicken loaf tins, bread, butter and excellent Japanese marmalade, were all that we needed to make ourselves fare well in conjunction with available Japanese food, from the time we left Matsumoto where bread is obtainable. At Shimashima, Kamikochi and Nakabusa one is well served in the way of edibles (Japanese) and the mountain trout at Kamikochi are a rare treat in themselves. Fortunately the bread was wrapped in a copy of the Chronicle, and I beguiled the time by reading it from cover to cover, whilst the two Japanese vied with each other in singing all their well known songs and improvising others in quite a tuneful way, which admission promises a beatific state of mind, which speaks well for the blissful calm induced by a sojourn in the Japanese Alps. The wood fire of "haimatsu" lent a cheerful blaze and the smarting of the eyes due to the acrid smoke was a minor discomfort. In the afternoon the storm began to die down, and a break in the clouds at sunset shewed possibility of finer weather which was justified by a peep out in the night watches, when the hunter gave the much needed hourly replenishment of

fit for the Gods. The Professor netted some good specimens but try as we could we were unable to catch the beauty of the valley, a butterfly with wings of a most beautiful magenta edged with black. We only saw three on all our tramps, and these butterflies appeared never to stop still for more than an instant.

The next day in still glorious weather, I started out on my tramp to Nakabusa via the Akazawa rest house and Ninomata hut. The Professor was so keen on the wealth of "lepidoptera" (I trust, if this meets his eye, I am scientifically correct) that he refused to visit the barren high ridges and said he would go round by the forests of the Abe-toge and Shirahone and meet me in due course at Matsumoto.

A nine o'clock start therefore found us setting off in opposite directions. I had a glorious walk through the woods, past the Tokugo hut and along the banks of the Adzusagawa. After lunch and a pleasant sleep :—

> "Where the high pines and birches silver lined
> With branches overhead had made
> A hospitable shade
> And where by curving bank and hollow bay
> The dancing waters murmured on their way"

we continued on to the Ninomata-gawa, passing on our way the Byobu Iwa and our old route to Yari, whose spear point we saw clearly vignetted through a dip in the mountains, and then onwards to the Akasawa rest house, which we reached at 3.30. This house is just beyond the Akasawa-Iwa so well known as a sleeping camp to the early climbers of Yarigatake. It was built up last year, and is a fairly large hut, where one can sleep on futons and obtain rice, various canned stuff (Japanese), condensed milk and drinks, as required. The summit of Yari can be reached therefrom in three hours, and it makes a most delightful and easy walk from Kamikochi to the rest house, the latter part of the way being through a natural garden of bluebells and wildflowers.

Next morning—weather still magnificent—we retraced our way to the Ninomatagawa and there struck the route for the Nakayama-toge. It is a beautiful walk along a good path, up the valley and then to the right over the toge. We reached the upper levels about 12.30, and a turn in the road opened out a splendid view of Jonendake clear cut from the dark valleys below to its bare swept summit (9000 feet)—like some mighty isolated rival to the massed ridges of Hodaka and Yari, which it fronts over the intervening Nakayama toge. Here we lunched and afterwards pursued our way above the tree line, and along the bare slopes gradually ascending upwards by the good mountain path, which has recently been completed by the

mass beyond, as if Nature had rightly determined that, like all things most worth striving for, the splendour of these mountain ranges should not be too easily attained. The view of the granite peaks and slopes of Hodaka from the top of the pass, in a clear cut sky was superb, and the Professor who had been gradually reaching melting point on the steep zig-zags of the last hour's climb appreciated at once that his trip was worth doing. The sight of that glorious mass of mountains with its granite slopes meeting the pine forests and the sweep of the Adzusagawa below is one of rare magnificence.

After lunch the easy delights of a swinging tramp down to the Tokugo hut lay before us, and we reached Kamikochi-Onsen at about five o'clock in good time to bathe in the hot waters and enjoy a lazy evening in the woods. The beauty of the trees and encircling mountains of this wonderful valley is an unfailing charm.

Next day we awoke to still airs and a hot summer sun. The professor attracted by the smoking summit of Yakedake (7500 feet) was bent on climbing there to examine the geological features of the volcano, whilst I, with visions of the Kusatsu Shirane, Bandai, Nasuyama and other volcanoes, decided to leave him to his sulphurous wanderings and explore the Hodaka range. We had a delightful tramp through the forest where, in the upper stretches, wild black cherries, black currants (of gruesome colour which but for the hunter's assurance I should have avoided) and big ripe raspberries grew in profusion, proving gratifying thirst quenchers.

The climb up the ravine was slow work in the grilling sun, and by the time we reached the lower ramparts of the summit ridge Oku Hodaka was still some hours away. We therefore decided that it was too late to reach it that day, so tiffined and made an easy return. From the notes in the Climbers' Book at Kamikochi, it appears that the best way to Oku Hodaka is by turning off to the left, and this would certainly be much shorter although a good deal would probably depend on the state of the falling rocks and stones, which are so easily set moving on these steep granite slopes. Some day, if ever I have time to spare at Kamikochi, I intend to explore along the pine ridges behind the Onsen and ascertain whether the higher sections of the range cannot be reached that way.

Upon my return I found the Professor with a Mephistophelian gleam in his eyes, and the reek of Tartarus about him, as he learnedly discoursed to me on subterranean pressures and gas vertices. Apparently he had had a most interesting day during which he discovered some rare species of butterflies and he, there and then, had the staff busily engaged in preparing a net for the morrow which we spent in luxurious ease in the glorious woods while the hunters fished for trout in the Adzusagawa and provided an evening meal

Next morning it still looked as if:—

> "All day the low hung clouds would cast their glowering fullness down"

but the limited time at our disposal made it out of the question to consider any postponement for weather, and off we started for Nagoya by the day express.

By the time of arrival Dame Nature was all smiles again. It made one feel good to see the crowds of eager mountain pilgrims thronging the station in their white garments and big straw hats and waterproof mats. They seemed greater in number than ever this year, and Mr. Hamaguchi confirmed afterwards that every encouragement was being given to these expeditions.

We were soon amongst the foothills of the Alps with the familiar mulberry plantations spreading over the intervening plains, and presently the foaming green waters of the Kisogawa appeared beneath us as the train climbed up the divide to Kiso-Fukushima, and then down the far side in the darkness of the summer night to Matsumoto, where thanks to Daunt's foreword of introduction, we found a pleasant welcome awaiting us from the hotel, and an excellent sleep with the luxury of silk futons left nothing to be desired.

Next day we were up betimes to a fine morning and a short day, with tiffin in the pine forest, brought us to our old friends of the Shimidzuya at Shimashima in the early afternoon.

The lines of the sloping hills with the glory of the setting sun shading their splendid greens were as "balm in Gilead" to our thirsty souls after two years sojourn in the China plains. Maruyama-san, trusty and most careful guide of previous expeditions, was at the entrance to the village, on the roadside bank, awaiting us with a hearty recognition and welcome, and we realised that we had come into our own again.

Here I must introduce the Professor—naturalist and entomologist—long versed in the fauna and flora of the ancient kingdom of Cathay—who fired with my keenness and glowing description of the Japan Alps had decided to forsake wife and daughter after comfortably bestowing them in the salubrious atmosphere of a China seaside resort, and risk his life in the mountain fastnesses. His family having seen pictures of Yari and tales of its precipices dropping sheer thousands of feet into the depths below had visions of him chasing the flitting butterfly from the topmost peaks and overbalancing in swift and direful descent, so that it was only after most solemn promises on my part that he was allowed to depart.

Next day with the weather "set fair" we started out from Shimashima and commenced to find our mountain legs on the Tokugotoge. This pass of 7200 feet is a fitting barrier to the mighty mountain

KAMIKOCHI TO NAKABUSA.

BY

T. H. R. SHAW.

ALTHOUGH this short account of a ten days' summer expedition does not aspire to "mountaineering in the high Alps" it may perhaps serve as a record of an interesting and by no means arduous walking trip on which one of the most magnificent panoramas of mountain scenery may be viewed with the whole stretch of peaks from Fujisan to Tateyama raising one's enthusiasm to return again and again to this splendid region of virgin forests and rocky heights.

A short respite from the grilling heat of a China August found us landing on a windy morning in the land-locked harbour of Kuchinotzu where the sleepy little village, surrounded by its pine clad hills and blue water, awakes on rare occasions to the bunkering of an ocean steamer which has not proceeded to the modern coaling station of Miike further up the Gulf. The Customs examination of baggage was conducted with a cathedral calm, and by 11.30 we had boarded the small coasting launch and steamed along the coast to Shimabara which we reached about 2.30, and thence by train to Isahaya on the Kyushu main line. Here we spent the night most comfortably, and caught the day express at noon, arriving at Kobe the following morning at 7.30.

Thanks to my good friend Daunt, who when "the Japanese Alps" are mentioned would, I believe, move heaven and earth to help the traveller on his way, all arrangements for our trip were right up to time, and after lunch and a yarn with him about the summer's climbing we were off to Kyoto by the early afternoon train where Mr. Hamaguchi of the Miyako Hotel—another keen lover of "Inaka"—had two active ricksha men waiting to accompany us, chiefly to supplement our lack of the Japanese vernacular, which long residence in China had brought about.

They were a merry pair—"Kato and Ai san"—and their willing attention and thorough enjoyment of the expedition contributed much towards its success.

Upon arrival at Kyoto the rain started to pour down in torrents, and I fell asleep with dreams of wash-outs on the Central railway and innumerable watery disasters to retard our progress.

THE ANNUAL GENERAL MEETING FOR 1919.

The Annual General Meeting of this Club for 1919 will be held on May 4th (Sunday) at the Sankaido Hall, Aoibashi, Akasaka, Tokio, when an exhibition of the ancient and modern Mountain Maps, both Japanese and foreign, will be shown to the public from 10.00 A.M.

Lectures on the Mountain Maps and Survey Works will be given at the same Hall from 5.30 P.M.

All Members are invited to attend to this meeting, and are also requested to send to the Club before May 1st all rare Mountain Maps or publications regarding the Mountain Maps and Survey Works in their possession, and these will be returned from the Club when the exhibition is over.

CONTENTS.

	PAGE.
KAMIKOCHI TO NAKABUSA—By T. H. R. Shaw . .	1
GAKIDAKE—By J. G. S. Gausden	8
A CRACK WITH KAMONJI—By "Blue Dragon Fly." .	14
OF THE ORIGIN OF THE TERM "THE JAPANESE ALPS"— By the Rev. Walter Weston	17
CLUB LIBRARY	18
REVIEWS	20
NEWS FROM MEMBERS	22
CLUB PROCEEDINGS	23
LIST OF THE CLUB MEMBERS	24
JAPANESE PART OF THE JOURNAL.	25
THE ILLUSTRATIONS IN THE JAPANESE PART . .	25

The Journal of the Japan Alpine Club

SANGAKU

(*English Supplement*)

Vol. XIII 1919 No. 2